馬糞の燃料

には附近の蘆、三道嶺より來る、石炭、其他馬糞を用ひ、飲料は泉水に頼るも鹹味薄く、稍佳良なり。

## 纏頭の耕地

三道嶺の石炭礦

五日行程約七里にして三堡に、六日行程約十里にして三道嶺に宿す。三堡は人家七十餘戸、纏頭依然其の多數を占め、附近に一萬餘畝の耕地を有し、收穫物燃料、飲用水其の他略〻二堡と同じ。三道嶺へ達する途中道路二條に分れ、一は西北に向ひて沙泉子に達し、一は即ち西西北に走りて三道嶺に到るものとす、此地は人家僅に九戸、又僅に七十畝餘の耕地を有して、纏頭之れを耕し、其の西北約二里の所より石炭を產す。哈密回部王之を所有し工夫の採掘に從事する者五十名、一日能く一千餘斤を出すと。

### 二　流沙と羊の雨

七日午後三時二十分三道嶺を發し、鴨子泉、七個泉を經て行程約十二里、八日午前三時三十分瞭墩に達す。此の所は人家十二戸(旅店五戸商店三戸)ありて、一旗の兵を置げり。一旗は百二十五人の制なるも、實は三十五人に過ぎずして、守備(中尉相當)一名之を率ゆ。地質は黃土肥沃なるが如きも、水なきが故に耕作すべからず。由

## 水の必要

土壁の菜園

哈密以西の氣候、三道嶺

一年降雨二三回

暴風の襲來發砲の響

瀚海と流沙

來官憲屢〻引水に勉めたりしも、如何せん大風の爲め、工事倏ら埋沒破壞せられて、遂に成功し得ざりしと云ふ。現に其東南側に風害防禦の爲めに土壁にて圍ひたる數畝の野菜園を見る。然れども五、六、七の三箇月間は、缺水期なるに依り、此の間に收穫すべき菜蔬は、全然之を得ること能はず。獨り其の東側に一泉水ありて、四時涸渴せざる故に、僅に以上の人を棲息せしむ。

此地三、四月乃至七、八月の交は降雨期なるも一年漸く二三回に過ぎずして、他は概ね旱魃なり。雪は大抵十月頃より始まるが、是れ亦雨と同じく二三回にて絕ゆ。恐るべき大風は、四季を論せず往々當地を見舞ひ、其の最も激烈なるは、三、四月と九、十月との二期とす。襲來の前兆としては、遠地に發砲するが如き音響を聞くと。白日俄然暗夜と變じ、砰磕の響、淅瀝の音、天裂け地破れたらん如く、捲き揚げられし砂礫は雨と降り、降られては捲かれ、捲かれては降り山大の沙丘瞬間に消え、無碍の平沙忽然高丘を現出す。古人沙漠を稱して流沙と云ふ實に故あるなり。瀚海若し潮海と異ならずとせば、家屋敢て船舶と擇ぶ無し。柱折れ屋蓋浚はるれば、運の拙きこと猶錨を斷たれ舵を破られし船と同じ、之を三道嶺に於ける暴風の狀態

十三間房の風

とし、毎年幾十百の牧畜をして、或は吹き拂はれ、或は砂中に埋沒せらるゝ事ありて、慘絶、凄絶、酸鼻に堪へざらしむと。然るに之に反し斯く大風の中に、往々空中より數十の羊群天降り、土人は不時の獲物を喜ひ、大牢の美味に舌鼓を打つの奇を演出すること有りと。さるにても斯る怖るべき危險の地に在つて依然其處に棲息する彼等が心事果して如何そや。

曩に三道嶺への途中にて岐れたる西北路は、沙泉子より鴨子泉の北西に到りて本道に合し且つ三道嶺より石炭採掘地に達する別路は、瞭墩に於て本道に合す又瞭墩より西南に向ひ、十三間房へ三日、夫より闢展へ三日、合計六日の行程路にして而も通路平坦、水草共に潤澤なるも、彼の大風の多きが故に到底車輛を率ゐ難きのみならず、能く其の狀況を熟知する者に非ざれば、通過し得べくもあらずと。聞くすと云へり。

## 三　馬駑子とは何ぞ

八日午後三時五十分出發、同十二時行程約十一里、一碗泉に到りて宿す。此所には一旅店及一馬駑子あり。馬駑子(馬牌子又は馬堡子の轉訛ならんか)とは何ぞ、曰く脚夫の繼立所にて、即ち驛傳なり。(蒙古人は烏拉と稱す)新疆省内は一般各站(站は驛なり)に之を設け、一人の師爺即ち司事は、三四名の脚夫(乘馬)を監督し、銀卅五兩の月俸を受け、内馬糧及脚夫の給料若干を拂ひて、殘餘を自己の所得とす。但し脚夫の給料は、一年銀四十五兩遞送は一日一回、或は四五日に一回等、公用書翰の有無に依る。

馬駑子

脚夫の給料

此の地一帶東北の風多きも、亦前者の如く大なること無しと。地形は平坦闊濶なる沙礫地にして、所々砂丘起立し、概ね南北に走り、飲用には二井水の四時湧出して其質佳良なるもの有り、燃料は三道嶺より石炭を仰げり。

翌七個井に向つて出發、行くこと約二里、數多の大沙丘南北に並走し、比高約五十米突、其れより道路は山中に入りて、約七里、車轂盧の狹谷に進む。谷間僅に十五乃至三十米突、南側概ね急傾斜、北側稍々緩に、其の比高約百米突内外に過ぎず。斯くして狹谷を出づれば、則ち七箇井の沙原とし、一碗泉を距る十七里、人家四戸、一棚(四名)の騎兵ありて、飲料井水稍々良く、燃料は附近の紅柳を採りて不足なし。此地は天山北路の故城及び巴里坤に通ずる大道の分岐點とす。該道は冬期雪深くして

天山北路への岐點

車馬を行るべからず。氣候は四面皆山（比高數百米突に過ぎず）なるが故に稍〻暖和に、雨は、六、七月七、八回、雪は十月以降、翌年二月に亘り、毎月二三回降すと云へば、雨雪共之を他に比して多しとす。風は四季に關せざるも、三四月の交は殊に勢を逞うすと。

十日行程六里弱、東鹽池（トンエンチ）に。十一日、約十七里、西鹽池（シーエンチ）に泊す。東鹽池を西に距る約二里、其の西方巍峨たる岩山の南北に横走するもの、即ち天山の支脈にして、南走一里餘、茲に東西二脈に岐れ、其の東脈は七箇井平野の南壁を、其の西脈は西鹽池平野の南壁を爲せり。以上二地は往時鹹湖を湛へたりしものゝ如く、世界地圖中、大湖を描寫しあるもの有るも、現今は之れ有らず。惟ふに兩地共、四圍山にして一小盆地を成すを見ば或は湖水の跡に非らざる無き乎。

圖上の湖水今は磧原

**四**　一切不管而管

官店の樂書

十二日午後三時二十分西鹽池を發し、小嶺を過ぎ沙磧を西南に進むこと約十九里、土墩子（トートンズ）の官店（一戸のみ）あり、室に入りて小憩す、偶見る壁間次の落書あり『設房時用官費其後掌櫃的自修理之儲錢不儲皆在自己官一切不管然有大官來見其房之破所或冷遇即罰之』と豈支那的消息を漏らすものならずや。

哈密出發以來、依然戈壁地帶たるを免れざるが、而も天山の支脈南北に走せ、日々其の餘勢の山を踰え、水を涉りて戈壁地帶中、復た戈壁の念を懷かず、久しく戈壁に飽きし予は、固より風光の掬すべきもの有らずと雖も、暫く上下の曲線に慰められしに、今や再び荒涼たる沙漠を漂泊せざるべからず。土墩子を發し更に行くこと約四里、一小河を渡る。幅約六米突、春時は融雪水あるも、他季は絶て無し、又行く一里餘漸く治格墩（ヤタトン）に入る（西鹽池より約二十四里）時に十三日午前七時なり。附近人家部落相合して百十九家、纏頭最も多く、漢回之に亞ぎ、耕地千數百畝、麥、高粱、野菜の類を耕作す。飲料は三泉二井ありて、泉水は清良、井水は鹹味を含めり。此地二棚の馬兵を置く（毎兵毎月馬糧と共に五兩、什長六兩、哨官三十五兩を給せらるゝと云ふ。東方十三間房を經て瞭墩に通する捷路の分岐點とす。

兵士と月俸

治格墩より畫行騎馬による

**五**　畫行闢展城（ピエンチン）に入る

十四日午前六時四十分、治格墩を發す。肅州以來晝夜を轉倒し、即ち晝は寢ね夜は行くを常とせしが、此日より晝行を始む。夜は何處迄も陰氣なり。晝は何と無く陽氣なり。車を棄てゝ馬に鞭ち、左顧右眄、心の駒の勇むを覺ゆ。前程も從來と

同じく、沙漠なきに非ざるも、各沙島間は近く相望み、又大戈壁を間すること無し。隨て風害の憂なく、細流多く、牲口の渴を醫するに足るもの有り。是れ即ち夜行を棄て晝行を爲したる所以なり。

**闢展城**

銀子線紅家盧、大墩、三十里大墩バチヤン（纏頭語）を經て行程約十二里、闢展城に入る。此地人家漢人六十餘戸、湖南湖北の人多く、陝西人之に亞き、回民七十戸、纏頭六百戸、而して漢人は概ね商、纏頭は農三分の二、餘は商を營み、學校は皆無とす、唯漢人の富者は、其の子弟の爲めに書房を設け、師を聘して四書五經を敎ゆるも、回民に在りては更に此事なく、纏頭は小兒五六歲に至れば、哥蘭經を暗誦せしむる一事あるのみ。

**漢人と纏頭の敎育**

**地形**

地形は、北に遠く天山を望み、南は沙丘相重なり、東は平坦なる沙地に屬し、西に一大沙丘横りて、一盆地を形成するも、其の中央部は臺地を成し、城は即ち該臺上に築かる。天山麓より流れ來る小川は此の臺地の爲め分流して、東西の門外を南に通じ、南沙丘と西沙丘との間を縫ひ、遙に沙漠中に沒す。其の沿岸楊柳多く、且つ一萬五千有餘畝の耕地を有し、一畝地毎年穀類を收穫する五六斗、地價三乃至四兩なり

**産物**

と云ふ。産物は羊一年十萬餘頭を出し、棉花一萬斤、乾葡萄十萬斤、以上は其の主なるものにて、他に石炭、鹽等を産す。輸入品は口内より來るは、日本製「マッチ」一包銀一錢、同白布一尺一錢一分外に四川の緞、綢、繻、茶等西より來るは皆露貨なるも一の露商なく、皆纏頭の之を商ふのみ。通貨は制錢を用ひず、紅錢或は圓銀（烏魯木齊製造）を使用す。

**交通路**

此地驛傳の設け有るも、電報局を置かず。道路は西方は大道吐魯番に達すべく、更に西南魯克泌を過ぎて同じく吐魯番に到る車道あり。

**行政**

城内に鄯善縣衙門あり。當地の纏頭は、從來魯克泌回部郡王の統轄に歸せしも、收斂甚しき爲め、人心離散し、其の顚末を巡撫に訴へたるより、一昨年即ち明治三十八年、新に鄯善縣を設けて其の管轄に歸せしむ。斯くて回部郡王は既に其の行政權を失ひしか、宗敎上の威嚴は、僅に之を保特し在りと。蓋し纏頭は固く自己本來の服裝習慣を保持するも、回部王は概ね辮髮清服を裝ひ、次第に支那化するか故に復た昔時の如く同族の尊信を受くる能はざるのみならず、次第に忘れられつゝ在らんとす。

**回部郡王と民心離散**

軍隊は馬兵十名、巡警亦十名あるも、前者は送客の事に任じ、後者は市街の裝飾に過ぎず。

口碑の傳ふる所に據れば、當地南方の大沙丘は、遙に甘肅の敦煌に連り其の中央部に當りて、往昔唐朝の一營所、存在せしが、一朝大風の爲め深く沙底に埋沒し、數千の生靈永く幽冥に迷ひ、時に凝て啾々の哭聲となり、發砲の如き響を放つ、斯の如きもの一年一回、若くは數年一回之れを聞くと。惟ふに戈壁中、時に大風の起るに因るか或は別に空氣の作用、天候の異變等に因て、何等かの音響を耳にするものならん。

口碑　埋沒せる唐朝の營所

氣候

氣候は一般温和にして、五六月を雨期とするも、降量甚だ少く、年中遂に一滴をだに見ざること多し、然れども天山の融雪ありて、四時水の缺乏を告ぐること無し。雪は十月より降り始むるが、毎年一二回に過ぎず。大風は二、三、四月の交最も繁しと。

租稅

鄯善縣即ち闐展を中心とする一帶の地方の租稅は、之を上地、中地、下地の三に分ち、一畝に付毎年六斗、三斗、一斗五升と定め、納期は十月の初めより起る。各部落の納穀は、鄉約（村長）の處に集め、鄉約更に縣庫に納む。其他雜貨牲口等價を按じ、大凡一兩に對して五分を課稅す。

鄯善國の所在

闐展城は乾隆中の創設に係れり。其の此に鄯善縣を置くもの、蓋し舊鄯善國の首府なりしに因りて然るに非らず（鄯善國の盛時威令此及びしものならん歟に）。其の鄯善國は、蓋し今の羅布淖爾の東南方に當るべし。史を按ずるに、鄯善本名樓蘭、漢の昭帝元鳳四年（紀元前七十九年）始めて鄯善と稱すと。唐書地理志に「鄯善は蒲昌海の南三百里に在り」西域記に「玉門陽關を出づれば鄯善に涉り、北は伊吾に通ずる千餘里、是れ其の西域の門戶、即ち蒲昌海以東皆其の地」西域記に「于闐東行流沙に入る。沙礫流漫、行人路に迷ひ、指す所を知る無し、行く四百餘里、覩貨羅故國に至り、夫れより東行六百餘里折摩馱那故國に達す。即ち沮末城とす。城郭蕭然、人烟斷絕、尙ほ東に進む千餘里、納縛波國、所謂樓蘭に到る。此の國沙磧二千里、國久しく空蕪、今何に在るを知らず」と。

憶昔樓蘭崛起秋　胡人萬馬牧涼州
我今來訪當年跡　落日荒烟照古丘

十五日午前九時二十分出發、行くこと數町、幅約二百米突、水幅約十米突なる無名河を渡り、次で十數町、再度幅約二百米突、無水の河を超え、ハントン村、アルクン村を經て行程約十里連水泌に到りて宿す。

全村纏頭農耕と牧畜

ハントン村は路上數個の密集人家より成り、全部を算すれば五百有餘戸、耕地八千畝あり。アルクン村は人家四百餘、耕地五千餘畝、連水泌（レンスイチン）は人家四百餘戸、耕地一萬畝を有し、旅店七八戸を設けたり。以上共に飲料には河水、井水を併用し、燃料には柳、楊、榆幷に天山南麓より出せる有烟炭を用ひて供給餘あり。

十六日連水泌を發して無名の一小河を渡り、蘇巴泌（スパチンミンチン）、勝金臺（ションチンカイ）を經て、行程約十二里、勝金口（ションチンカオ）に到る。此の三部落は皆纏頭のみにて、農業に從事し、獨り勝金臺附近に於て羊、牛、驢、馬を牧畜するを見たり。

十七日三十里墩を過ぎ、行程約前日と同じく、新疆の一都會たる吐魯番城に着す。

## 六　吐魯番

吐魯番（回語都府の義）は東經八十九度四十四分、北緯四十二度四十分に位置し、北京を距ること實に千二百六十九里に在り。城は廣安と稱へ、壁の高さ一丈六尺、頂の厚さ一丈四尺、底の厚さ二丈、周圍半里餘あり。東は茫渺たる沙漠の地、西は三里弱を隔てゝ天山支脈南に向ひて突出し、西南一里餘の地點に及んで終り、比高數十米突を有す。南は約十七里餘を離隔して一山西北より東南に横り、北は三里弱、天山の麓に到る。又東北方には、天山の支脈更に東方に走るか故に地形は三面諸山の影響を受け、自ら一高臺地を成形し、城は其の臺上最高の地に在りて、東は稍々急なる傾斜直に沙漠に接し、西北は緩降して山麓に連り、南は傾斜緩く延ひて約一里の地點に及び、俄に急傾斜に變して砂礫地に連り、再び漸次上傾斜と爲りて山麓に到る。

地形

地質及河川

地質は黄土にて、處々硝及鹹を含有し、數條の河川皆天山麓に發して南流す。就中最大なるは、西方一里餘の邊を流るゝものなりと雖も、其れすら水幅僅々六米突に過ぎず。是等諸川は、何れも徒渉し得べく、兩側には、數多の柳樹を並植せり。

漢城と回城

城は漢城、回城の二個ありて、漢城は回城の東方數町の處に位置す。人家は回城に多く、漢城に少なし。漢城の南門外及回城の西門外には人家稍々密に臺地は沙地、大部を占めたり。

交通路

交通路、東は哈密、西北は烏魯木齊、西南は哈喇沙爾に通ずるものを主要路とし、別

に東南魯克沁に、東北古城に達するもの等あり。

哈喇沙爾街道は、九日行程、約我八十五里にして、托克遜より山路と爲り、岩石甚だ多きも、蘇巴什に出つれば、平坦開闊を以て哈喇沙爾に入る、又魯克沁街道は、我約二十里、頗る好良なる路面にして大車を通ずべく、又古城への道路は、山中の一小路に過ぎず、行程は五日を要し車は勿論、馬と雖も冬季十一月以降四月間は通し難く、險山相望み、峻嶺相踵き、全程人家なし。故に土人も能く知るもの少なしと。

**氣候**

市街は臺上に在るに拘らず、新疆省都會中、最低に位置し、海拔僅に三百尺、其の南方なる鹹湖は海水面より低きこと實に百五十尺餘、故に冬季は比較上溫暖なるも、夏季炎暑の酷烈は人をして日中地上に棲息し能はざらしむるに至る。故に土民は皆其の屋下に穴居し、纔に天公の赫威を避く。雨あれば五六月、雪あれば十月、而も少量にして、遂に全く降らざる年ありと。土民は雨雪共に之を喜ばざるは綿及葡萄の產額を損ずればなり。解氷期は二月、風は四五月、特に西風多し。夏季最暑期は七月にして、冬季最寒時は十二月末とすと。

**綿花と葡萄**

物產は棉花を最とし、每年產額一百數十萬斤に達す。此地の葡萄は、哈密の瓜と共に、美味を以て其の名高し。顆々紫色濃に、果粉銀の如く、大粒のもの少きも水分充ち滿ちて、津々たる甘味言ふべからず。土人は之を乾して四方に輸出す。年額七八十萬斤あり。其他鹽の產出あり。之には二種類ありて、一は赤鹽と稱し結晶中赤土を混し、水に溶解して用ゆ。西方二里餘の山中に出づ。一は白鹽にして結晶甚だ美に、些の土を含まず。南方、十餘里の處より產せり。又麥、麻、石炭等にて、石炭は有煙質に屬し、北方十三里餘の山麓に出で、一日採掘約一千五百斤と云ふ。

**鹽石と白鹽**

**漢人と回民**

人家は約五千戶を有し、內漢人百二十餘戶、漢回千三百餘、他は總て纏頭とす。外に露商四十餘戶あり。漢人は湖南、湖北の人多く、直隸、甘肅人之に亞ぐ。文武官は湖南人の占むる所にして、他は擧げて商業に從ひ、農民は纏頭八分、漢回二分の比なり。

**三人種と敎育**

敎育としては觀るべきもの無く、唯漢字を敎授する公立の五學堂、城內に三個、城外に二個ありて、敎師は漢人、之を擔當し、生徒は漢人及漢回の子弟とす。其他回經を專授する三彎ありて敎師生徒竝に漢回とす、纏頭は學校の設なし。

**輸出入品と價格**

商業は沈靜にして、一般に振はず。貿易上の權力は、纏頭の占む所と爲りて、現に

二三の大問屋を有し、毎年二回數萬圓の露貨を取引すと。漢商は繡緞、綿布類及內地の諸雜貨を店頭に陳列し、漢回は經頭及漢人の貨物を仕入れ、總に其店を飾れり。輸入品は露國貨物、即ち布類、特に更紗、綾織綿布、毛氈絨、天鵞絨（一尺二錢五分）紅布、白布（一尺一錢）砂糖（百斤二十兩）洋鐵、「マッチ」（一包六分）洋蠟一包二錢五）其の他茶碗、水差、鐵葉槽「バケッツ」等、又輸出品は、綿花、乾葡萄、鹽、羊毛等とす。

行政

地方官は同知を長官とし、下に通判ありて、施政總て哈密と同じ。唯〻此地に於て着目すべきは、市中稍〻清潔にして、各戸皆門牌を出し、一家族の數を明記する事等とす。以て地方官の戸籍及衛生に注意したるの狀を見るに足るも、教育、交通路農業等の改良施設を畫策する無きは遺憾なり。

電信局と鑛金局

市中に電信局ありて、局長以下六名を置く又鑛金局ありて毎月約銀二千兩を收むと。

軍隊と巡警局

軍隊は步兵一營、馬隊一哨、遊擊之を統べ、都司一名、把總三名隸屬す。

一巡局ありて五十名の巡警を置き、晝夜各〻一回、城の內外を巡回し、盜賊を警戒す。巡警の月俸銀四兩と小麥一斗を定額とす。

綿花精製所

當地は棉花の產出多きが故に、精製場（核と綿とを分つ）八箇所、何れも露國製の機器四臺づゝを据え、水力を籍りて運轉し、一臺一日五千斤を精製すと。又多少養蠶業行はれ居れりと聞く。

名勝と舊蹟

此地は車師前王の地、唐の樂安城にして、名勝舊蹟頗る多く、現に獨逸文學士其他二名、古碑建築物の探討及古物の發掘に從ひ、滯留既に三年に及ぶと、其に多少の支那語を解せり。其東南約八里に在る一大破城は即ち樂安城趾なり。又漢城の東南五百米突の處なる一古塔は、之れをスクンターと呼びて土民はスクー王の建設に係ると云ふ、或は車師前王の經營に成りしものならん。

特に此地は、回部王の祖先たる土耳其の宣教師阿都喇汗の駐錫布教せし靈地とし、て、今尙ほ南山麓に有名なる回々教會堂あり、回教徒は該教會堂を以て新疆第一の靈場とし遠近來拜する者甚た多し

沿革

此地當年懸法星　天山南北仰神靈
只今唯見荒邱畔　白布纏頭口誦經

吐魯番は漢の車師前王の地たり。後漢の安帝永寧元年（百二十年）車師、匈奴と諜じ、

敦煌の大守曹忠忠を殺す。延光三年(百二十五年)班勇、匈奴の車師に田する者を擊つ。

晉代(三百年代)此地に高昌郡を置けり。後魏の時(五百年代)闞爽自ら其の大守と爲りて魏に入貢す。宋の和平元年(四百六十年)蠕々之を併呑し、闞伯周を高昌王に封ず。其の王號を稱すること是に始まる。闞伯周死し、子、義成立ち、次で兄、首歸に讓り、首歸立つや、高車主、阿伏至羅に殺され、阿伏至羅、張孟明を以て王に封せしが、國人喜ばずして張を弑し、馬儒を立てゝ王とせり。然るに馬儒、高昌の地を去り、內地に徙らんと欲し、爲めに國人の恨を買ひ又殺さる。是に於て其の長史、禮麴嘉を王位に推し、始めて蠕々に臣屬せしも、後、遂に高車に臣屬したり。

隋の太祖開皇四年(五百八十四年)突厥其の四城を破り、王伯雅立つ。煬帝の大業四年(六百八年)來貢したりしが、既にして伯雅死し、子、文泰立つ。唐の太宗貞觀四年(六百三十年)入朝後、文泰、西突厥と通じ、西域諸國の貢道を絕ち、伊吾(今の哈密)焉耆(今の喇沙爾)等に仇せるを以て、太宗、候君集を交河道の大總管と爲し、兵を發して之を討たしむ。君集の兵磧口に入るや、文泰驚きて頓死し、子、智威嗣けり、君集進んで其都城を拔き、智威降りて唐に入朝せり。是より其地を縣と爲し、高昌を西州と改め、更に安西都護府を置きしか、貞元五年(七百八十九年)吐魯番の陷るゝ所と爲れり。當地回鶻人種多きに依り、茲に至つて又回鶻と呼び、宋の建隆三年(九百六十二年)入朝し元の太祖四年(千百九十九年)には遠征して之を平定したり、明の成化二年(千四百六十六年)酋長阿里、哈密を陷れしも、其後百餘年邊患を爲さずと。



### 七　天山第一回の超越

吐魯番滯在二日間、二十日午後零時三十分出發、西行三里弱雅爾(イヤール)河を渡る。河幅約百七十乃至二百米突、兩岸絕壁を成し水幅僅々三若くは六米突あり、橋なきも徒涉し得べく、沿岸楊柳、梧桐多し。是より頗る緩なる上坡と爲り、行進方向は次第に北に偏す。又行三里、一乾溝あり幅約百五十米突を有す、次で根特克(クントク)溝を越え、行程約八里根特克に入る。根特克溝は幅約八十或は百七十米突、水幅漸く一、二米突而も甚だ淺し。地形は北方遙に天山支脈の東西に走るを見、南は吐魯番の西南三里の地點より起る一砂山の西走するに對し、其中間沙磧の一大平原を成せり。途上

**纏頭女子の上衣**

纏頭女子の上衣(青色)の胸部に、幅一寸餘の金線四條を施せるを認む。遠く之を見れば宛然參謀武官の飾緒の如し。就て之を聞くも要領を得ず。唯〻南路の女子皆

風神廟

風害のため耕作不能なること

然かすと。

二十一日行程約十二里、三個泉に泊す。一風神廟あり。蓋し此地氣候溫和、雨雪少きも、强風多く、特に三四月の交を以て甚しとす。土地肥沃水亦餘り有るも、風の爲めに耕すを得ずと。風神廟の存するもの蓋し故なしとせず。

翌二十二日是日より行進方向北を指し、白楊村即ち吐魯番廳、迪化府の交界線を經て、行程約十里、河溝に投ず。河溝は山間の孤驛にして、僅に粗造なる一客棧あるのみ、然れども前には溪流ありて久しく耳にせざりし潺湲の聲を聞き河岸には楊柳の茂生する有りて幽邃の情掬すべし。

葡萄を賣りて麵粉を買ふ

夢破鳴山嶽　夜來風雨饒
窓前殘月影　溪上誤春潮

此地四季共に風多きも、二、三、四月は西風、六、七、八、九月は東風吹き、而して西風は强く東風は微なりと。西南別に白楊、小草湖を過ぎて、托克遜に到るの一路あり、是日途上吐魯番の纏頭數多の驢馬に麵粉を駄して歸るに逢ふ。聞く彼等は省城烏魯木齊に行きし者にて其の行くや葡萄を駄し還るや必らず麵粉を運ふと。蓋し麵粉は吐魯番に在つて一斤銀三分五なるも、省城にては二分半に過ぎず。是れ彼等が麵粉を齎らす所以なりと。又當地附近に全山、石膏より成るものを見たり。

開鑿せる新道

日本語峠の古語と同系あるべきか

翌二十三日行程四里餘達坂村に宿す。是に通ずる道路には、新舊二條ありて、里程相同じきも、舊道は嶮峻なる達坂（蒙古語山の意）山を越え車輛の通過困難なるが故に前巡撫潘某、大資を投じ、溪谷に沿ふて新道を設け、一昨年即ち我明治三十八年十一月に竣工せり。即ち河溝より約五里の間兩岸絶壁、廣狹不定の溪流（幅五十以上、二百米突以内、水幅七乃至十數米突に隨ひ、幅三米突若くは五米突に開鑿せるものにして、中間一の木橋を架せり。

第一回天山の超越と感慨

初め予が此行程に就かんとするや、心窃に惟へらく、天山二回の超越と、崑崙一回の通過に於て無難なれば則ち足ると。而して明治四十年二月二十三日、卽ち本日只今、其の第一回天山超越を遂行したり。豈多少の感慨なからんや。曩に吐魯番城より達坂山を遠望せし時は、峻嶺矗々雲表に聳えて、其の超過の益々容易ならざるを覺えたりしが、歩一歩、日一日と上登するに從ひ、坂路の甚だ緩なるを怪み、既に同嶺に達するも、尙嶺中に在るを感せず、吐魯番出發以來、連日恰も平地と同じき山

路を辿りて、現在身は深山中の深山に在りとは、如何にしても想ひ到らざりき。予は今更の如く、大陸地形の島國と相違の甚しきに一驚を喫しぬ。但し達坂山村は之を吐魯番に比すれば、約六百七十米突餘高し。

別有乾坤塞外天　一鞭眞是地行仙
殘陽返照千年雪　缺月斜開萬嶺煙
西嶽威靈蟠兩戒　北庭保障壯三邊
短衣躍馬閒經過　飛食將軍古所傳

達坂村の寒氣

達坂村は人家三百餘、耕地二百戸地（一戸地は百二十畝）一都司、二把總の下に、馬兵百二十五騎を駐屯せしむ。附近は水草豐滿なる一小高原を成すに因り、牧畜に適し、現に羊一萬餘頭を飼へりと云ふ。此地春冬の交、强風多く、殊に嚴冬の頃、朔風甚劇、寒威酷烈、人畜爲めに凍死するに至ること少からず。故に往々交通杜絶すること有りと。予が通過の際の如きは、寒氣の甚しきのみにて微風だも無かりしは實に幸なりき。

二十四日德城（トーチョン）を經、行程約十二里、察河舖（チャホプ）に投ず。此間東に達坂山脈、西に南山々脈ありて、兩山間自ら一沙原を成し、中に達板山村の北方より起りて西北行する一連の沙丘は蜒蜿德城の北側に延び、南山の麓に達して、其處に長さ三里弱、幅一里弱の大無名湖を湛へ、湖岸には茂々、葦、刺木等繁茂し、最も牧場に適す。德城を過ぐれば、南山麓に亦前者と同大の無名湖あり、更に察河舖に近づきて略同長弓形の湖に接す。察河舖は人家十三戸、總て回民とす其六百餘畝の耕地は、風强きが故に、唯一年一回麥を種ゆるのみと。當日初めて察河舖の東側草地に幕住する、哈薩克人を見る。

初めて哈薩克人を見る

翌午前四時三十分出發、行くこと六里弱此より山中に入り、茂々槽を經て谷地を辿り、迂餘曲折幾度か越山渡谷行程約十二里、新疆省の省城なる迪化城卽ち烏魯木齊に着し、滯留二十餘日に到る。

斯の如く長日數を茲に消費せし所以のものは烏魯木齊の省城なるが故に諸般の調査に必要なると、目下寒氣凛烈、朔風甚劇の爲め、北路の交通殆んど杜絶の有樣なるとを以てなり。

茲に特筆すべき事こそ有れ、开は予が第一回の天山超過を畢り、將に新疆の首府烏魯木齊城に入らんとするの日、山中にてゆくりなく、同胞林出賢次郎氏に邂逅せし一事なり。

山中に同胞と邂逅す

當時予は車上に在り、偶〻輕裘を着、肥馬に跨るの一壯士、二三の從騎と共に、砂を蹴て前面より來り、我車側を過ぐる者あり。予之を瞥見して、威風の尋常ならざるを感じ、邦人に非らずやとの疑心を生じ、急に從者に命じて、追及尋問せしむ。暫くして氏は駒を回へし、相互に天涯の奇遇を喜び、一見舊知の如く、相携へて烏魯木齊城に入る。

林出氏は、上海なる東亞同文書院の卒業生にして、日露交戰酣なる時、感ずる所あり、深く不毛に入り、天山北路に流寓すること二年、今や歸國の途に就きしなり。予は單に天涯の奇遇を喜ぶのみならず、爾來同居數日、予が前程に、懇切なる教示を與へられしを多とするなり。特に錄して其の高誼を謝す。

因に記す、林出氏は一たび歸朝の後、新疆巡撫の招聘に應じ、目下烏魯木齊法政學堂に教鞭を執り居る等。

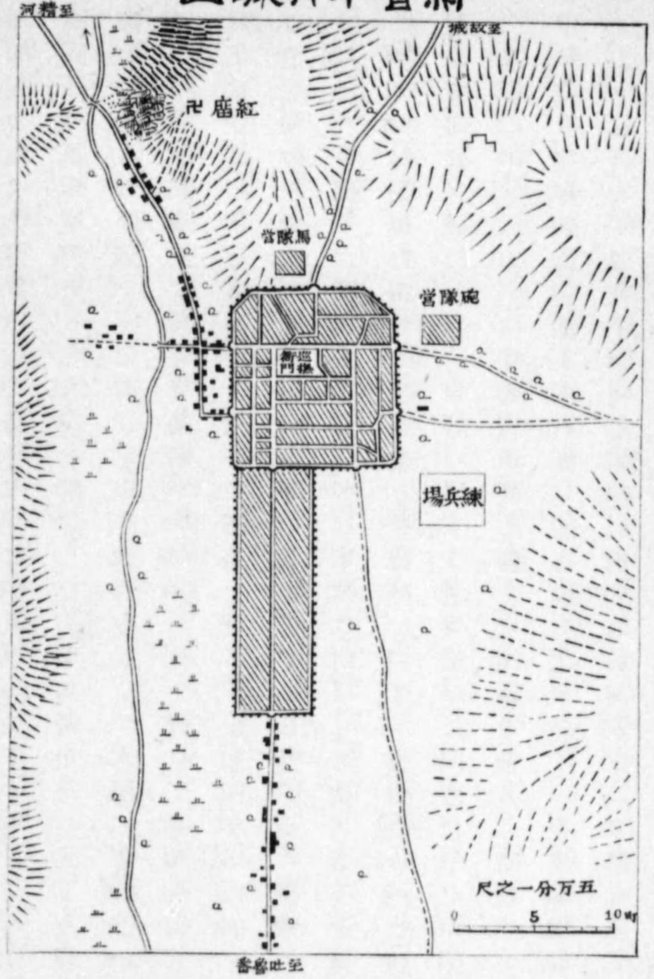
## 八　烏魯木齊（ウルムチ）

烏魯木齊（通稱迪化（ディーホウ）又紅廟子（ホンミヤオズ））は、東經八十七度五十九分、北緯四十三度四十五分に位置（位置）し、北京を距ること實に一千三百三十四里半に在り。此の地の沿革（沿革）は果して

如何なりしや。請ふ左に之れが大略を掲けん。

車師前王の地は吐魯番にして烏魯木齊は卽ち車師後王の地とす。太初三年（紀元前百二年）漢貳師將軍李廣利をして大宛を擊たしむ。李其國を降し、其王を殺すや、敦煌以西鹽地に至るの間、處々亭を設け、屯田卒數百を置く。天漢二年（紀元前九十九年）漢、匈奴の降者、介和生を開陵侯に封じ、樓蘭國（今の羅布淖爾附近）の兵を授けて車師を討たしむ。匈奴、右賢王に數萬の兵を與へ、之を救ひて漢兵を破る。征和四年（紀元前八十七年）漢重ねて馬通を遣し、匈奴を擊たしむ。馬通車師の北を過ぐるに及び、更に開陵侯に樓蘭尉犁、危須（今の庫車）等總て六國の兵を附し、別に車師に向はしめ、遂に其王を降せり。昭帝の代（紀元前八十年）匈奴復た四千の兵を發して車師に田す。宣帝（紀元前七十年代）位に即き、五將を選んで匈奴を討たしむ。車師の田する者皆驚いて四方に散じ、車師再び漢に通ず。地節二年（〇〇〇六十八年）侍郎鄭吉、車師を擊て交河城を破る。時に王其北方なる石城中に在り、翌年秋、鄭吉愈王を石城に圍み、遂に之を降す。後、車師、匈奴を恐れて烏孫（今の伊犂）に奔る。漢吏卒を發し、車師に田せしに、匈奴の攻擊急なるを爲め、田卒悉く渠犂に徙れり。是より漢車師に田せず、却て故車師王の子軍宿、焉耆（喀喇沙爾）に潛

むを立てゝ王と爲し、同時に車師の國民を驅て盡く渠犂に徙す。因て車師國相分れ、前部後部、且彌阜陸、蒲類、移支の六部と爲る。




其子を入侍せしも、漢受けずして之を卻けし爲め車師復た匈奴に屬す。永平十六年（七十三年）漢、伊吾盧を取るに及び車師再び漢に通ず。匈奴怒り大舉して來り攻む、車師復た匈奴に降る。永元二年（九十年）大將軍竇憲匈奴を破るや、車師畏れて其子を入侍せしむ。同八年、後王涿鞮前部王を擊ち、妻子を虜とす。翌九年、漢王林を遣し、討て涿鞮を斬り、其弟農奇を立てゝ王と爲せり。安帝の永寧元年（百十年）後王、長吏索班を擊殺す。建光四年（百二十四年）班勇柳中に屯し、兵を放つて後王を獲、索班の沒せし處にて斬り、故王の子、加特奴を王と爲す。陽嘉三年（百三十五年）車師、司馬、後王の兵を發し、匈奴を閻吾谷に擊ち、單于父子親戚等數百人、及牛羊兵器を獲たり。桓帝の永康元年（百六十七年）後王阿羅多反いて屯田及び固城を攻む。漢兵逆擊、阿羅匈奴に走る。漢故軍就の子卑君を立つ、阿羅多還て卑君と爭ふ。降て三國の世（二百年代）には蒲類國に屬し、北魏の時（四百年代）高車と爲りて蠕蠕に屬し、周の代（五百年代）突厥と爲る。

隋の煬帝大業四年（六百八年）兩突厥の處羅厚歛（コーカン）、其弟闕達設特勒大奈（チユイタシヨートロタナイ）と共に入朝し、後、處羅厚歛は高麗の討伐に從ふて功あり。隋彼を曷那汗（ホナカン）に封じ、抑留して還さず。國人薩那（サナ）の叔父を立てゝ射匱（シヨクイ）可汗とす。射匱可汗、土壤を開き、東は金山（今の阿爾泰山）より西は海（今の巴爾喀什湖）に至るまで、皆之を有し、玉門以西の諸國服屬せざるは無く、唐の

貞觀元年（六百二十七年）其臣俟斤を遣はし、唐の使者、道立と共に入朝す。宋の代（九百年代）高昌北庭の地と爲り、元の時（千二百年代）回鶻に屬し、別矢八里（ベシバリ）と稱ふ。成吉思汗の十七年（千二百十二年）此地に在て、金國の使、烏克遜仲端（ウグチユンチユントウン）を召見す。至元十七年（千二百八十年）北庭都護府を置き、兼て新驛三十を設く、元貞元年（千二百九十五年）更に北庭都元帥府を置き、次で五城の地に屬し明の世（千四百年代）には蒙古の厄魯特（エルド）に屬したり。

謀叛と破壞

爾來滿漢の移民及東干の種族等相雜居して、廣大なる市區を成形し、商民輻湊茶寮酒肆軒を連ね、繁華の都會たりしに、最後に東干の謀叛に因りて、漢城及清人の家屋は、悉く亂民の毀つ所と爲り、城下半は破壞せられしが、後、清朝之を恢復するに及んで、新に軍鎭を設け、城壘を築き、內外の工商漸次集り來りて、方今復た新に一都城の形を成すに至る。

迪化城の創築

其の迪化、城の創築は、實に乾隆三十一年（千七百六十六年）に係り、當時唐の至德年間の殘碑を掘り得て、始めて此地の金蒲城たりしを知れりと云ふ。

地形

地形は東、達坂山脈の餘波を受けて稍〻高き丘岡を成し、丘岡は西北方に延びて紅廟子の丘を形つくり、南又達坂支脈の突出するもの多く、其の北に向へる一端尾は俄に高まりて、迪化の西山と爲り、其の西端は、紅廟丘の南端と相對す。故に地勢は西北部に向て傾斜し、迪化城は其斜面に在り。城內亦西に緩なる傾斜を成せるも、東北部即ち東門より西北角に至る線は、東北急に十米突の高さを有し、自ら一臺地を成形す。是れ滿城なり。

河川

河川はフーホ河、南山麓に發し、中央の凹地を流れ、西山、紅廟丘の間を通し、西北に向て紅廟子の耕地を灌漑す。其の東西四里餘、南北五里弱の迪化草地は、黃土層鹹を含みて、耕地に適せずと雖も、牧場には最良の地たり。東西南の山々は、何れも炭礦豐富にして、就中東山は、良質の無烟炭を出すと云ふ。

燃料

且つ東南山中には、松樹、林を成し、從ふて木炭を製し得べく、薪材としては東南山の柳榆優に供給を充し、草地も亦至る處柳樹茂り、殊に道傍、河岸に繁茂す。

飲料

水泉水齊しく可なるが、井水は混濁せるに因り、數時間澄清せざれば用ゆべからず。

食料

食料は紅廟子の西北に米、麥を產すれども其量少なく、總て昌吉、瑪那斯、故城の輸入に待ち、野菜も亦之を昌吉に仰ぐ、豚、羊、牛には不足なし。

紅廟と鞏寗城

西域聞見錄に『城東南、即博克塔班（博格多鄂拉山）三峯入雲、氷雪晶瑩、望之如琉璃世界、靈蹟最著。故俗以靈山呼之』と。又紅廟丘は、丘上一廟宇を存し、紅泥垣壁、頗る壯觀を極む、故に名づくと。滿城即ち鞏寗城は、乾隆三十七年（千七百十二年）の創築に係

り、城壁高さ二丈二尺五寸、厚さ一丈七尺、周圍約一里に餘れり。人家は城の內外合せて五千五百餘、人口約二万五千と稱するも、是れ單に土着民の計算にて、現在の實數に非らず。其他北門外には、露國の居留地ありて、露商約三十戸開店す。試に以上二萬五千の人民を、人種にて別かてば、漢回二千餘、漢人一千餘、纏頭商家三千四百餘自餘は皆纏頭にして農を業とす。又其の漢人は直隷人（通常天津人と稱す）大部を占め、湖南湖北人之れに亞ぐ。漢人は阿片若くは酒を嗜み、他人種に驕るの風あり。漢回は團結力强く、時々禮拜の口實下に、集合商議すること有るか故に、地方官憲は殊に之に注意し、禮拜は敎會堂の外にては決して許さず「且つ市中の無賴漢を願使し、絕えず其動作を探偵せしむ。

戸口

人種

氣候

氣候は亙寒酷烈の地なりしも、人口の繁殖に從ひ、次第に溫和に爲れりと。雨季は五六月なるも降量少なく、每年多きも四五回とす、土民は寧ろ之を忌む。蓋し地中の鹹地表面に分泌して、穀類の嫩芽を枯死せしむればなり。降雪季は十一月以降翌三月に至り、十數回に及ぶを常とし、每回尺餘に達す、現に予の滯留中、同量の積雪ありき。風は西北風、大且つ多く、其の最大なるは三、四、五月の交とす。新疆省の

商業

省會たる烏魯木齊は、省內他の都會よりも、商業繁盛なるべき筈なるに、其實は然らず。是れ全く地理の然らしむる所なるべし。而して商業の權力は二つに分る。即ち城內は天津商に、城外は纏頭商に歸せり。漢人は貨物を二道より運ぶ。一は甘肅省を經て送致せしむる反物類、所謂四川繡緞及雜貨（甘肅の水煙、絨、砂糖等）等を主とし。他は天津、北京を發し、張家口、歸化城を過ぎ、沙漠を通じて齎らす洋貨類、所謂金巾、卷煙草、香水、時計、針、綿緞子、糸、羅紗、手巾、陶器、靴、襪子（足袋）海藻干魚干菜類等にて、前者は沿道稅關多きが故に、其の價格二倍と爲り、後者は沙漠帶を通じ關稅なきが故に前者に比し二、三割の廉價とす。纏頭商は主として露貨を販賣す。露國輸入品は、金巾、更紗、綿緞子、毛布、絨『マッチ』洋蠟、洋酒、鐵葉製器具、燈心、藥罐、陶器、時計、卷煙草、等其の主なる者にして、賣價は同一の品なれば殆んど淸貨と大差なし。輸出品の主なるものは、羊皮、羊毛、石炭、石膏、硝石、鹽、鹿角、虎皮、狐皮、等にて、東來の貨物は、更に是より塔城、伊犂に及び、吐爾番を經て南路全部に擴まる。西來の露貨にして、吐魯番、哈密に到るものは此地に卸さず、直に彼の地に送らる。

東西の輸入貨

主なる輸出品

敎育

敎育としては、唯一の高等學堂あるのみにて、生徒は現に四十餘人、其の年齡は十

八歳以上、三十五六歳に及び、學課は英文、漢文、地理、歴史、數學、體操等と爲し在るも、實際漢書作文の外教授し在らず。卒業期限は一定せず、教師六名を置く。又有課吏館と稱へて、官吏を教育するもの有り。授くる所單に漢書を講じ、課題を與へて作文せしむるのみ。聞く本年六月以降、之を法政學堂と改稱し、以て法學一般を教授する豫定なりと。

官衙及公所

烏魯木齊は天山北路の重鎮にして、實に新疆の省會たり。今其の諸官衙、公所を掲ぐれば左の如し。

巡撫　藩臺（布政使）　道臺（道臺は臬臺即ち按察使を兼職す）　迪化府　迪化縣の各衙門　巡警總局　電報總局　商務局　通商洋務局　稅務局　銀元局（銀錢の鑄造を司る）　紅錢局（銅錢の鑄造を司る）　官錢局（貨幣の交換を司る）　官油局　牛痘局　牲口稅務局　同善局（貧者に棺槨醫藥を施與す）　習藝局（卑人に手藝を教ゆ）　發審局（全省の訴訟案件を司る）　督練處（全省の練兵の事務を司り分つて參謀處、兵備處、教練處の三とす）　軍機局等

軍隊

軍隊は新軍混成一標を置く、而して其の砲隊一營は北門外に在り。兵器は總て獨逸の舊式銃を帶び、日々午後に於て四時間の練兵に服し、將校は毎日午前、督練處に集り、新式體操を習ひ、且つ一時間、戰術の教授を受く。其の他舊軍即ち綠營步兵三營、同馬隊一營を備ふ。

通貨

通貨は圓銀、及紅錢（銅錢）を用ひ、圓銀には、五錢、三錢、二錢、一錢、五分の五種あり、銀票即ち官發の一兩票は、贋作多きに因り注意を要す。紅錢は一兩、四百文の定めなり。

銀行と雜貨店

銀行には、天成號、京記號、露清銀行支店ありて、其他昇聚永、同盛和、聚興永、永裕德、聚興成、中立祥、公聚成、源順成、復泉湧等稍々大なる雜貨店よりは油布の手形を發行す。

交通と故城

交通路は、東北の一路は故城（クーチエン）に、南は吐魯番に、西は西湖（シーホ）を經て塔爾巴哈台（タルバガタイ）及伊犂（イリー）に通ずるものあり。

故城に達するには、六日の行程を要し、其間六里弱の古牧地（クーモチ）には人家七戸、耕地數百畝、路面平垣、次で約十二里なる阜崗（フカン）縣は百餘家と二千餘畝の耕地を有す。又十二里弱にして滋泥庄（ツーニチヨウン）に至れば人家二百餘戸、耕地二千餘畝あり、更に十里餘濟木薩（チムサ）は人家八十餘、尚ほ十餘里にして、故城に入る。路幅廣く、二輛の大車を併行せしむ路面は概ね細砂なるも、古城の西部には礫石多しと。

故城と地形

故城は周圍約八百米突、孚遠縣衙門、遊擊衙門のある處にして、四通八達の要地た

り。冬期駝商の隊を組みて往來するもの頗る多し、地形は南六里を隔てゝ天山を仰ぎ、地面北に向て傾斜し、十餘里の處に一沙丘の東西に走る有りて、比高一般三丈餘、長さ八里に亘り、其の東端は故城の北北東に對す、丘の北方は一面開闊なる戈壁の地たり。城の內外に柳楡多く、二條の小河は、其の南山麓より出でゝ北流し、附近全部は耕地及び牧地を成せり。

**故城科布多間**

故城より蒙古の科布多に通ずる大道は、十四日にして達すべく、全部沙磧にして、行程は長短不定なるも、平均十二三里とし、各驛には住民なく、唯空房の處々に存在するのみ。又額魯齊斯河畔のドルブルジンに達するには、駝行十三日行程なりと。更に科布多、烏里雅蘇臺間は、十四日行程、烏里雅蘇臺以東は六十四日行程にして張家口に達すと云ふ。

**故城歸化城間**

故城より直ちに歸化城に至る道路は、商路と稱して、即ち駱駝路、九十八日行程、約一千七百里あり、此の間駱駝隊は、唯水草ある處を以て宿泊地と定むるも蒙古に入れば部落處々に散在して其の多きも七八戸、少なきは二三戸に過ぎずと。又故城

**故城と北路**

東行の大道所謂北路は、約十三里にして奇臺(人家三百餘同じく十三里餘にして木壘河(人家二百餘又十一里を進みて三個井(人家五戸)に出て更に十里にして大石頭(人家四戸)に着す。是より天山を越へて、南路に合すと。

**蒸呂風**

長安出發以來、一たびも入浴したる事なし。否入浴すべき機會なきと、入浴の場なきとに因る。唯〻日々數回、水或は湯にて、能く身體を拭ひしのみ。幸に當地には纏頭回民の營む浴場あるが故に一日之に入浴を試みたり。室內衣を脫して浴室に投すれば、蒸氣人を襲ふて晝尙ほ暗く、一穗の燈火、在れども無きが如し、始めて知る是れ蒸風呂なるを。室は方三尺、內外、內に浴槽を置く。其の暗淡たる爲め明視する能はざるも餘りに不潔ならざるが如し。殊に其の設備宜しきを得たるは平坐頭上、一個の栓ありて、之を捻れば溫湯條を成して迸出し、全身を自由に洗ひ去り得べきに在り。予は其の慣れざるに因り蒸氣に堪へず、居る約五六分、匆々室を出でゝ蘇生の想あり。一浴銀二錢、其の設備上より云へば價格は寧ろ廉なるを覺ゆ。

**露國領事と語る**

予の當地に入るや、一日敬意を表する爲め、露國領事クロトコフ氏を其の官衙に訪問す。領事予を一瞥して、突如問ふて曰く、『貴官の旅行は日本の爲めか、將た淸

國の爲めか』と。餘りの奇問に予は心中笑を禁ずる能はざりしも、故らに平然たるの狀を裝ひ答て曰く、『予の目的は遊覽に在り。豈他あらんや』と。領事又曰く、單に遊覽とは解すべからず、願くは詳細を聞くを得ん』と。予曰く、『新疆全部を旅行するのみ』。領事不滿の色を作して、『然らば塔爾巴哈臺に行かるゝや』。予曰く、『然り』。領事尙ほ、『彼の地方は寂寞荒凉の境に屬し、別に觀るべきもの有らず』云々、予曰く『忠言を謝す。然れども寂寞の境、又如何なる妙趣あるやも知るべからす』。領事苦笑して止む。是に於てか、予試に問ふて曰く、『塔爾巴哈臺より露境に通ずる捷路を經て伊犂に到らんと欲す。貴官予の爲めに幸に一臂の勞を取るの好意なきや』と。領事聲に應じて「斷じて不可」と云ふ。後予が伊犂に達せし時、該領事の歸國を耳にせり。果して何の故たるを知らず。

予の烏魯木齊滯在は前後二十七日敢て少なしとせず此間伊犂將軍（長庚赴任途次當地滿城內在中）新疆巡撫（聯魁）布政使（王樹枏）を始め文武諸官は駕を狂げて遠征の勞を訪ひ宴を張りて孤客の情を慰め或は旅館の設備を爲し又前途の便宜を圖るなど、厚遇至らざる所なし、記して感謝の意を表す。

## 第三節　烏魯木齊より西湖に到る

主人公の交替

### 一、露式四輪馬車旅行

三月二十四日午前八時三十分、文武諸官に見送られつゝ、愈々烏魯木齊を出發せり。此行、三頭輓の露式四輪馬車を用ゐ、別に乘用馬一頭を雇ひ、從僕と交番に車又は馬を用ゆることゝせり。蓋し省內該馬車を用ふるは、塔爾巴哈臺、烏魯木齊間に限る。蘭州以來、乘用せし二輪の支那馬車（四頭輓）は、路の良否に拘はらず、其の進むや頗る緩漫なるが故に、終日車內に蟄居せんか、腰脚等の疼痛に堪へ難く、且つ動搖の甚しき、頭痛をさへ起すに至れり。故に往々護衞の騎兵に請ふて彼等の辭退するを强ひ、彼等を車上の主人公たらしめ、予は騎兵の馬に鞭ち、當日豫定の宿泊地に先行せし事あり。又時には車を下り、悠々徒步せしことも有りき。就中寒氣酷烈の時は徒步して溫を取り、疲れて車に乘るを常としたり。

時は維れ三月下旬、北路の積雪將に消えんとして、往々泥濘なる處あるも、幅平均八米突以上の平坦路、轔々の響と共に悠々右顧左眄せり。敢て眼を怡ばしむるの

風光なしと雖も、雄大未知の山川を跋渉す、亦愉快ならずとせず。

道路は西北を指し、市の西北端なる紅廟嘴より、岡脈忽ち北に去り、獨り南山の支脈のみ、西方約二里餘の處に在りて前路に迫り、其の北側には點々たる人家、柳樹の間に隱現するを認めたり。小地勿僕(シヤオデーモブー)を經て大地勿僕(ターデーモブー)に晝食し、頭屯河の西端に一河を渡る、河は南々西より北々東に流れ、幅約一千米突、弱淺水三條に岐れて兩岸絶壁を爲す。

昌吉

午後三時四十分行程約十二里昌吉(チヤンチ)に投ず。此地は人家約五百を有し、昌吉縣衙門あり、步隊、馬隊各一哨を駐屯せしむ。烏魯木齊住民の要する野菜類は多く此の地より供給す。

一種の風土病

途上瑪納斯(マナス)より烏魯木齊に運搬する駱駝隊數群に遭遇せしが皆麵粉を馱せり。又鴨鶴の群飛するを見たりき。聞く當地方には頭部膨脹して痛苦甚しき一種の風土病ありと。

少許の水田

翌二十五日前日と略〻同じき行程を以て呼圖壁(ホトビ)に着す。景化縣(チンホワ)丞の衙門あり、途上融雪の爲め泥濘轍を沒し車行迅速ならず。昌吉城外始めて少許の水田を見つゝ依然西北を指して园城子に到る。沿道人家點在只楡樹溝(ユーシユコウ)以西、三十里墩の西北方のみ兩側開濶なるも他は特に其の東北方に多く楡柳生ひ茂り、甚しきは一切通視を許さゞるに至る。呼圖壁は人家約百戸、馬隊一旗を置けり。聞く其の北方に、東西約我二里、南北三日程の一大葦湖を湛へ、水草、雜木蓊鬱として人跡を絶ち、長へに猛虎の棲息に委すと。

大葦湖と猛虎の巢窟

昨、一昨共に西北方を指せしも、本日は殆んど西方を指し、呼圖壁、烏庫臺(ウクタイ)、亂山子(ランシヤンズ)、吐呼魯(トホル)を經て行程約十二里樂土驛(ロートイー)に宿せり。之を二十六日の行程と爲す。此間呼圖壁以西約一里は、楡樹密生し、次で又約一里の沙磧を過ぎ、烏庫臺の東端に到りて再ひ密林を現出し其れより漸次亂山子に近つくに從ひ、其の北側は密、南側は疎、遂に開濶と爲りて樂土驛に入る。

二十七日午前七時出發、塔什河(タシ)、保甲店(パオチヤテン)を經て行程約十里瑪納斯(マナス)に到る。道路平坦、地質概ね砂利を交へ車行最も便なり。塔什河には古城址並に空房あり、此より保甲店間は左右開濶なるも、保甲店、瑪納斯間は紅柳其他の諸灌木密生林を成し、間々人家耕地水田の其間に點在するを見る。斯て瑪納斯(一に綏來)に近づくに隨ひ、次第に空房壞垣多し。

綏來

瑪納斯の今昔

蓋し瑪納斯は同治の回亂前、其の繁華なること、蘭州を凌ぐと稱せられしも、今は人家僅に約七百に過ぎず、觀る者をして當時の狀況を忍ばしむ

城内に綏來縣衙門あり軍隊は副將一、都司一、ありて步隊二營、馬隊一旗を統べ、建築物としては四川會館稍〻觀るべし。翌二十八日降雪の爲め更に一泊す。

此地當年血戰場　腥風吹度壞殘牆
新修樓閣雲間聳　尙記方中詩不忘

## 二、瑪納斯渡河の大車

瑪納斯河と出水時

三月二十九日六工(リユーコン)を經て行程約六里、石河子(シーホズ)に到る。道路は瑪納斯六工間は砂礫、六工、石河子間は、細砂なれは前半は能く走るべく、後半は稍〻難し。其地形、前半は開濶なるも後半は蔭蔽せり。而して瑪納斯を距る數町に瑪納斯河あり。河幅一里餘あるも水幅僅に七米突に足ずと雖も、流速の急なる爲め橋を架せり。平時は斯る小川なれども、一旦出水あれば忽ち汎濫して、滔々一里に溢るゝに至る。此時官衙特設の大車、輪の中徑七尺に亘るものを牛馬に輓かしめて、其の交通を保持す。されど往々缺陷部ありて五尺乃至一丈の深さに達し、溺死者を出すこと、亦尠からずと云ふ。石河子は人家約一百、其の北方七八里の地に在る葦湖の畔には虎多く、夜間時々石河子に出でて、牲口を奪ひ去ること有りと。

猛虎の出沒

## 三、丈餘の蘆、猛虎の巢

三十日烏蘭烏蘇(ウランウス)に入る。行程僅に七里餘但し是日經過の地、一帶の濕地に屬して、其の半途營盤莊子(インパンチヨワンズ)に到る間、蘆葦茂生、丈餘の高さに延び、虎豹等の猛獸棲息するもの多く、其れより以西は楡樹疎生す。本道の南側約一里、乃至三里の邊に、一連の楡樹垣狀を成せるは、瑪納斯、烏蘭烏蘇間の別路にて人家亦點在する如し。烏蘭烏蘇より天山に通ずる二日程の路上には、處々石炭露出すと。此地人家街上に二十戸、附近に五十戸あり、又其北方一里内外の處に、東西一里半、南北一里弱の湖水ありと。地質は黃土細砂を交ゆるも、鹹分を含むこと少なきか故に、水理宜しきを得ば、恐らく全土好水田とならん。

猛獸の巢窟危險の難所、之を送り之を迎ふる其れ將た幾回なるを知らず。本日經過の地、亦其一にして、丈餘の葦蘆叢生して一望際なく、陰濕なる泥沼地と相俟て、腥氣悚然人を襲ふもの有り加ふるに猛獸の巢窟と稱へらるゝが故に時に一陣の陰風地を捲きて來れば猛虎嘯き、餓狼吼るが如く、幹動き葉戰ぐ邊、牙を鳴らし爪を磨ぐに似たり。

**四、** 八日の行程西湖に達す

三十一日烏棵樹(ウコツシユ)、三道河子(サンタオホーズ)、五道河子(ウーターオホーズ)を經て行程約十二里安集海(アンチハイ)に達す。途上烏蘭烏蘇を去れば、雜樹林を成すこと一里餘、次で其の南側は、依然森林なるも北側は蘆葦の繁茂する中に間々楡樹及野棗樹を交へ、次で又雜樹林と成るも、南側は路外一千米突を距てゝ疎林を成すのみ。次で開濶地を經て安集海を距る約一里の處より、森林を通過し同地に入る。

明れば四月一日、四十里井を過ぎ、行程畧〻前日と同じく奎屯(クイドン)に、二日、尙ほ前日と同じ行程を以て庫爾喀喇烏斯(クルカラウス)即ち西湖(シーホ)に着す。前程は初め約一里の處に到るまで叢林、他は開濶、一望千里の概あり。但し後程には、西風砂塵を捲き、天日爲めに漂々たりしも、氣候寒冷ならざりしは幸なりき。石河(シーホ)は其の河中より砂金を出すと。且つ該河は近く高山峻谷より流出するが故に多年排出せし砂石は次第に嵩みて河磧は兩岸附近の地より高く爲に河水自ら散漫し、現に一滴を認めず。

西湖は北京を距る一千四百三十四里に位置し烏魯木齊、塔爾巴哈臺、伊犂の三大要地を連結する道路の交叉點に當り、天山北路に於ける戰略上の要衝とせり。城

西湖は戰略上の要地

なくして人家約百二十戸、庫爾喀喇烏蘇、直隷廳衙門あり軍隊は步隊一營馬隊一旗を置く。此地一帶水利ありて米の產出多し聞く最近二年間は一回の降雨あらずと。翌三日茲に休養滯在す。

二年間一雨なし

沿道の住民は、道光以前に、南淸より配流せられし犯罪者の子孫多く、人情輕薄の地と稱せらるゝと。

住民は配流者の子孫

## 第四節　西湖より北して塔爾巴哈臺に到る

**一、** 呑氣なる護衞兵

四月四日、僅々約四里餘の行程を以て、上西湖(シヤンシーホ)に宿す。蓋し融雪の爲め道路泥濘脚を沒し、人馬共に步行困難疲勞甚だしきに因る。途上多くの牛及駱駝を牧養するを見たり。是日護衞馬隊の中一人、牛を牽きて先行する者あり。初め何の爲めなるを知らず。既にして途中一民房に立寄り、秣を徵發して駄載するを認め、始めて歸路携行の準備なるを知る。其の呑氣さ概ね斯の如し。五日は行程約八里、頭臺に着す。此間道路の東側は、葦原ならざれば沼澤、其北側半路は灌木多く、間〻雜

樹を交ゆ。

六日、行程約九里、二臺に到る。道路澤地を通過するが故に處々に雪水溜りて泥濘を成し車行稍〻困難す。一般に森林と稱すべきには非ざれども、丈餘の灌木生ひ茂り、中に梧桐、野棗を交へて、自由の展望を許さず。途上哈薩克は乘馬、纏頭は騎牛して牧羊するを見たり。

空營と涸水

七日、行程約十里、小草湖に宿泊す、途上初めの四里餘は、路邊灌木繁茂し、其れより水なき池所謂草湖ありて短き葦蘆の密生するを認む。二臺の北方一里强の處に、空房及空營を存す。此地は即ち舊二臺にして、飲料水乾涸の爲め見捨てゝ現在の二臺へ移りしものと云ふ。

紅柳と燃料

八日、漢三臺即ち鄂倫布拉克驛に着す、行程十一里强。此間初めの三里餘は平地、其れより約五里は、緩なる上傾斜、殆んど平地も同じきが如く、殘り二里は丘阜亂疊の波狀地を成立せるも、急なる坂路なく、地質は黃土にして掩ふに片岩の碎石細沙を交へたるを以てするが。故に草あれど高からず。路傍山中一帶に哈薩克、蒙古人の游牧する者多し。紅柳(纏頭語「ソクソック」)と稱する、灌木到る處に有りて伐て直に焚き得るは便利なりとす。

雅瑪圖臺

九日行程約十里、沙爾札克臺或は什納札に着す本日亦初めは緩徐なる上傾斜路なるも、之を昨日に較ぶれば稍〻急なりとす、且つ短距離の二、三坂ありて、遂には山路の實態を現じ、水なき溪谷屈折多く、兩側の山高きは比高八十米突に出て一般四五十米突の間を出入す。此間處として、殆んど哈薩克あらざる無きが如しと雖も、一たび涸水すれば彼等は直に四散すと。

十日廟兒溝(即ち烏土布拉克臺)坤都倫を經て行程約二十二里、雅瑪圖臺に宿す。是日西北の風强く、雪さへ加はりしも積むに至らず。什納札、坤都倫間は谷寬く坂路緩に處々良好の牧場ありて、現に馬、牛、羊を放養せり。地形は坤都倫に近づくに隨ひ降坂少しく急、更に坤都倫を過ぎ其直北の峙を登るには坂愈〻急、谷益〻狹く、之を越ゆれば谷稍〻開け雅瑪圖に及んで始めて開濶なり。途中四川より塔爾巴哈臺に送る磚茶の大車數臺を見る。又當地より八日の行程、直に伊犂に入るの捷路あり。

## 二、人畜行列の一奇觀

雅瑪圖臺を距る北方約一里に一小嶺を越え更に二里を進みて一小嶺を過ぐ。前者は昇降共に傾斜稍〻急にして短距離なるも後者は砂利の好路能く走るべし。昨の降雪尚ほ足らざるにや、北風强く吹きて雪を交へ、一時は四面糢糊、咫尺を辨せざりしが、須臾にして歇むと共に、忽ち融解して積むに至らず。午前十一時三十分行程約十里托里驛(トリイー)即ち托羅布拉克(トロフラク)臺に着す。之を十一日の行程とす。途中一の灌木に接せず。會〻貧困なる蒙古人の一家族の移轉するに遇ふ。數頭の駱駝、數頭の牛馬、氈幕を馱し家什を載せ尚且數匹の犬相加はりて、男女老幼皆馬に跨り、陸續たる人畜一連の行列は、百鬼夜行の狀とも見んか、實に近頃の一奇觀たりき。

### 三、昨の奇觀、今の美觀

翌十二日快晴、二十里堡別名ヤマンタン(老風口(ラオフンカオ)即ち沙爾霍羅斯(サルホラス)臺)を經て行程約二十里、二道橋(アルタオチヤオ)(一名固爾圖臺(クルトタイ))に達す。托里、老風口間は廣原をなして、蒙古及哈薩克人各處に駱駝、馬、羊等を牧養し、多きは一家數千頭の羊を飼ふ。聞く一人にて監視し得べき羊の頭數は、五百頭を限度とすと。無限の草地に幾百の人各〻快馬に鞭ち、幾千萬頭の羊を放牧するの狀、遠く之を望めば、宛然大練兵場に調練をするものゝ

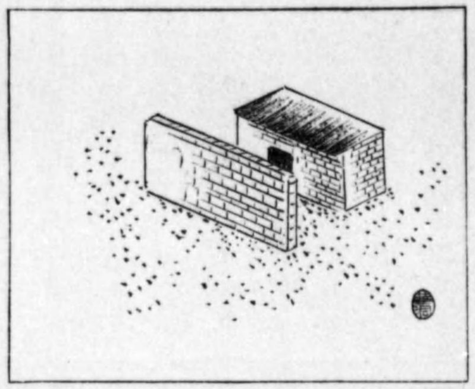
牧羊と監視數



老風口と烈風

如く、人は指揮官、群羊は兵士、昨の奇觀に對照して、眞に好一對の美觀たり。

又老風口、二道橋間にも、哈薩克の牧畜する者あるも多からず、前者は巴爾魯克山(バルロクシヤン)の南に當りて、此處は同山の北に當れり。北は其の牧畜南方の如く盛ならず、水草の便より云へば南は却て北方に劣れり。而して北方の盛ならざるもの惟ふに寒風の强き爲なるべし、是れ老風口の名ある所以なり。現に沿途風害を避くる爲め、約十町毎に圓の形せる土屋を設置す。風は十二月及正月最も劇しく、必らず東北風に限り、乘馬も猶ほ通過し難しと。



避風房

老風口は西に巴爾魯克(バルロク)連山、東にオゴロカチャル山の支脈カラクチョク山を控へ、遠く塔爾巴哈臺方面を瞰制す。蓋し西湖、塔爾巴哈臺間の要地たり。其の東北方二日程、即ちカラクチョク山の東に金廠(金鑛)ありて、此處には人家二十戶、工夫百名、漢人之を監すと云ふ。又其の西北方一日程にて、巴爾魯克山中に、哈

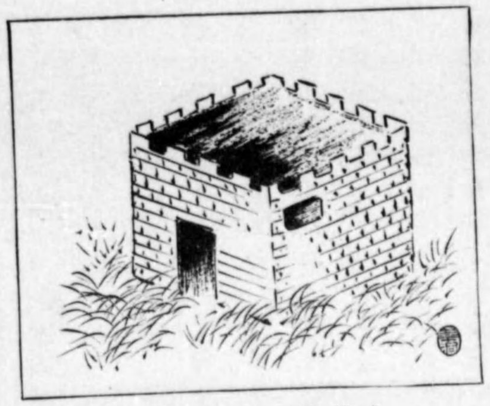
巴爾魯克山のマモルベーキ

哈薩克と固定家屋

電柱と松樹

薩克二千家を率ゆる、有名なるマモルベーキの森林帶に到る。マモルベーキは哈薩克族中第一の名望家にして、羊一萬、馬、駱駝各〻數千を所有すと云ふ。彼の二千家は何れも富裕にして一の貧者なしと。

哈薩克は元來游牧民なるが故に、固定の家屋は之を造らざるべしと思ひしに中には冬期家居する者も有り即ち冬は一家の半、圖の如き土造屋內に、又半は家畜を率ゐて山中に入ると、亦奇ならずや。



哈薩克の固定家屋

途上見る所の電柱は皆巴爾魯克山より出るものとす。同山なる樹木の種類は、松其の大部を占め、他は只一種の野果樹あるのみと。電柱は即ち此の松樹にして、直く且つ節多けれども脂少し。

四、額敕河を渡る

十三日行程約五里額敕河即ち色德爾莫多臺(或は河上)に着す。此附近沿道一帶地は濕地にして茂々草繁茂し、小河多く處々沼澤を爲せり。二道橋の北數町なる一河は、幅僅に七米突、深さ膝を沒す、次で又一河あり、幅約二十米突、深さ前と同じ額敕河は街道一の大河と稱せられ、兩岸斷絶、幅約千米突、流水數條、流速皆急、內最も廣きは、水幅約三十米突、水深馬腹に及ぶ、大水時には交通を遮斷すること數日に至ると。

露國哈薩克の村長

沿途哈薩克多く游牧し、又附近一帶に籍を露國に有する哈薩克約三百餘戶を認め一家多きは十數人あり。是等全哈薩克を管する爲め、在塔爾巴哈臺露國領事配下の「アクサハル」(鄉約に同じ)一名茲に住す。其他土着人には纏頭二十家、漢人十家、漢回五十家あり。氣候は六月の半ば後、最も暑く、十二月最も寒し、雨は年中概ね降ることなしと云ふ。

半里の途上三時間を費す

十四日行程約十里、官店(コワンテン)即ち干吉爾莫多臺(或は、額爾屯(ケルトン))に着す。人家僅に四戶其東約半里の間、泥濘深く車を沒し、進退谷まるもの數次、爲めに三時間餘を費せり。要するに道路の初半は好良なるも後半は濕地能く走るべからず。中間は茂々茂生して、哈薩克の游牧多し。

十五日行程約十二里にして塔城即ち塔爾巴哈臺に入る。途上小川若くは濕地多きも、是れ現に解氷期なると、昨夜來小雪ありしとの爲めにて、平日は坦々の好道路ならん。元來二道橋より、一直塔城に到る大道あるも、概ね濕地の故を以て、結氷期の外は、行人多く河上、官店を迂回するを常とせり。一般水草地には、哈薩克の氈幕點在し、盛に牛馬羊を放牧す。

城の内外

## 五、塔爾巴哈臺

塔爾巴哈臺は東經八十三度二分、北緯四十六度五十二分、省會（一省の首府の意烏魯木齊を指す）に到る二百四十五里、北京を距ること實に一千五百七十九里に在り。滿漢の二城近く相接し、滿城はその周圍約二十町、城内には參贊大臣、索倫領隊大臣の衙門を置き、滿人の居住するもの僅に百數十戸、其の他空房壞屋多く、又漢城は周圍十數町、城内に塔爾巴哈臺直隸廳、協臺衙門ありて、人家約六百戸、其の北門外には、露國領事館、同電信局、露清銀行支店等存在し、居留露商約四百五十戸を有す。烏魯木齊、吐魯番方面に輸入の露貨は、其の大部皆此處を通過し、又附近山野に游牧する哈薩克の家畜と、日用諸品とを交易するもの多く、市場稍〻繁盛せり。

氣候

日露戰役の影響

此の地は舊と吐爾扈特族の牧場たりしが、土地廣濶、西北直に露領に連り、北陲緊要の地なるを以て、乾隆二十年（千七百五十五年）清國の版圖に屬してより、東方二十二里、額敕河の右岸に一城を築き、人民の移住に勉めしが、後更に當地を相して是に移り、名づけて塔爾巴哈臺と云へり。土地豐饒平地は河水暢流して耕耘に宜く、山野は禽獸多く棲みて獵狩すべし。惟地僻隅に在るが故に、哈薩克の游牧に任せ、土着農業とする者甚だ少なし。氣候は冬夏の二季と云ふを得べく、春秋なきに非ざるも甚だ短し。夏季は毒蛇、白蠅夥しく、往々人馬を害し、冬季は祁寒行人を絶つに至る。

塔爾巴哈臺は新疆より露都に到る正路にして、此地より馬車にてセミパラチンスクに至り、其れより汽船にて額爾齊斯河を下航し、オムスクに着し鐵路直に露都に至るべし。

予は日戰役が、斯る偏僻の地に迄、如何なる影響を與へしかに就て、一言せざるを得ず。實に己れの歳を知らず、路を歩みて遠近を知らざる哈薩克固より世界の何者たるを知らざる彼游牧民も、獨り日露戰爭を知らざる者一人もなかりし一事は、實に意外とする所なり。尚ほ更に意外なりしは、露國人の感情とす。予惟ふ、露國

人は、戰後自ら我國人に對する、感情を害し在れば、彼等に對しては成るべく懇篤を旨とし敢て彼等の感情に逆ふこと有るべからずと、心竊に警戒する所ありしに、豈に料らんや、事實は大に之に反し、彼等の歡迎饗應至らざる無く、予は此地に於て、日用品買辨の爲め露國商の店頭に立つや、店主出で來りて別室に誘ひ、茶を饗し菓を供へ、自國の短所を擧げて我國の武勇を賞し、優遇歡待、苟も措かず。斯の如きこと一再ならずして、又彼等が衷心よりするものなること明なりとす。是れ所謂大國民の襟度か或は何等の反動なるかを知らずと雖も、兎に角旅行中の快事と謂はざるべからず。

尙ほ戰前に於ては、當地及伊犂一帶、露國人の勢力旺盛なりしこと、殆んど言語に絶し、若し一朝兩國人間に、紛爭の生ずるもの有らんか、事の正否に拘はらず、常に露人の勝利に歸し、清國官憲は只管露國官憲の鼻息をのみ窺ひて、始終彼の爲めに壓伏せられ、土人は唯々怨を呑んで、何事も彼等に服從し來りしが、日露戰役後の形勢は、俄然一變して、露人は諸事愼重の態度を取り、清人は稍々輕侮の念を生じ、爲めに對等の交際を爲すに至れり。故に土人の我帝國を德とし、我叡聖文武なる

三寡婦の言

日露戰役と國旗の掲揚

天皇陛下を仰ぐの情は、實に言ふべからざるものありて、彼等は公々然として明言すらく、若し日露戰爭徵りせば、新疆は既に清國の有には非ざりしならんと。萬里の異鄕に在りて是等の情況を見聞す。豈痛快禁ずる能はざる無きを得んや。

一日、予一纏頭鄕約の招に應して之に赴く。座に在る者數人、談偶々日露の戰爭に及ぶ。一人曰く、露領某村に、我が知れる三人の姉妹寡婦あり。其の夫皆徵せられて同役に戰死す。然るに彼の寡婦三名は、異口同音他に語るらく、夫の死や眞に悲むべし。然れども日本の戰勝は、實に賀すべし。抑々夫をして死に至らしめ、妾をして斯く悲しむに至らしめしは、抑も誰の罪ぞと。未だ曾て毫も貴國を恨むの色なし。況んや戰爭當時に於ける當地の狀況に就きて思へば噴飯に堪へざる一事あるをや。果して之を何とか爲すと。彼れ嬉々語を次いで、初め九連城の戰報あり、其の勝敗未だ知るべからざるに、露領事は洽く居留地內に嚴達して、露國既に勝利を博す。宜しく國旗を軒頭に掲げて祝すべしと。居留民之を信じ、一齊に國旗を掲ぐ、未だ幾許ならず、北京より詳報至り、露國の大敗、貴國の大勝を傳ふ。掲げし旗は一つ減し二つ減し、次第々々に相減じて、遂に全く撤去せらる。以來遼陽の

大戰奉天の激闘、皆然らざるは無し。是に至つて、領事復た祝旗の揭揚如何を言はず。從ふて虛報時に露國の捷利を傳ふるも、容易に國旗を出す者なく、終局戰あらば、露國必らず敗北と假定せらるゝに至りて、此度は故意に國旗を揭げ來り、冷笑一番、露國大捷利と絕叫する等、實に滑稽を極めたり。謂ふ迄も無く一般の心中、深く貴國の勝利を祈り且つ祝し、露國の失敗を喜び且つ祝せりと。

滯在中一日露國領事ソコーフ氏を訪問す。試みに該領事の談片を記せば、『由來親交ありし日露兩國民、共に干戈を執て戰場に見ゆるに至りしは、深く遺憾とする所なりしが、幸に和親舊に復し、兩友再び握手するに至りしは同慶の至りなり。蓋し戰爭は、兩國帝王の爭ひにして、人民の相知る所に非らず。故に兩國の人民は、戰爭の有無に關せず、互に親友たり、同胞たり。予は今舊友と一室に會談す、實に近來の快事何ものか之に過ぎん』云々。之を前日烏魯木齊領事クロトコフの談に比較せば、啻に霄壤の差のみに非ざるなり。

時代の變遷

塔爾巴哈臺は、漢代匈奴の西境にして、烏孫（今の伊犂）の北境たり。北魏（四百年代）に嬬嬬の地、周代（五百年代）に突厥、唐朝（六百年代）に西突厥と稱す。成吉思汗の十七年（千二百二十二年）皇子圖類、之を塔爾巴哈臺と改む。蓋し蒙古語に水獺多しとの義なりと。憲宗の二年（千二百五十二年）默哷の部下に屬し、明代（千四百年代）準噶爾の游牧地と成るとの。

邊城春不度　三月雪封山
仰視北辰近　又聞人語蠻

今や北は旅程を塔爾巴哈臺に留め、更に南轉して伊犂に向はんとす。是に於てか再び西湖まで逆進せざるべからず。即ち四月二十一日塔城を發し、當日は河上に翌日は老風口に、二十三日托里、二十四日坤都倫、二十五日什納札、二十六日小草湖、二十七日頭臺、二十八日西湖に着し、翌日休養三十日愈〻伊犂に向ふ。

西湖へ背進

## 第五節　西湖より西して伊犂に入る

一、夏の如く冬の如し

四月三十日午前六時三十分西湖を發し、普爾塔齊（プルタチ）を經て、行程約十一里、四棵樹（スーコウシュ）に達す。道路砂質良好なるも、緩なる傾斜を以て昇降するが故に、處々凹地多く、且つ天山よりの散水は、往々磧原を作れり。四棵樹は人家約三十、其東南數町の地に、吐

吐爾扈特郡王の衙門

野草花咲き柳榆芽を發す

爾扈特郡王の衙門あり、同王は目下我國に游學中なるは、普く世人の知れる所なり。附近一帶甍幕の處々點在するを見る。氣候は六月最も暑く、十一月最も寒し、其南山約五里餘の處より、砂金及松樹を出すと。沿道黃色の野花開き、柳榆發芽す。惟ふに故國の昨今は、爛漫たる櫻花既に謝し去りて、流鶯空しく野外に囀じ、楊柳影濃にして、薰風將さに至らんとする時なるに、此地は春稍〻整はんとして、尙ほ雪を見ること有り。殊に六月極暑、十一月極寒と云へば春夏秋冬偏に我國の季節を以て律すべからず。現に極暑の期に近づけるに野草漸く花開き、柳榆僅に芽角を見るは是れ春の趣ならずや。而も寒暖計を按ずれば、午前は五十六度、午後は八十四度を示せり。夏の如く冬の如く、又冬の如く夏の如し。之を春以外の春とせんか、夏以外の夏とせんか、予は其の季節の何れに配すべきを知らず。

五月一日墩木達を經て行程約十里、古爾圖に、二日同じく十二里餘を進みて托多に宿す。一日の行程は緩斜の昇路に屬し、且つ處々濕潤の地多く、灌木雜草のみ繁茂す。二日の行程は發途約一里間は磧原を成し、他は往々濕地に遭遇するも、一般に黃土砂を交えて平坦、且つ梧桐の大森林蔭蔽せり。

梧桐の森林

精河と蒙古王

日中の氣溫九十三度大雨漏屋

三日の行程中、托多卞房（所喃）間は、梧桐の疎林葦蘆を交え殊に其の北側に多く、其れより以西は沙漠帶、沙丘亂疊して約十二里なる龍王廟に到る。四日の行程は僅に五里餘なる精河に着せり。沿道一般に沙磧地を成し、卞房の西南に沙崗の峠あるも昇降共に頗る緩斜とす。精河は人家約百戶、精河直隷廳衙門、參將衙門あり、步隊一營馬隊一旗駐屯す。此地に吐爾扈特貝勒一同貝子一あり。

五日永集堡を經て行程約十五里、大河沿に宿す。精河、永集堡間は、農家點々耕地多く、目下播種前に方りて、何れも引水しつゝ在り。又永集堡、大河沿間は、梧桐林其の他葦蘆茂生し、往々溜水地を見る。大河沿は人家七十戶、馬隊十餘騎あり。是日暑氣甚しく、日中九十三度に上りしが夕刻小雨西方より來り、爲めに大に涼味を覺ゆ。斯て夜は將に半ならんとする頃、大雨俄に至りて、客舍內水を漏し、再び就眠し得ざりしが翌六日朝來東風强く、一たび雨雲を吹き拂ひしも、尙ほ時々小雨あるに因り、更に一日茲に留れり。

七日行程約七里、五臺（又托霍木圖と稱す）に着す。此の間直道約四里に過ぎざるも、一帶に濕地なると、一昨夜の降雨の爲め本道は容易に經過し難きとを思ひ、遙に南山麓

を迂回したればなり。五臺の西北方約二里の邊に、尖頂の一山脈を望み、又南山は近く一里内外の處に聳ゆ。

八日道路沙礫、緩なる上傾斜を以て、行程約十二里、四臺（又素圖布拉と稱す）に到る。其の南山に始めて松樹の繁茂するを望む。蓋し本日の行程は全く山路なるに、一の流水を見ず。又前日來の暑氣頓に減じて、僅に日中六十二度を示すに過ぎざりき。

山上の大湖

**二、** 賽里木湖畔夏尚ほ寒し

九日の行程は略〻前日と同じく、三臺（又鄂勒著依圖博木と稱す）に投宿。雅碼圖よりの捷路此に相會ふ。道路は昨日と大差なく、山路上り盡せば僅に下て嶺上に一大湖を湛ゆるを見る。此れを賽里木の鹹湖（周圍約我五十里餘）と爲す。三臺は其東南端に在りて人家僅に十二戸、此附近は南山北山共に松樹茂り、頂上今猶ほ雪を存し湖面も未だ薄氷に掩はる。湖岸解氷するもの數十米突、鴨類の水禽其間に群游し、湖水は頗る清澄にして湖底の礫石明瞭に數ふべし。湖水面は海拔實に四千尺の高きに位置するが故に、風常に強く、方向更に定らず、湖邊常に白氣を認む。

水禽と迷信

湖水には魚類棲息せず。土人は其の水禽を捕れば風雨の變り有りと云ひて捕獲せず。迷信の結果水禽の安全なる避難所、蕃殖所と爲れり。又湖中一島あり、廟を設けて龍王を祀る。我辨才天女を祀るに異ならす。是日途上黄羊の群に遭遇し射て一頭を獲たり。

**三** 始めて松樹を實見す

十日賽里木湖畔を過ぐれば、所謂伊犂の關門たる塔爾奇の長狹隘谷にして毎年多少の修繕を加へて漸く車馬の通行を許す所なり行程約十二里、二臺（又鄂博勒齊と稱す）に着す。此地官店一戸の外、驛舍及小營房ありて、歩隊十名馬隊五騎を駐屯す。左右絶壁、溪水急下、轟々囂々、客夢を破るもの數次。

疾風揚浪扣船舷　飛沫沾衣忽冷然
夢醒尚聞濤響急　知他春水滿前川

沿途の山々皆松樹、是日始めて之を實視するに、一見五葉松の如きも其實、普通の松にして、幹直く、枝短く、樹容宛ら杉に似て、葉は密生一ッ葉、長さ約二珊知あり。巴爾魯克山のものも恐らく同種ならん。

**四、** 一日間に冬より春

十一日、頭臺（又塔爾奇阿と稱す）を經て行程五里餘、蘆草溝即ち廣仁城に入る。道路初めの三分の二は、急坂石多く、後の三分一は路側に松、樺、白楊、李其の他雜灌木を混せる樹林を成せり。就中、李花既に滿開して蒼樹と相交り、翠微の間に白濃々を望み前途の路畔亦百草の紅白を裝へるを見たるは、蓋し渡清以來の眺めにして、前日三臺に氷雪に接し、今東風の駘蕩に浴するは一日を間して、宛然冬より春に渡りたるの感あり。之を曩の四裸樹畔、夏の如く又冬の如くなりしに對照すれば敢て怪しむに足らずとす。

百花爛漫

柳樹溪間被雪眠　梨花郊外帶風然
一時併見春冬景　亦是人間小變遷

蘆草溝は塔爾奇の谷口を扼する方形の土城にして、伊犂七城の一なる廣仁城即ち是なり。人家約百戸、步隊一營、馬隊一旅を駐屯せしめ麥、大麥、豌豆、粟、玉米、及高粱等を產す。

蘆草溝

十二日右に妖魔山を望み、塔爾奇河の右岸に沿ひて南に下れば、左右は緩徐なる臺地を成し、一般開濶にして耕田多し、塔爾奇河を渡りて、地窩堡より東南に進み、行程約七里餘にして、綏定城即ち伊犂府に入る。此地より更に西北方に進めば、清水河即ち膽德城に、又南下せば、新城即ち惠遠城に達すべく。前者は行程我三里弱後者は僅々一里强に過ぎず。予は此地及其の附近に滯在するもの十七日間、更に路を東南方に轉し、喀喇沙爾に向つて出發せんとす。

三面奇峯一面開　戍樓對峙霍河隈
將星高挂邊疆外　瀚海天山不染埃

## 五、伊犂

伊犂三角

伊犂の地たるや、天山其の南に峙ち、塔爾奇山其の北に聳へ、那喇特山其の東を控し、霍爾果斯河其の西を繞る。是に於てか地形自ら東に狹く、西方次第に開けて、殆んど三角形を成せり。故に歐人此の地を稱して、伊犂三角と呼ぶ。

伊犂の七城

伊犂七城とは、惠遠城、綏定城、塔爾奇城、膽德城、拱宸城、廣仁城、熙春城、即ち是なり。而して別に寧遠城あるも、回城の故を以て算入せず。此地舊と準噶爾の游牧地に屬せしかば、固より城廓等の有るべき無く、清廷之を討平し、乾隆二十九年（千七百六十）伊犂河の北岸に、先づ惠遠城を創築せるを始とし、由來其要を感じ、一城を加へ、一城を

惠遠城

增して、遂に七城を成すに至り、人口三十五萬と稱せられ殷賑繁華を極めしが、端なく同治の回亂は各城悲慘の破壞を受け、漢滿人其の大部分虐殺せられて、城は唯壞壁碎瓦の堆積するものと變じ、民屋悉く燼灰焦土と化し去りしも、爾來清廷頻に、城壁を修め、且つ移民を奬勵せし爲め漸次舊態に復し、現今約二十萬人を有するに至り、其の要衝たると共に、又省內人口稠密の一區と爲れり。

惠遠城（ホイユワン）は東徑八十度五十八分、北緯四十三度四十五分省會に至る二百三十五里、北京を距ること實に千五百六十九里に在り。現今の城壁は光緒初年の新築に係り、舊城の北方約十數町の處に當る。城內には伊犂將軍衙門を置き、下に副都統及び察哈爾（チヤハル）、索倫（ソーロン）、錫伯（シーボ）、額魯特（ルート）の四領隊大臣、新滿營、舊滿營、協臺等の衙門及電報局、官錢局等備はりて、人家約一千七百戶、內滿人六百戶（舊滿人二百戶、新滿人四百戶）漢人纏頭六百戶を有し、街路廣濶、下水縱橫に通し、其の清潔なること省內第一とす。以上の外、錫伯人は伊犂河の左岸に散居し、之を八牛彔（ニユールー）に分つて、總計約二萬人と註せられ、索倫人は、城の西北約五里なる、索倫營に住みて總計約八百人、又額魯特人は、南方天山の山中に、察哈爾人は、塔爾奇山中に而して哈薩克は、伊犂河の上流に、竝に游牧す、而して哈薩克は額魯特領隊大臣に直屬す。

兀魯特と額魯特の辨

蓋し錫伯は奉天滿洲より、索倫は黑龍江岸よりの移住民（屯田兵）額魯特は蒙古人種にして、準噶爾の遺民なり。又歸化城の北方に兀魯特（ウルト）と稱する處あるも、額魯特（ルート）とは異なりとす。兀魯特民は正しき蒙古語を用ゆるも、額魯特は其の語土爾扈特族と同じく蒙古語を用ゆるも轉訛多し。又察哈爾は張家口一帶の稱呼にして、該地方より移住せし蒙古族なり。

綏定城

滿人中、新舊の稱へあるもの、其の舊滿は、眞の旗人にして、新滿は、錫伯より補充せるを以て此稱あり是等の各人種中、同治回亂の際、滿人、索倫は力戰奮鬪、殆んと陣亡し盡し、錫伯は回徒に內應して、纔に難を免れたりと。

綏定（スイチン）城は、惠遠城の北約一里餘に在りて、城壁高さ一丈七尺、周圍二十四町に餘れり。殊に其の城壁は、石を以て基礎とし、土を以て內を實し、外甃むに石或は磚を用ひ底厚頂厚共に一丈五尺、東西南の三門を設け、各門前には月牆を置き、門上櫓樓をこし、其の工事の洪大なる、築造の堅實なるは、他城の比に非らず。城內には伊犂府、綏定縣、鎭臺衙門等ありて、人家約二千戶、過半は纏頭回とす。市街は二條の大街

を以て、正方形の四部に分劃し、商店櫛比、內露商の開店するもの三十餘戶、棚を架け、幕を張りて、衣服、雜貨、肉、菜、糕、菓實等の類、一も備はらざる無く、人馬の往來織るか如し。

廣仁城

廣仁（コワンジン）城は、綏定城の北方約七里に在りて、其地を蘆草溝と呼ぶ。東北塔爾奇峽谷を扼し、西南妖魔山を隔てゝ瞻德城と相呼應す。乾隆四十二年の造築に係り、城壁高さ一丈三尺、周圍半里餘、人家約一百戶を有す。

瞻德城

瞻德（タント）城は、綏定城の西北約三里、其地を清水河と稱す。乾隆四十年創築する所と城壁高さ一丈三尺周圍半里餘東西南の三門を設く同治回匪の亂に、清兵早く退き唯回民のみ住居せしが故に、其の慘害を被らす、城樓廨署等悉く舊態を存し、城內には游擊衙門ありて、人家約二百戶を有せり。

拱辰城

拱辰（コンシン）城は、綏定城の正西約十三里、其地を霍爾果斯（ホルゴス）と稱し、乾隆四十二年の創築に係り、城壁高さ一丈七尺、周圍半里餘、城內參將衙門、通判衙門（綏定縣管轄）等を置き、人家約百五十戶を有す。

露清兩國

該城は露清の國境たる霍爾果斯河を東に距る僅に里餘、實に彼我交通の關門たり。霍爾果斯河岸は露、清兩國の戍兵各處に對峙し、屯在警戒す。

戍兵の對峙

本道上に在るを昵堪卡倫（ニカンカーロン）と呼ぶ。相距る共に七八百米突、河水淺く隨所に徒涉し得べし。而して本道以北は、左岸（清領）は以て右岸を（露領）を瞰制すべく、以南は之と相反對せり。

塔爾奇城

塔爾奇（タルチ）城は、綏定城の西五里、其地を塔爾奇と稱す。乾隆二十六年の創築にして城壁高さ丈餘、周圍十町餘、回亂後修築を加へざるが故に、今は野草芊々、山禽聲憐れに、唯々一寒村の狀態を留むるのみ。

惠寧城

惠寧（ホイニン）城は、綏定城の東約十里餘、其地を巴彥臺と稱す。城は乾隆三十五年の創築に成り、城壁高さ一丈四尺、周圍約一里、往時は滿營兵の駐屯せし處繁盛の都會なりしも、同治の亂、滿兵二千、人民三萬餘、擧て回匪の爲めに虐殺せられ、爾後復た舊に復せず、現今、城外約六十戶の纏頭を見るのみ。

熙春城

熙春（シチユン）城は、惠寧城の南方約一里、城盤子に在りて、乾隆四十二年の創築に係り、城壁高さ一丈、周圍十餘町、人家約五十、馬隊一旗の駐屯するもの有り。

寧遠城（即ち固爾札）

寧遠（ニンヨワン）城は、熙春城の南約一里、伊犂河の右岸に位置し、露人は其地を固爾札（クルジヤ）と稱へ清人は又金頂寺（テンデンズ）と曰ふ。城壁高さ一丈六尺、周圍二十餘町、東西南北の四門を置き、

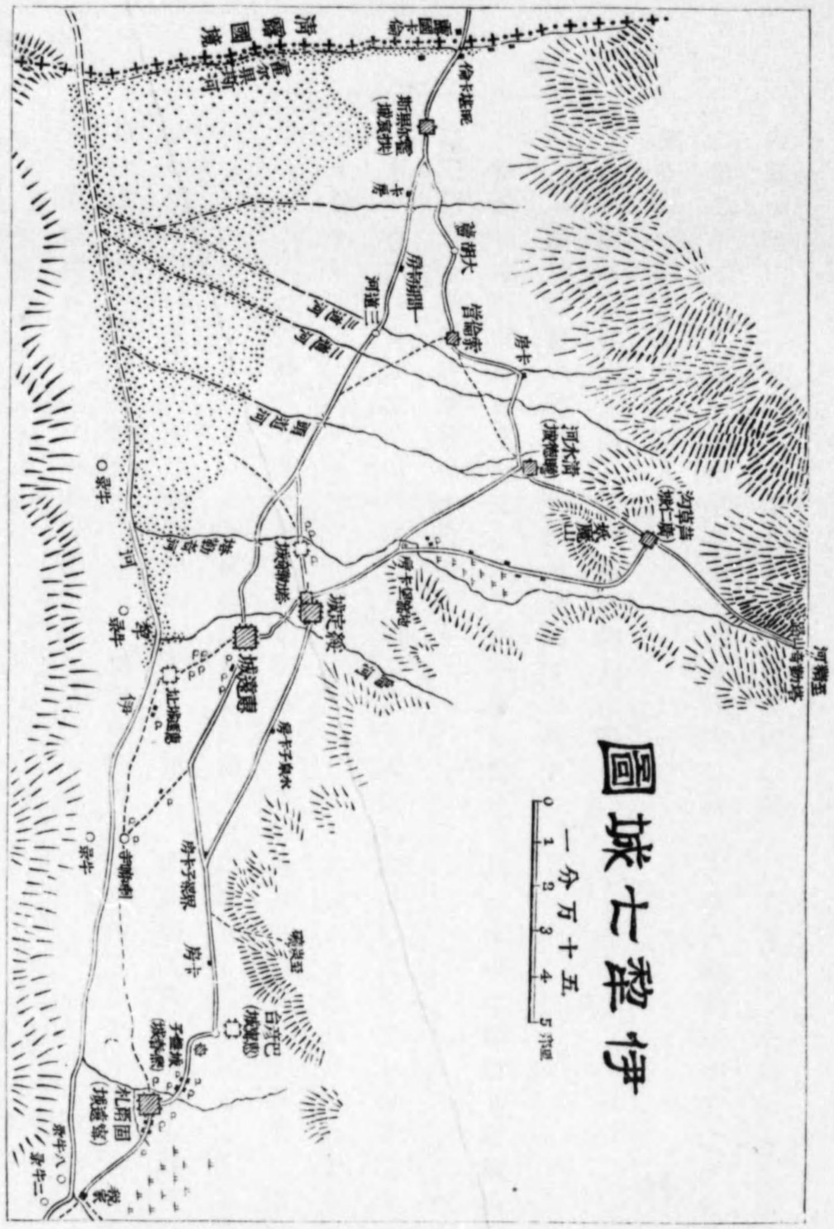
城内には伊塔道臺、寧遠縣、都司の諸衙門、通商局、電報局等、又城外には、露國總領事館、同電信局、露清銀行支店等ありて、人家總計約五千、其大部を露人とす。内商店六百餘、大なるは塔思干(タシケンド)、浩干(コーカン)、安集延(アンジャン)、喀什噶爾等の商人にて、露國製の更沙、羅紗、鐵具等を輸入し、家畜、羊毛、獸皮等と貿易せり、又城盤子及當城間は樹木多く、人家其の裡に點在して、露人の別莊及數所の製毛、製皮、製粉場あるを見る。

市場の奇觀

此の地は舊と清商と游牧民との交易場に過ぎざりしが、輓近露國と通商を開くに及び、商況次第に旺盛となり其の市場に於ける衆種族の會合を見ること、又喀什噶爾の比に非らず、凡そ漢人、滿人、漢回(纏頭回を始めとし、其の他錫伯、索倫、額魯特、蒙古、哈薩克、敖蓋(カイ)意(カザン州)(露國の回教徒なり)吉爾吉思、安集延、塔思干、浩干、猶太、歐洲露西亞人等各人種各別の容貌、各異の衣、帽、同聲異音の談話を以て、彼我賣買、步騎混合して、東西に往來するの景況は實に天下の一奇觀たり。

伊犂河の遊閒

伊犂河は惠遠城の西門外烏河の右岸に沿ひ南下約二里にして、直に之れに達すべし、此間沙地大部を占む。同河右岸は斷崖絶壁、遠く左岸を制し、且つ北方に彎入せるが故に守るに利あり。河幅は六七百米突以上、千米突に及び、水深く、流れ急、其


伊犂城圖
一分万十五
0 1 2 3 4 5 支那里
伊犂河
惠遠城
城滿洲
城漢回
北城滿洲
惠遠城
房十子
房十子泉水
房十子泉
房十子
房十子橋
房十子橋水
房十子橋河
札所回
(城滿洲)
白彥巴
(城漢回)
(城滿洲)
(城漢回)
(城滿洲)
(城漢回)
(城滿洲)

の減少時には、馬首漸く現出し、辛ふじて渡河し得べしと云ふ。予滯在中、故錫將軍の第二子、孝昌氏其の他數名と轡を連ね江岸に漁夫を求め、鮮魚を獲て之を食し、風流半日の閑遊を試みたり。

結伴連騎騁勝遊　一鞭直到大江頭
漁翁贈我新鮮鱠　放馬蘆洲枕碧流

伊犂の地紅錢三百八十文を以て、銀一兩と算す。烏魯木齊は、四百文、塔爾巴哈臺は三百六十文等、各地皆多少の差あり。

氣候

氣候は温和の候少く、寒暑共に酷烈なるも、天山北路にては、比較上適良の處たり。毎年極暑は七八月、最寒は十二、一月とし凍氷は十一月末より、解氷は三月よりす。降雨は五、六、八、九月に限り下種三月、收穫八月とす、四五月は西風多く、冬季は無風を常とせるも、若し之れあるときは、北風にして而も激烈なりと。予當地に留ること前後十七日、即ち五月十三日以降、同廿九日に至る。此間總て快晴、唯二十四日のみ西々北の風を起し、俄然曇天と爲りて、冷氣亦頓に加はり、昨日まで日中單衣を着せしも俄然綿衣尙ほ冷を覺ゆるに至れり。

予の伊犂に着するや、其の範圍の廣き、從ふて大小官憲の訪問應答、巡覽視察等頗る煩繁を極めたり。然るに恰も十五日、綏定城外を一周せんと欲し、乘馬一頭を知縣に依頼す。知縣其の選擇に惱むの際、適〻露國の『アクサハル』(村長)某進んで居留露人の駿馬を周旋す。予厚意を謝し、『アクサハル』並に纏頭鄕約二名と同行し、城外に出づるや、予が乘馬數次奔逸せんとす。惟ふに此馬は嘗て競馬に用ひしものか、或は予が服裝の異樣なるに驚きたるものならん。是に於て小心翼戒しつゝ進む。斯くして城北營房附近の高地に到り、熟々城外附近の地形を視察中、忽爾腹條の切斷すると共に、端なく馬驚いて奔跳し予は地上に落ちて、鐵蹄右手の甲を傷く、出血淋漓、鄕約愕然として一方予を扶け、傍ら奔馬を捕ふ。予痛苦を忍び、手早く繃帶を施して、別事なきを表し、一鄕約の勸むるまゝ、馬を換へ視察を遂げて歸り、更に繃帶を除きて熟視すれば、思はざりき創口約寸餘、深さ骨に達せむとは。衆皆驚き、異口同音、彼の『アクサハル』を罵り、或は故意此に至ると爲す。『アクサハル』叩頭謝し且つ陳ず。予曰ふ諸氏請ふ尤むるを止めよ、『アクサハル』固より何等の意あるに非らずと雖も、彼の馬性頗る敏、或は一矢酬ゆる所ありしならんと

視察中の負傷

一座哄然たり。以來十餘日、貼藥怠る無きも、創傷更に癒えず。頸部より繃帶に依りて胸邊に吊すの不便言ふべくも非らず。然るに伊犂出發後、一日哈薩克人の教ゆるまゝ、羊脂の一小片を炙りて、其の脂肪沸きつゝ在るを、迅速に創口に附着し、堅く繃帶を施したり。斯の如きもの數回、良藥尙ほ醫し難き創傷も、彼の言に違はず、忽にして癒えたり。何事をも知らざる哈薩克、是に於て大に知ること有りと謂ふべし。予は特に掲げて參考に供す。

創傷と哈薩克人の療法

史を按ずるに、伊犂は漢代の烏孫國。初め烏孫王難兜靡、月氏の殺す所と爲るや子、昆莫、新に生れ、傅父希就に抱かれて匈奴に投ず。單于之を養ひ、壯なるに及んで仇を報せんとせり。時に月氏既に西、塞王の地に遷る。昆莫之を追討し月氏遁れて大夏に投ず。昆莫因て此地に留居す。武帝の初め、昆莫十餘子あり、中子太祿最も彊、太子早く死するに因り、昆莫其の子岑陬を立てゝ太子としたるが、太祿己れを立てざるを恨み、兵を擁して叛く、昆莫亦兵を分つて岑陬と別居せしかば、國自ら三部と爲る元封中、昆莫、岑陬皆死し、岑陬の子、泥靡立たんとするや、太祿其の成年ならざるの故に、國を以て自己の子翁歸靡に與へ、歸靡死せば泥靡に還すを約す。是に

沿革

於て歸靡立つて肥王と號せり。昭帝の時（紀元前八十年代）匈奴、烏孫を擊ち、車延、惡師の地を奪ふ。王上書して救を請ふ。宣帝立ち、五將の兵を發し、直に匈奴を攻む。匈奴既に衰へ、深く烏孫を怨みとす。其冬單于自ら烏孫を擊ちしが、偶〻天大に雪を降らし、還る者十分一なる能はず。匈奴遂に衰ふ、時に本始三年（紀元前七十一年）とす。

元康二年（紀元前六十四年）翁歸靡死す。國人即ち前約を守り泥靡を立てゝ狂王と稱す。狂王の男鴟靡文と和せず。爲めに衆の心を失ふ。漢使、魏和意、任昌、其の國に至るや、狂王之を殺さんとして、却て翁歸靡胡婦の子、烏就屠に刺され、烏就屠立ちて小昆彌と號し、翁歸靡の正子、元貴靡又立ちて大昆彌と號し國內兩分して竝に漢に降る。甘露三年（紀元前五十一年）元貴靡歿し子星靡嗣ぐ、星靡死して、子、雌栗靡嗣ぐ、又烏就屠の歿後子栖離嗣ぐ。然るに栖離弟、日貳の爲めに殺され漢栖離の子安日を立つ。安日客をして日貳を殺さしめしも、身亦降民の刺す所と爲る。因て漢、其弟、未振將を王とす。未振將後、雌栗靡を殺すに當り、漢栗靡の季子伊犂靡を立て未振將幾許ならず刺殺せられ、安日の子、安犂靡代り立ち、以來連綿、兩昆彌常に大國を成し、章帝の建初八年（八十三年）大小昆彌共に、錦帛の賜を受けしより、爾後更に史に見えずと云ふ。



魏の世、數〻蠕々の、侵す所と爲り、西に徙つて葱嶺の山中に入る。隋の太祖開皇中（五百八、九十年代）達頭可汗、突厥と烏孫の故地を分ちて西突厥と號す。唐の太宗貞觀中（六百三十年代）吐陸、失利と相爭ひ、遂に伊列河（伊犂河）の諸部と約し、河以西は吐陸之を主り河以東は咥失利之を主る高宗の顯慶中（六百五十年代）唐に入貢し、其地を以て休循都督府と爲す。武后の朝（六百八十年代）西域に雄たるも、後黃黑兩姓に二分して、拮抗寧日なし、玄宗の開元三年（七百十五年）吐蕃、阿了達を立てゝ王とす。天寶三年（七百四十四年）國を改めて寧遠と稱し、姓を竇と賜ふ。同十三年王忠節來貢、後又回鶻と爲る。元の代（千二百年代）阿里馬、明の代（千四百年代）厄魯特、四部に分れ、綽羅斯部其主に居り、即ち準噶爾とす。

伊犂將軍の好意

## 六、伊犂と南路との交通路

予は今や伊犂を出發すべきに臨みたり。而して伊犂滯留中は將軍衙門の各官其他の文武官より歡待厚遇尋常ならず、殊に長將軍の厚意に因りて、自後必要の天幕、乘、馱馬、糧秣等の準備は、一切沿途游牧民よりの供給を受くることゝ爲り、予は只若干の土產品、即ち游牧民が最も珍とする所の茶を主に用意せし位に止まりて何等の支度も要せざるに至るは是れ實に意外の幸福にて、深く將軍に感謝せざるべ

からざるなり。

伊犂より天山を通過して、南路に出づる山路には二ッあり。即ち其一は阿克蘇に到るもの、捷徑なりと雖も、險且難、其二は即ち喀喇沙爾に通づるもの、迂なりと雖も比較的容易なり。因て予は其二を取る。

木蘇爾達坂山路の狀況

聞く阿克蘇に出づる道路は、特克斯河谷より氷嶺を超過す。是を木蘇爾達坂（回語氷嶺の意）山路と稱す。該山路最高の地點は、海拔實に一萬八千尺、四時氷雪に掩はれ、一望無限、只見る玻璃酷寒の乾坤を成し。玲瓏なる山坡一起一伏、更に定りたる道あらず其の至難中の至難處は、噶克察哈爾海臺より塔木哈什臺に達するの間とす。嶺頭陷沒して約長さ三里、幅十八九町の氷谷を成せり。四邊固より土沙草木の在るべき筈なく、氷巖重疊巉々空を摩し、蟲々雲に聳え處々穴坎を成し深さ幾何なるを知らず下に淅瀝の聲を發し、人畜險を冒して此處を過ぐるや、缺石塊氷相交り、一歩過たば萬事休す。

畜類の或は力竭き、或は巖氷に觸れ或は暗坎に陷りて、不測の禍に罹りたる、新舊の遺骨死屍は、累々相枕みて、凄絶慘絶、震慄酸鼻に堪へざらしむ。世は廣く、人種亦鮮しとせずと雖も、斯る危險の地を往來するに至りては、恐らくは之を新疆土人に求むる外、將た何人か有る。實に彼等は、一種不可思議の人種にして、利益の前には危險なし。之を以て古來毎年、南路の纏頭該山路を辿り、伊犂に布匹を輸送する爲め、官、嶺南に纏頭一百二十戸を置き、日々氷磴を穿鑿修理し、橋を架し、滑走を防ぎ、專ら其通行に便ならしめしが同治の回亂後、此の事全く中絶したり。然れども剛膽なる商民は、今尚同山路を取る者ありと。

畢底爾山路と圖魯噶爾特達坂

又阿克蘇、伊犂間、烏什より畢底爾山路を越え、セミンチェンスク州、喀喇濕勒に出でて、伊犂に赴くの一路あるも、是れ亦甚だ險なりと云ふ。喀什噶爾よりするには、圖魯噶爾特達坂を過り、納林斯廓、威爾泥を經て伊犂に入るもの、辛ふじて車輛を通ずと。

庫々烏蘇山路

斯て喀喇沙爾に到るにも、亦數條の道路ありて、特克斯河の右支流なる、庫々烏蘇河に沿ひ、其の上流にて山を踰え、大著勒都斯の河谷に出づるもの、是を庫々烏蘇山路と稱ふるも、素より紀行なく知る人なきが故に遂に狀況を知るを得ざりき。

那喇特山路

又空克斯河を溯り、昌曼山を過ぎ昌曼河源より、那喇特嶺を越え、小著勒都斯河谷

に出で、更に哈布齊汗嶺を越えて、哈布察河に沿ひ、東南下するものを那喇特山路と、稱し同山路は海拔一萬一百尺の高所を通過するも、概ね緩傾斜なるに因り全路乘馬し得べく、伊犂より南路に出づる最良路と呼ばれ、且つ伊犂の唯一後路に當れる、重要の山道とす。往昔準噶爾人の伊犂、哈密間を往來する、皆此路に由れりと。

寧遠城より喀喇沙爾に到る、約二百里、通例十八日乃至二十日の行程とす。予の通過せしは、那喇特嶺の連脈にして、西方約五里弱なる、海拔一萬一千七百二十尺の達哈特嶺なり。該嶺の前後二日の行程を除く外は、全く那喇特山路と同一の徑路にて、其概況は左節に之を述へん。

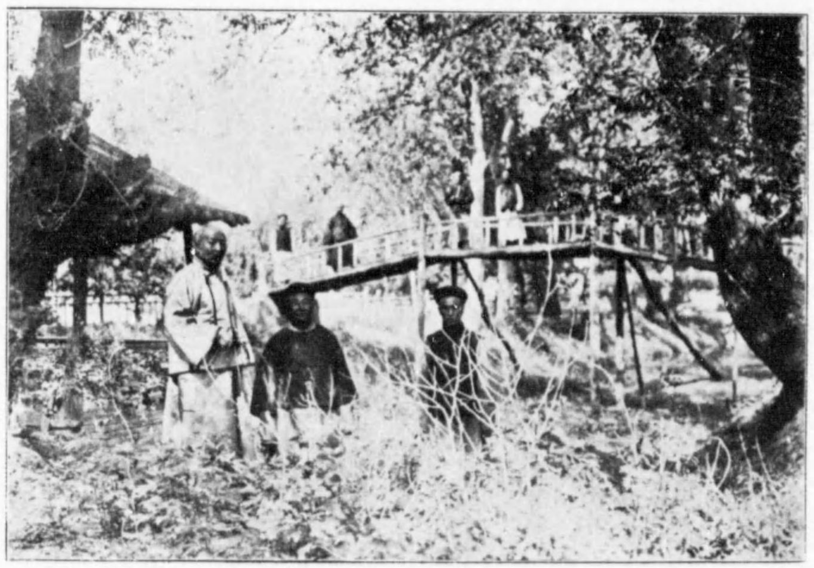
予が取りし山路

## 第六節　伊犂より喀喇沙爾に到る

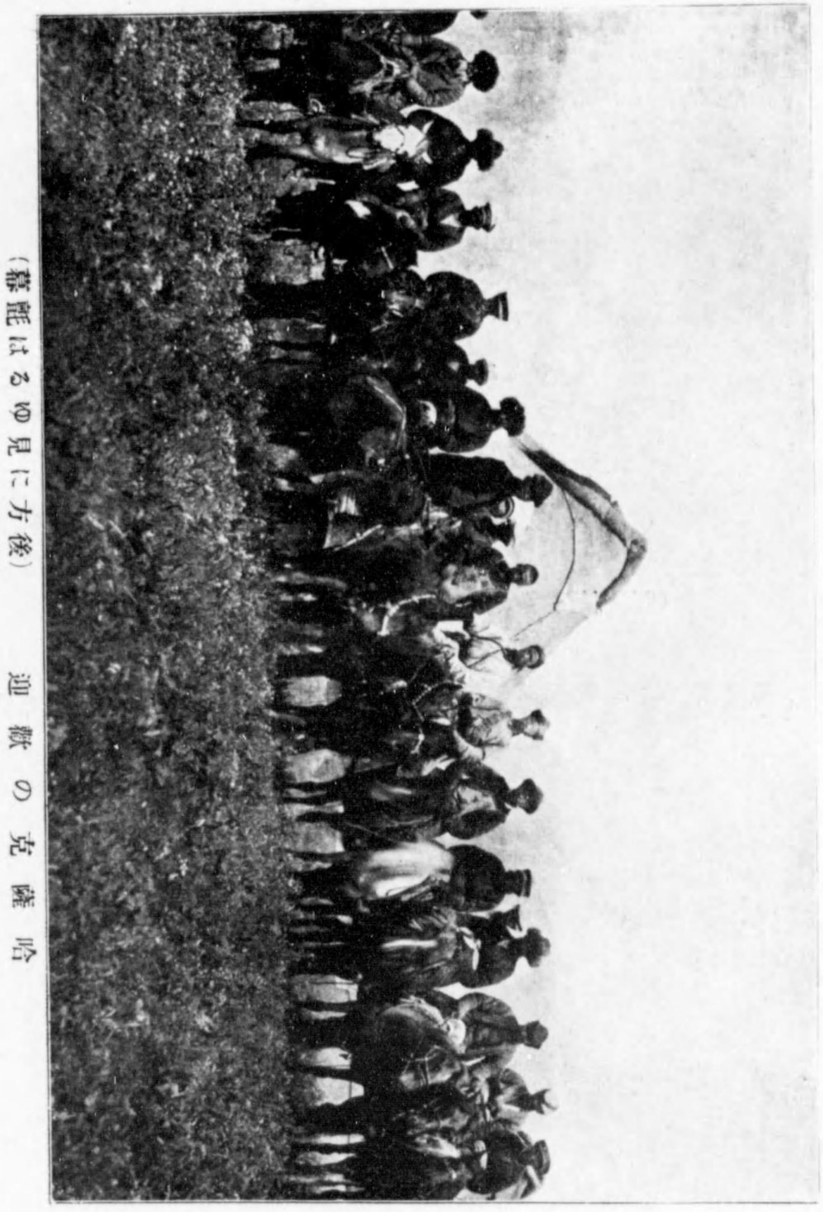
### 一、露國總領事との會見

予の伊犂滯在中は、概ね惠遠城に在り。五月二十八日、愈々同城を出發して寧遠城(固爾扎)に向ふ。此間行程約十四里、露國式馬車に依れり。路は惠遠城を出づると共に、伊犂河の右岸に沿て上る其左岸には錫伯人の部落相望み、右岸には經頭回、

伊犂將軍の花園（向て左は副都統廣福）



上　同



迎歡の克薩哈（轎籠はるゆ見に方後）

伊犂鐵道獄

宿舍は頭要商の洋館

漢回の部落各處に點在す。園囿は清潔にして、高大なる樹木駢植せられ、耕田其間に散見し、數多の溝渠を引きて灌漑に供せり。

予は寧遠城に留ること二日、其間に於て露國總領事セルゲイ氏と會見したり。氏は永年此地に駐在し、資性、溫厚篤實にして深く清民上下の人望を負ふ。予が訪問の際に於けるも、頗る叮嚀を極め、翌日答禮の爲め、予を宿舍に訪ひ、欵話數刻、談會會伊犂鐵道工事の難易に及び。予が經由せし地の、該路線に當れる故を以て予が意見を叩かる。敷設工事に於ては唯六盤山に隧道を設くる難工事ある外、道路は概して平坦なれば頗る容易なりと信ずと。氏然らば戈壁地帶其他に對する石炭及水の供給如何と予曰く水を得るは僅の設備を施せば、敢て難しとせざるべく石炭は所在多少の產出あれば、供給に不足を告げざるべし、要するに該鐵路は資金さへ有らば必ず成功せんと。滯在中、道臺、知縣を始め文武官の來訪者多く、頗る優遇を受けたり。

旅宿は特に將軍衙門より充てられし所のものにして、即ち纏頭の豪商ヤホヅの居なり、壯大なる洋館當城第一と稱せられ、內外の大官珍客の此に到る者、皆此に宿

せざるは無しと現に予と相前後して、獨逸の伯爵某の來るに際し、露國總領事は直に該館の貸與を申込めり。然るに主人は、既に日本武官の前約ある爲めを以て斷然之を拒絶し、予に對して非常なる厚遇と親切とを與へたるは忘れんと欲して忘るゝ能はざる所なり。

護衛の士卒

二、瑪哈吐に哈薩克の歡迎を受く

三十日午前六時出發、數多の文武官の見送を受け、予は伊犂副都統より贈られたる駿馬に跨り、守備（我中尉相當）馬高陞及馬兵二、哈薩克聽差（チヤクルマンと稱す、傳令の意）二、且つ蒙古人六名（吐爾扈特汗王の年俸受領の爲め伊犂將軍衙門に來りし者）に護衛せられ、外に通譯一名を伴ひ同行す（以上は皆惠遠城より同行）。

阿由圩子を經て第四巴音托海に晝食、其れより第二巴音托海、克西喇克塔木を過ぎ、雅瑪吐に到る行程約十七里。雅瑪吐は伊犂土着民部落の最東端にして、此より以東を哈薩克の游牧地とし、此處には數十名の哈薩克先着し在りて、予が一行を歡迎し、哈什河の伊犂河に合流する點の西方數町の處に、兼て設備せる氈幕内に導き、茶菓を供し牛乳、羊肉を侑む。作法容儀稍〻奇なるも、丁寧懇切の情、自ら進退の間に溢るゝを覺えたり。

哈薩克と食物

哈薩克人の常食とする所のものは、多く羊肉を湯にて煮、之に鹽を附して食し、菜蔬の如きは、嘗て用ゆるを聞かず。日常斯の如くんば、到底壞血病の襲來を免かれざるの理なるに、絶えて此事なき所以のものは、多量に食草動物即ち牛、馬、羊の乳を飲むに原因せんか。果して然らば、乳中自ら壞血病を防ぐに足るの成分あるべし因て予も日々約五合の牛乳を用ひたり。元來哈薩克は回教の宗戒に依り酒を飲まず、故に馬乳を以て之に代ふ。蓋し馬乳は搾取せし時は甘味あるも數日攪拌して酸酵せしむれば酸味を生じて味頗る良しく之を飲めば微醺を催す。所謂馬酒とは即ち是れなり。

本日經過の道路は、伊犂河の右岸に沿ひて、一般開濶土質は黃土細沙を交へたり。第三巴音托海以東は、茂々草處々に叢生し、又阿由圩子より雅瑪吐に到る附近一帶は纏頭回民多く、約二百家あり、對岸は錫伯及纏頭回民の部落點在し、其南方山中には、哈薩克約二千五百、額魯特約五百戸游牧すと云ふ。

三、蚊虻、哈薩克を山中に逐ふ

伊犂河の渡場、哈什河の合流點

三十一日東行數町ならず、伊犂河の渡場に臨む。此地は哈什河の合流點にして河幅約五百米突、水深三米突、流速急激、渡船三分時を費す。渡り畢れば哈薩克千戸長（管三品）の設備せる天幕内に休憩し、三時十五分特克斯塔柳城に到り、其の東方數町の處に用意せる氈幕に投宿せり。行程約十三里當地の附近には、目下哈薩克を見ず。蓋し彼等は夏季蚊虻の害を避け、深く山中に入るなりと。城内には錫伯屯田兵住居し、城外經頭、回民の墳墓を見る。此附近は、往時衆多の住民を以て充たせしも同治回亂後痛く荒廢に歸し、近年僅に錫伯人の屯田する者あるのみ。地形は廣濶なる一連の臺地を成して地味膏腴なれば、最も植民地に適す。

哈薩克と里程、方角、年齢

予は試みに哈薩克の二三名に就て、明日の行程を尋ねたりしに、一人の明答を與るふ者なし。因て更に本日の行程と、比較遠近を問ふも知らずと答ふ。餘りの事に又復た問ふに年齢と方角とを以てせしも、遂に答ふる者少し、終生流離轉泊する彼等とは云へ、其の無神經なるや憐むに堪へたり。

## 四、成吉思汗時代の古蹟

六月一日、錫伯の屯田營地を過ぎて莫音庫色爾の氈幕に着す。其行程約八里半

四藏黃金佛出現

此地初めて哈薩克の氈幕あるを見る。沿道南山の麓に古墳多し、口碑に依れば、成吉思汗時代の物なりと。且つ同時代の一城址、臺里木吐に有り。又曰ふ寧遠城の對岸、二牛彔の南一日程なる海努古に準噶爾汗、阿穆爾薩那汗の居城址ありて、其の地中よりは、往々古器物を出し、現に採掘せる一黃金佛は在伊犂の露國總領事之を藏す。其他尚ほ特克斯、空吉斯等の六城址を存すと。聞く準噶爾の盛時西藏を遠征するや拉薩府に侵入して、重寶を奪略せりと、故に以上各城址を發掘せば或は稀有の珍品を發見するやも知るべからず。世の考古家佛教家、一遊を試みては如何。

當地は其の附近の山中に、金、銀、鉛、鑛多く、氣候は三、四月は雨期、十一月中旬以降一、二月雪期、三月は解雪期、又四、五月は風期とし、其量皆多しと云ふ。南山は其の南方面に松樹及雜木殊に繁茂す。

特克斯河の橋梁

二日、莫音庫色爾を發してより、前程忽急坂と變じ、一上一下、特克斯河を渡り更に大吉勒噶朗河の左岸に設備せる氈幕に入る。行程約六里とす。特克斯河は水量多く、且つ流速極めて急なるに因り、徒涉すべからず。橋は長さ約二十米突其の下流五百米突の處に於て大吉勒噶朗河を合せり。

莫湖爾河の出水、一日の滯在

三日、昨夜半より降雨甚しく、路は莫湖爾河に至りて、渡るべからず。行程僅に數町なるも竟に此に宿す。對岸は緩斜、此處は尙ほ急坂に屬す、渡るに橋なく、空しく水の減するを待つ。

哈薩克の奇橋

翌四日午前十一時、水漸く少なし。乃ち急行約四里餘、哈薩克の架せる奇橋に賴りて大吉勒噶朗河を越え阿克布拉克に達す。行程約六里。沿道は概ね天然の好牧場現に哈薩克の氈幕處々に點々し、河畔に林檎、杏、柳、樺、楡、桑等の樹木多し。

哈薩克の冬窩子

日本人のモデル

**五、** 濃霧咫尺を辨せず夾烏爾山

五日午前七時二十二分、夾烏爾山に向ふ。忽ち濃霧全山を掩ひて、四面咫尺を辨せず。前後呼應、馬を曳き杖に憑り、徐歩緩武、斯の如きもの霎時漸く霽る。山北約一里の間、峻坂相踵ぎ、徒歩辛ふじて過ぐべく、他は緩坂にして騎行容易なり。素勒布拉克谷は水草に富み、哈薩克の冬窩子即ち冬季の家屋點在し谷を出れば牧草繁茂の好牧地とす。

偶々其南側なる谷間より、白布を被り黑衣を着せる妙齡の哈薩克婦人六七名、何れも駿馬に鞭ちて馳せ至る。予は餘りに其乘馭の巧なるに見とれ、思はず駒を停めたるに、側なる護衛の一騎士、予が袖を曳て曰く、彼等は日本の大人を見んが爲め態々遠方より來りし者と。予曰く予は日本人のモデルとして見られんは、我國人に對するの面目を失す。諸子請ふ幸に我國人の爲めに辯護せよと。一行覺えず哄笑せり。斯くて塔勒德河に至り宿す行程約九里。

哈薩克の悃情

哈薩克の待遇

**六、** 連騎流水を堰く哈薩克兵

六日昌曼河を渡る。水深馬腹に達して而も流速極めて急なり。打ち見たる處能く渡渉し得べきやを危む。忽ち哈薩克千戸長の一令下に、三十餘騎一鞭馬を上流に躍らせ、予が爲めに一連の縱隊を作りて水勢を堰き、別に千戸長等數名予の前後左右に在りて萬一を警め、保護至れり盡せり、其悃情親切轉た感謝に堪へざるものあり。騎渡二十分間時にして始て登岸し別什脫博に達す。行程約七里。

氈幕内の狀況

別什脫博に達する約半里許の處に出迎の哈薩克五六十騎、路傍に下馬し予に對して一齊に敬禮の後、又一齊に乘馬するや、其の數騎は前驅と爲り、他は予に隨行せり。斯て設けの氈幕に着すれば、此處にも二、三十人の哈薩克出迎する鞠躬如として王公貴人を待つに似たり。而して其の氈幕内は、金銀五采の色糸にて刺繡（哈薩

克婦人の手工に係る甚だ巧妙なり）せる美麗の幔幕を繞らし、鮮麗なる絨氈は處狹き迄に敷詰められ露國鑞製の寢臺宜しき位置に安排せらる。幕外近く空克斯の清流に枕み、南に昌曼山、北に阿布剌勒山、又遠く天山の雪峰を仰ぎ、恰も青氈を敷けるが如き豐滿なる牧野には無數の白羊、黑牛、赤馬の蠢爾たる或は河岸には哈薩克の氈幕高低相望める、或は其間牧童の駿馬に鞭ち東西に馳驅する有り畫も亦及ばず、宛然一大「パノラマ」の觀あり。之を前日の陋穢なる支那客舍に較ぶれば、天地月鼈の差も啻ならず、以來連日皆是れ快感言ふべからず。

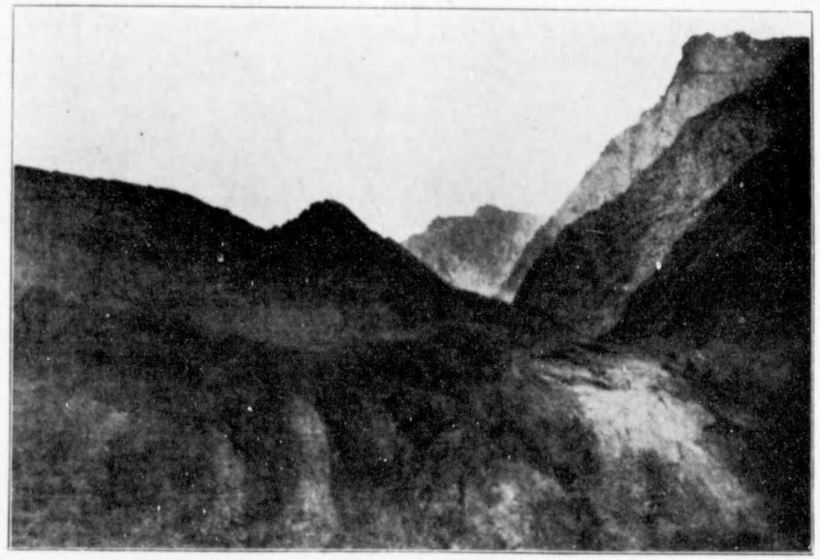
一大「パノラマ」

ニルコスいの大氈幕

是日沿道總て好牧場ならざるは無く、殊に其南方なる昌曼山には、松樹雜木蒼々たるを望む。蓋し伊犂谷間に游牧する哈薩克には、千戸長と稱するもの三十名ありて、一千戸長の管する所少きも三百戸多きは九百戸に及ぶと。予は其の一人擾爾鈎斯孜の大幕を見たり。幕は中徑約五米突の圓形を爲し中央に爐を切り、周圍に氈を布き數個の寢臺を排列し、各寢臺間は、垂帳を以て隔障とし、衣裝を收めたる木箱數個を積み重ね上に馬鞍六七具を置きたり。彼は馬六百、牛三百、羊一千餘頭を所有すと。

天山山脈那喇特嶺の光景　（昌曼河上流より望む）

天山山脈の光景　（昌曼河上流より望む）



天山山脈達哈特嶺（海拔一萬一千尺）の光景（著勒都斯高原より望む）

吐爾屈特汗王幕營の光景（著勒都斯高原の巴彦布拉克）

哈薩克と袂別

得祿榮歸

翌七日、鄂勒克吐拉爾に着、行程約九里。道路概ね平坦、其の空克斯、昌曼の兩河盂は、頗る水草に富む。途中始て雷を聞く。

八日昌曼山の北麓を上下し、阿里曼阿拉里即ち哈魯努爾達坂の北坂端に到る。惠遠城出發以來、日として伊犂河に沿ふて東行せざること無かりしが、今や此に至りて該河を辭し、右折南行昌曼山脈を超越す。坂は上登一里餘、急峻にして纔に騎行すべく、南坂は稍々緩なり。南坂下り盡せば、昌曼河の上流に出で、東は其の水源地那剌特山を天末彷彿の際に望み、南は達哈特達坂を近く咫尺の裡に仰視す。明日よりは、吐爾扈特族の游牧地と爲るに因り雅瑪吐以東親み來れる可憐の哈薩克と訣別せざるべからざれば、記念の爲め一同と共に撮影す。偶々哈薩克鹿を贈る。予爲めに銀一塊（約兩五）を與へて其厚意を謝せり。同行の馬守備曰く『得祿榮歸』大人の前途を祝するに似たりと。蓋し鹿祿音相通ずるに因る。

## 七、天山第二回の超越

九日、數十人の哈薩克に見送られつゝ發程し、暫時にして達哈特達坂の南端に到る。南坂は約三里餘、其の最後十數町の間は、坂路急峻なるも、他は皆騎行し得べし、

達哈特嶺上雪雞を聽く

唯〻碎石の路上に狼籍たる爲めに馬蹄を害ひ易きに注意を要す。北坂は二里弱之を南坂に比ぶれば、一層の緩なるを見るも、礫石累々として騎行容易ならず。

午前十一時、達哈特達坂の頂上に達するや、氣溫三十度を示す、嶺は實に海拔一萬一千餘尺、殘氷尙ほ堅く、左右の崖頂は、千古不消の白雪を粧ひ寒風凛烈骨に沁む。時に頭上野雞の一聲を聞く、聲あるも形を見ず。同行の蒙古人の言に依れば、是れ即ち雪雞にして、其形家雞と異ならず。羽色雪を欺き、常に雪中に棲息すと。

單騎幽探伊水源　千秋雪鎖九霄門
峯頭停馬徐回顧　百里平疇三畝園

吐爾扈特汗王の夏窩子

此地にて出迎の爲め先着せる蒙古官二名に導かれ、南坂を下り盡せば、廣濶なる牧場に出づ、之れを著勒都斯（コルドス）の高原と爲す。此處より右すれば大著勒都斯河左すれば小著勒都斯河の谷地にて大小著勒都斯河谷を分劃する著勒都斯嶺は、萬古の白雪を戴き、近く睫眉の間に聳えたり。是に於て、予は左折して午後零時五十分巴彥布拉克（エンブラク）に達し、吐爾扈特汗王の夏窩子（シヤーウオズ）即ち夏季の幕營地に投ず。此日行程約十一里。



予の巴彥布拉克に着するや公爵台吉以下五、六名直に來り訪へり。十日滯在、現汗王の老福晉に謁せり。蓋し汗王は、當時北京に參覲して不在なりき。

## 八、汗王の老福晉（ラオフーチン）に會見

應接用の氈幕

會見の豫定時午前十時に近づく頃美麗に裝飾せる馬三頭を送り來る。即ち一は予、一は馬守備、他は通譯の乘用にて、導かるゝまゝ其處に赴く。斯て汗王の幕營に近づけば、出迎の人々余等を案内して幕内に入らしむ。應接用の氈幕は、其の中徑約五米突正面に大佛壇を設けて、數箇の佛像を安置し、佛壇は金銀珠玉を以て鏤めたること、我國と異ならず。而して老福晉は華衣（正裝用）を着し、頭に黑色の釜敷樣なる帽を戴き、文武官及喇嘛共に十數名を隨へ徐々幕内に入り來つて左側の椅子に憑るや、其の左右に二名の侍女後方に一名の侍從喇嘛附添ひ自餘は皆幕外に佇立す。是に於て余は一應の挨拶を畢り、右側に設けし三脚の椅子に着き、軈て雜談に移る。

老福晉の驚愕

老福晉は頻りに我國の人情風俗を尋ね。談話中予は彼の佛壇を指さして、我國亦此の如しと說くや、忽ち老福晉は、眼を見張り舌を出し、一見非常に愕けるもの〻

如く、次で侍從と喃々せるは、如何に未開の人種とは云へ、苟も汗王の母たる身を以て斯る奇怪の狀態を縱にせんとは、予も亦啞然たらざるを得ざりし。通譯予の狀を察して曰く、佛を指す、不敬之に過ぎたるは無しとぞ、彼の喃々たるは則ち斯くても佛は日本人を罰する無きやと云ふに在りと。迷信の極佛を指し能はざるは嗤飯の至りに堪へず。

（氈幕の喇嘛廟）

歸途喇嘛廟に案内を請ふ。廟は皆氈幕、其數大小二十餘ありて、幕内何れも佛像を安置し、諸種の供物を捧げ、十數名の僧侶左右に列座し、鼓を打ち鐘を鳴らし、朗々讀經する樣、恰も我寺院と大同小異のみ。

翌十一日大風の爲め此地に滯在す。

## 九、氈幕の携行

伊犂出發以來、或は哈薩克或は蒙古族の歡迎優待を受け、終始其の設備せる氈幕内に宿泊し來りたり。而して本日以東の沿途は、吐爾扈特族の游牧地なるも、目下冬窩子（トンウオヅ）より夏窩子（シヤーウオヅ）に移住する時期なるが故に、沿道宿泊地の近傍に就き氈幕等を徵發すべからず。況んや蒙古族は哈薩克に比すれば一般に貧窶且つ不潔民種なるをや。縱ひ隨處に之を得るとも、到底用に堪えざるに因り、汗王府は特に予一行の爲め、二張の氈幕、三頭の駱駝及十二頭の乘馬、五頭の駄馬を用意し、且つ蒙古大官二名（内一名通譯）蒙古人六名を派遣して、前途の便宜に供せらる。是に於て予が一行は人十五名、乘駄馬二十頭と爲り、數十米突の單縱隊を成し、汗王府諸官に見送られつつ、徐々巴彥布拉克を出發す。『今夜不知何處宿、山川萬里絕人烟』の感あり。

（一行數十米の單縱隊）

小著勒都斯河谷を溯りて東行し、那喇特河畔に到る頃風甚しくして進むべからず。乃ち避難の地を相して那喇特河畔に幕營す。行程僅に五里半。此地は那喇特山道の分岐點に當り、那喇特山は、河の西北に聳え、殘雪斑々たり其の山勢より見るも、達哈特達坂の如き急坂路ならざるを察するに足る。

（那喇特河畔に避風幕營　那喇特河畔）

十三日、汗比阿倫（ハンビアリン）に着す。行程約十里。道路砂礫多きも、概ね平坦、騎行を妨げず。南側には濕地點在往々湖沼を成し、水は鹹味を含む。該水源は北方山麓より出でゝ、皆此に潴溜するなり。蒙古人は其の湧出口を阿拉善（アラシヤン）と稱へ、藥水なりと信じ、病者に服用せしむ。途上屢々例の人畜一連の行列を以て、移轉する蒙古人に遭遇せり。

（阿拉善と藥水）

活佛鄂博

十四日、濕地の間を縫ひつゝ行くこと一里餘、此より石灰岩山の南麓に沿ふが故に、礫石稍々多きも、之を過ぐれは細砂を混ずる草地と爲り、道路は二條に岐る。左せば烏魯木齊に、右せば喀喇沙爾に抵るべし。即ち右して活佛鄂博に出づるや、附近に喇嘛の氈幕多し、此より草地を過ぎ、近く小著勒都斯河の右岸に沿ふて臺地を通過し、一上、一下、夕刻扎克斯臺河の畔に達せり。行程約十里半。

哈布齊汗達坂と哈爾噶頂達坂

## 一〇、縫針の釣魚

十五日霍特爾海に着す。行程約十三里。道路は砂礫又は濕地を交ゆ。此處より喀喇沙爾に往くには、二道の達坂ありて、其北方なるを哈布齊汗達坂と云ひ、坂路稍々緩漫なるも南方なるを哈爾噶頂達坂と稱して、石礫の惡路とす。本日の幕營地、小著勒都斯河の上流に濱し、河水清澄細魚潑剌、一々指點すべく、護衛の一騎士、試に縫針を燒き曲げて釣針に代へ麵粉を捻つて餌と爲し綸を垂るれば、豈料らんや忽ち數十尾を獲たり。魚は其の形、鯊に似て味亦賞すべし。實に近來の美味且つ快事なりとす。蓋し蒙古族は魚類を食せず、其の斯の如きものは、畢竟漁撈の人なき爲めならんか。

乘馬の逸失

翌十六日予は北路を取りて、達坂の南麓哈布齊汗廓爾に幕營す。哈布齊汗達坂は海拔九千九百尺あり其の頂上迄は緩坂の好路にて降坂即ち東坂は傾斜急ならざるも、哈布察河の溪谷を下るが故に兩側は斷崖絕壁を成し、河床を以て道路と爲し礫石狼藉の間を往き、或は右岸に或は左岸に、幾度か溪水を渡渉し騎行容易ならず。河岸は下るに隨ひ、柳樹次第に繁茂せり。地勢斯の如くなるに因りて、降雨若くは融雪の期節等には、河水深くして通過し難し。是に於てか行人は已むを得ず哈爾噶頂達坂の惡路に由る必要を生ず是日の行程約十里半。

十七日、行程約八里の地點に幕宿す。伊犂出發以來、氣溫日々朝、二十四、五度日中四十度以上五十二、三度に過ぎざりしが、是日より俄然暑氣を覺え、寒暖計午前は五十度、午後は七十度を示すに至れり。哈布察河谷は漸く開け楊柳及楡樹連綿として叢生し、狹長の森林を成す。道路は緩且つ廣きも依然礫石多し幕營地を距る約一里なる哈布察河の上流は、哈爾噶頂達坂水の合流點にて、該達坂への道路は、其の河岸を走る。

是夜乘馬一頭逸したり。蒙古官予に告げずして唯々周章狼狽翌朝八方に手を

烏魯木齊への捷路と汗王府

分つて搜索に赴き、留まるは僅に通譯外一名あるのみ。垂馬一頭の逸失は、敢て發程に差支へなきも、搜索に赴きたる人々の歸り來らざりし爲め、更に一日を同地に送るの已むを得ざるに至れり。落日光淡く、暮雲山々を罩むる時、人々歸り來る、悄々たるの狀は、遂に獲る所なかりしを察せしに、果して予の推測に違はざりき。さるにても逸馬何處に行きしや。後に聞けは、彼の馬は其舊棲なる巴爾汗丹溝に還り在れりと。蓋し途上牧草に乏しかりし爲め彼は望鄉の念已み難く、逸し歸りしものならん。

十九日行くこと數町、忽ち北方に走る一谷道あり。博庫丹溝と稱し即ち烏魯木齊への捷路にて、六日の行程、途上峻嶺なく、騎行容易なりと。其の叉路より約三里、右折せる谷地には、松樹多く水草茂り、所謂巴爾汗丹溝の良谷、吐爾扈特汗王府衙門の所在地なりと。哈布察河は此處より、右折南流し水量漸く、多く或は懸りて急湍と爲り、或は滙りて深淵と爲り、尺餘の川魚潑剌し、大理石の白岩、碧流と相映じ、架するに奇橋を以てせり。河岸概ね絶壁、往々全山大理石より成るものを見る。斯る有用の石料も、蠻族游民の間に在りては、一抔の土塊に均し。現に土人は之を燒て石灰と爲すといふ。

天山を過ぎ廣野に臨む

午後一時茲に全く天山々中の狹谷を經過し盡したり。唯見る廣漠、海の如き一原野に臨み、光景一變、暑氣頓に襲ひ來りて、日中蔭蔽の地も八十度を示せり。同三十分沙爾庫里に着し此地に幕宿す。行程十餘里。附近尙ほ一個の家屋をも認むるに至らず。此地喀喇沙爾を距る二日程。

「ウォイナン」

## 一一、纏頭の舞踏

二十日の途上、汗王老衙門處の鄉約宅に休憩す、此地纏頭農夫十五、六戸あり鄉約予一行の爲め急に村內の男女數名を招集し、纏頭の舞踏「ウォイナン」を演じて觀覽せしむ。是より先、護衛の馬守備、予に耳語して曰く「ウォイナン」は固より野鄙の舞踊にして、士君子の觀るを慚つる所なれとも、土俗の風習を察するには、亦一見し置かざるべからざる妙味あり。是より天山南路なる所謂「南八城」の地方には、到る處此の舞踊あるも、若し之が觀覽を申込まば、或は恐くは大人の品位に關せん。此地幸に僻遠の小部落なれは、予爲めに鄉約に說きて之を一覽に供せん、幸に他日の談柄とせられよと、因て遂に之を觀ることゝ爲れり。

男子は蛇皮線を彈ずる者數を打ち且つ唱歌する者ありて、女子は袖を連ねて立て舞ふ其の狀我盆踊に似たり。予は銀若干を賞與して其の厚意を謝し、更に程を進め午後零時二十五分博爾噶色爾に幕營す。行程約十里。但し哈布察河谷を出でしより、眼界一變忽ち戈壁帶と爲りしも、此地方は尙ほ天山に近きが故に、水草樹木相點綴し、從て耕地も亦少からず、農家處々に散見せり。

史を按ずるに、中亞の英傑達迷兒蘭の、天山南北を併呑せし時、大軍を著勒都斯河谷に集合し、觀兵の壯儀を行ひ、祝勝の盛宴を張り、華美豪奢を極めたりと。此地附近、或は當年牙旗を建てし處には非ざるか。

千軍夕渡開都河　萬騎朝屯著嶺阿
古傑英魂長不滅　高原一夜月明多

馬守備に別る

二十一日喀喇沙爾に着し直に焉耆府衙門準備する所の客棧に導かる。二十三日伊犂より同行の馬守備以下歸還す。回顧すれば惠遠城出發以來二十餘日、沿道の宿營を始め、其他萬般の事に斡旋盡力し終始誠實を以て予を警衛扶助し、其間少しも渝ること無く其の勞や洵に多とすべし。予は厚く謝意を表せんと欲せしも、旅次贈るに物なし。乃ち厘に一行の爲め別宴を張り、數點の贈遺聊か予が謝忱を表し、遂に遠く城外に送りて互に別離を惜み、再會を約して袂を分つ。

伊犂、喀喇沙爾間第二回天山の超越は予が這回の旅行中、難關の一に算せしものなり。然るに今や些の故障なく、案外容易に跋涉し得たるものは、一に伊犂將軍の優遇保護ありしに因らずんばあらず。予は玆に記して將軍の厚意を感謝す。

城内の狀況

## 一二、哈喇沙爾

地形

哈喇沙爾は東經八十七度十四分、北緯四十二度十五分に位置し、北京を距ること實に千五百二十九里餘。城は乾隆二十八年の創築に係りて、城壁高さ一丈三尺、周圍約二百五十四米突、東西二門を設け、城内には焉耆府衙門、參將衙門、電報局等あり。

人家約五百戸、内商店大小合せて百餘戸、漢回其の大部を占め、主として吐爾扈特人を華客とす。地形は南部に砂漠磽确の地多きも、西北部は開都河に瀕して、灌漑の便ある爲め、土地豐饒、耕耘に適す。然れども土民一般に懶惰、農を嫌ひ、貧民鼠賊殊に多し。東南は博斯騰淖爾を控へ、西北は著勒都斯山環繞、廣濶なる高原を形り、大小著勒都斯山は、此の高原を灌漑しつゝ相合ふて開都河と爲り、直に博斯騰淖爾

沿革

に朝す。故に草肥え水甘く、從て野牲に富む。是を著勒都斯谷間と稱し、吐爾扈特族の游牧場たり。

此の地漢の焉耆國とす、王莽の建國中（紀元十年代）叛いて都護但欽を殺す。天鳳二年（紀元十五年）五威將王駿、兵を率ゐて西域に出づ、焉耆詐り降りて駿を殺す。校尉郭欽後れて至り其の老弱を屠る。明帝の永平十六年（七十三年）復た都護を置く。同十八年焉耆王、舜及び子忠、漢の喪に乘じ、都護陳睦を殺し、尉犂、危須と共に漢を拒む。和帝の永元六年（九十六年）都護班超既に西域を定め、龜茲、鄯善等八國の兵を發して之を討ち、焉耆王廣、並に尉犂王汎を斬り、焉耆の左候元孟を立てゝ王と爲す。尉犂、危須、山國亦皆更めて王を立つ。安帝の時（百十年代）西域再び叛く、延光二年（百二十二年）班勇討て諸國を定む。唯だ元孟、尉犂、危須と降らず。順帝の永建二年（百二十七年）班勇進んで其境に至るや、元孟遂に其子を遣して入貢せしめ。

北魏の太武太平眞君七年（三百八十七年）焉耆王龍尸鳩卑、險を恃んで魏の使を殺す。萬度歸に詔して之を討たしむ。度歸焉耆の界に入り、進んで員渠に向ふ。尸卑鳩の軍潰えて山中に走る。是に於て諸戎皆降り、尸卑鳩遂に龜茲に投ず。周の保定四年（五百六十六年）其王名馬を獻じ、隋の煬帝大業中（六百年代）王龍突騎支、來貢す唐の太宗貞觀六年（六百三十二年）突騎支使を遣して來朝し、磧道を開かんことを請ひ、高昌爲めに怒つて其の邊を侵す。十四年候君集高昌を討て、掠地を焉耆に還さしむ。後、焉耆、西突厥と婚し、復た來貢せず。

同年安西都護郭孝恪之を討て突騎支を執へ、其弟栗婆準をして國事を攝せしむ。從兄薛婆阿那支自立し、栗婆準を執へて、龜茲に獻ず。突厥の阿史那社爾、龜茲を討つや、阿那支奔て王師に抗す。社爾、阿那支を擒にし、突騎支の別弟、婆伽利を立てゝ王と爲せり。高宗の上元二年（六百七十五年）此地を以て焉耆都督府とせらる。既にして婆伽利死し、國人突騎支を還さんことを請ふ。高宗之を許容し、歸國の後幾許ならずして死す。子愼突立ち、竟に回鶻に併さる。降て宋代には則ち西州回鶻の地、明代（千五百年代）には準噶爾の占據地たり。

交通路

交通路は、別に省會烏魯木齊に通ずる山道の外、西は喀什噶爾、東は哈密、南は羅布淖爾を經て、西藏に達する駝路あり。氣候は冬季稍〻温暖、夏季暑熱甚しきも、亦吐魯番の如くならず、三、四月東北風、六、七月南風多く且つ熱するも其餘の南風は頗る

喀喇沙爾馬

冷なりと云ふ。惟ふに東南一大湖を有する爲めならんか。有名なる喀喇沙爾馬は吐爾扈特族の牧養する所にして、內地の騎用を充足し、外、露國に輸出するもの、年々少なからずと云へり。

轎車の賃銀

## 第七節　喀喇沙爾より庫車に向ふ

### 一、戈壁帶の一仙境

喀喇沙爾、阿克蘇間は約二百十餘里ありて、通常十八日行程とす。此間二臺の轎車、計銀四十六兩の定めを以て雇入し、予は概ね伊犂副都統所贈の駿馬に跨り、行李は別に轎車に積みて、從僕二名を伴ふ。道路は喀喇沙爾、庫爾勒間は西南、其れより正西に進む。

開都河の絶景

六月二十六日喀喇沙爾を發す。聞知府、熊參將、其他文武官及天津商寶聚成主人戴等遠く送り來りて、開都河渡船場畔に分袂し、此より馬を驅て四十里井、紫泥泉子を經、哈爾阿滿溝に達する頃、日は早や西に春けるも、宿るべき家なし。此地は街道一の要衝に當りて、且つ絶景の地と稱せらる。宜なり開都河は天山最後の支脈たる哈爾阿滿山を貫流し、奔流急湍、紆餘曲折の間兩岸奇峯相聳え、絶壁削るが如く其脚下には樹木鬱蒼たり實に戈壁帶の一仙境とす。薄暮朦朧の裡、勝を探り要を尋ね、軈て狹谷を通過し畢れば行程約十七里、庫爾勒に到達し、廖守備等の出迎を受け、纏頭大阿渾（回教僧）の別莊に投宿す。

庫爾勒は羅布淖爾への順路

暑嚴しく蚊虻多し

是日幸に曇天、加之微風の青衫を拂ふ有りて、斯は長途を通過し得たり。道路は紫泥泉（人家七戶）に至る間は草地を走る細沙道にして哈爾阿滿溝までは砂礫道なり其れより變して峽谷の隘路と爲る。庫爾勒は纏頭回民多く、戶數約二千、開都河市街を貫流し、附近を灌漑するが故に楊柳果木生ひ茂り、水田、火田亦少からず、繁華の一市街を成せり。此地は羅布淖爾に通ずる順路の分岐點にして該路は辛ふじて車輛を通ずと云ふ。

### 二、再び夜行の開始

二十七日滯在し、翌日出發す、前途は再び沙漠の地と爲りて、暑氣酷しく蚊虻多し爲めに日中の騎行は更なり乘車も亦堪ふべからず。因て普通旅客の例に倣ひ、午前十時より午後五時迄を休憩時とし其前後を進行時とせり。

二十八日午前五時半出發西に向ふ、道は上戸地に至つて愈〻沙漠地帶を現じ、此處に休憩午後五時再發す、約三里の處に、新設中の驛傳兼官店あり、次で五里を進みて大石頭に一空房を存し又五里にして纏頭の一軒家及井あるのみにして此外沿途飲料水の求むべきもの無し。翌二十九日行程總計約二十里、車爾楚に着す。此處は人家十六戸、附近に梧桐の疎林點在せり。

白色の鹹土一樹なし

三十日、野雲溝（又伊什鴉と稱し人家二十戸）を過ぎ行程約十一里車的爾に着す。車的爾沙島は人家合計百六十戸、悉く纏頭のみにて他種族を交へず。氣候は結氷十月、解氷二月三月に及んで種子を下し、九月收穫す、雨期は六月三四回、十、十一月に至れば西風强く、且つ降雪期なるも、降雨と同じく二三回に過ぎずして、量三四寸を越ゆること無しと。

明れば七月一日、行程約八里洋薩爾に着す。途上梧桐の疎林處々に散在し、土地濕潤鹹氣を帶び、飲水皆濁れり。洋薩爾沙島は人家約二百あり。二日西南に進む一里餘、此間田家左右に點在し、從て耕地多く、夫より數町間は灌木帶を成し、次で一望只〻短小の蘆葦叢生するもの一里餘、遂に白色の鹹土と爲りて、一樹なく一草生せず、滿目蕭條たり。翌三日午前零五分、行程約十里にして布古爾に達す。布古爾は人家百十五戸を有し附近田家を合せて千二百五十戸あり、光緒二十九年、輪臺縣を新設して其の衙門を此地に置き、縣內約四千戸を管すと云ふ。

輪臺と漢朝

## 三、班超の古蹟と土橋の險

布古爾即ち輪臺は漢朝の古蹟にして、班超が三十六王を引見せしは實に此地なりとす。往事茫々求むるに由なく、唯〻九龍樹の故地と其名を遺すのみ。知縣來訪して切に一日の滯在を勸むるも。予は其厚意を謝し、午後五時出發、馬に鞭ちて急行し窮巴呵に到る。蓋し沿途路側に人家散在し、耕地、樹木、川渠多く且つ有名なる土橋の險要あるに因り日沒前に出來得る限り地形を觀んと欲したる故なり。

大羅巴は溜水池の意

之を過れば愈〻無一物の沙漠帶とす。四日阿爾巴臺を經て、沙堆亂疊の邊を過ぎ行程計約二十里大羅巴に入る。此地溜水池ある爲め漢人斯くは名づくと。人家僅に八戸、土民は此處を楚里阿巴特と稱ふ。五日托和奈、即ち雅克阿（行程約七里）に六日庫車に着す（行程約我十里）。

要するに本道は、天山支脈に近きが故に細流此處彼處に多きも、冬期は水無く、夏

哈爾阿滿山の要險

期と雖も皆徒渉し得べし。獨り哈爾阿滿山の狹谷は、兩側絶壁開都河の急流之を貫流し道路は纔に其の右岸に沿ふて設けらるゝが故に、路外寸歩を跋渉攀登すべからず。往時は谷の兩口に土城を築き、此要險を扼守したりと云ふ。又布古爾の西約二里餘の處に、本道を横斷する沼澤地あり幅平均千米突、兩岸より長堤を築き其中央に小橋を架す。他に經過の路なければ、勢ひ該橋に由らざるべからず、世人呼んで布古爾の咽喉と曰ふ。漢時の所謂土橋の險即ち是なり。

土橋の險

## 四、庫車

城内の景況

庫車（クチヤ）は東經八十二度五十七分、北緯四十一度三十七分に位置し、城は輦平（コンビン）と名づく、柳條を以て築成すと云ふ。高阜基を成し、周圍約二十三四町高壁重圍、最も堅固と稱せらる。城内には庫車直隷州、遊擊營電信局等あり。城の内外人家合せて約一萬、商業繁華の一都會とす。予の當地に入るや、官憲の待遇甚だ勉め、殊に此地在住印度商の取締人某の途中に來り迎へたるを多とす。

地形と氣候

地形は渭干河其の西南部を貫流し河岸一帶、土地肥沃、耕作に適す。北部は天山の支脈盤結し、亂嶂重疊、最も鑛物に富み、銅、硝石、硫黄、礦砂の類多しと。氣候は略ゝ各地と同じく、唯ゝ降雨稀に、一年一二次、或は終歳なきこと有り。夏期は炎熱強く蚊虻殊に甚し。

大佛洞の佛畫

此地漢唐時代の遺趾多し。其の城東なる頽城の一段は、長さ里許、材料堅實雉堞高厚、依然として存し、今尚ほ當時を忍ばしむ。相傳ふ漢代屯兵の處なりと。又聞く城西に大佛洞（ダイブツトン）あり。山の上下、前後、洞を穿つもの四五百、内皆五彩金粉を施したる佛像を圖畫す。就中其の最高の一洞は、三壁に白衣の大師を刻み、壁上楷字にて輪廻經一部を鐫せり。筆力雄勁、彫法巧妙崇高神に迫る。蓋し唐人の手に成りしや疑ひ無し。尚ほ城北、丁谷山の古刹には、現に唐代の碑を存すと云ふ。予の旅行中、二名の佛人、數十名の土民を役し、北方山中に、古物の發掘採集に從事せる由を聞けり。

佛人の古蹟發掘

沿革

史を按ずるに、此地は漢の龜茲國たり。武帝の末年、王、扞彌、其子賴丹をして入朝せしむ。帝賴丹を輪臺（今の布古爾の地）に田せしが、龜茲の人、姑翼之を殺す。宣帝の本始二年（紀元前十二年）常惠其の罪を責むるや、龜茲、姑翼を執へて謝し來る。時に烏孫（今の伊犂の地）公主の漢に在る者を、龜茲王絳賓に賜ふ。元康元年（紀元前十五年）王、公主と共に來

朝せり。建武二十二年（四十六年）莎車（今の葉爾羌）王、龜茲王を攻殺し、其子則羅を龜茲王とす。後、莎車王、龜茲を分つて烏壘國を置き、駰鞬を其王とせり。斯くて數歲國人、則羅及駰鞬を殺して、王を匈奴に請ひ、龜茲の人、身毒なるものを王とし、是より龜茲、匈奴に屬す。永平六年（六十三年）龜茲王建、疏勒王成を殺し、其の左候兜題を立てゝ王と爲す。漢爲めに班超を西域に遣す。超乃ち兜題を執へ、成の兄子忠を立つ。章帝の建初五年（八十一年）莎車、攻めて龜茲を降す。六年超、莎車を討ち、龜茲王尤多利を廢し、白霸を立てゝ王と爲せり。蓋し白氏の龜茲に王たる此に始まる。

魏の文帝黃初元年（紀元二百二十四年）來貢し晉の武帝太康中（紀元二百八十年代）子をして入侍せしむ。惠帝の朝（二百九十年代）王白山、焉耆王龍會に滅さる。國人羅雲、龍會を殺して自立す。東晉の孝武太元七年（三百八十二年）呂光、龜茲を伐つや、王白純迎へ戰ふ。光擊て之を平げ、純の弟震を立てゝ王と爲す。北魏の太平眞君九年（四百四十八年）萬慶歸龜茲を討つ。梁の武帝普通二年（五百二十一年）王尼瑞摩珠那勝、入貢、周の武帝保定元年（五百六十一年）又入貢、隋の煬帝大業中（六百年代）王白蘇尼咥來貢、唐の高祖（六百二十年代）の世、王白蘇伐勃駃來朝し、會々病に罹りて死去す、子蘇伐疊、王位を襲ぐ、時に西突厥射匱可、汗を龜茲の北方三彌山に建つるに會し、蘇伐疊往て突厥に屬す。太宗の貞觀四年（六百三十年）馬を献ず。郭孝恪の焉耆を討つや、王兵を發して焉耆を援ひ、後遂に貢せず。蘇伐疊死し、弟阿黎布失畢立つ。帝龜茲の焉耆を助くるを怒り、阿史那社爾に命じて討伐せしむ。社爾兵を五道に分ち、先づ焉耆王阿那支を擒にす。龜茲各城皆潰ゆ。社爾進んで王城を拔き、郭孝恪を留めて居守せしむ。王、保撥換城に投ず。社爾又討て遂に王及其弟羯獵顛を捕ふ。王の相、那利、夜逃れて西突厥の兵を借り來り、唐兵を攻む。孝恪之に死す。郎中崖、義兵を募て、那利を捕へ、社爾假に王弟葉護を立つ。高宗の永徽初年（六百五十年代）阿黎布矢畢を龜茲王に封じ、那利、羯獵顛を放還す。後、王來朝す、其歸るに及び、羯蠟顛拒んで納れず、王爲めに憂死せり。揚胃兵を發して直に羯蠟顛を獲其地に龜茲都督府を置き、王子素稽を立て、都督に拜す。顯慶三年（六百五十八年）安西都護府を龜茲に移し、于闐（今の和闐）碎葉（今の喇沙爾）疏勒を統べ之を安西の四鎭と稱す。故に龜茲をば又安西と呼べり。元代には苦先と云ふ。

沙雅爾城

沙雅（サヤル）爾城は、南東二日行程に在る一小都會にして、沙雅縣衙門の所在地とす。人家約七百、土地卑濕、菓爪善く實り、梨最も名あり、四邊葦澤に充ち、虎、狐、狸、猞猁、猻の巢

窟たり。更に其の西南馬行八日程、和闐に到るべきも、沙漠中所々沮洳たる草澤地あるが故に、行路頗る困難とす。嘗て準噶(ジユンカル)爾汗、策妄那布坦(ツワンナフタン)此路より西藏を犯さんとし、沙雅爾の土民を嚮導と爲し、前進未だ幾許ならざるに、殆んど全兵の半を覆沒せり。因て路を更め、阿克蘇より和闐に出で、西藏に浸入せりと云ふ。

## 第八節　庫車より阿克蘇に到る

### 一、烏壘の碑

鹽水溝の水

沙土蘭達坂

七月九日午前六時三十五分、庫車を發す。北行約三里弱、石灰質の軟岩、風雨の爲めに浸蝕を受け、千態萬狀の奇觀を呈する河谷を進み、又行く八里にして鹽水溝(エンスイコウ)(或は托和且(トホシヤ))に到る、此地驛傳及官店の存在する外、復た一個の人家なく、水あるも苦鹹飲むべからず。已むを得ず再び此を發し二里餘にして沙土蘭達坂(シヤドラン)に到る頃、日漸く沒す。此地は庫車、拜城の境界點にて、單に一空房と一官店とを見るのみ。已むを得ず又前進を繼續す。是より道路は西方に轉じ、夜行十里餘、十日午前一時五十分、河色爾に着す。途次、沙土蘭達坂以西は沙磧を走る緩徐の降坂路を成し以南は

道路の變遷

凹道を以て一車厘に通ずべく、出水時の困難實に察するに足る。聞く往昔庫車より河色爾へは、千佛洞を經る捷路ありしも、河道の變遷を以て渭干河畔遂に水澤地と爲りしに因り、康熙年間、楊玉春なる人の設計を以て、此の迂回路を開きたりと。

漢代の西域都護府

河色爾は其の附近を合せて人家百餘戸あり。

河色爾河の谷地に漢代西域の都護府たる烏壘城ありしものゝ如し。杜氏通典に云ふ『漢宣帝時(紀元前六十年代)匈奴益弱、不得近西域、於是徙屯田於北胥鞬披莎車之地、屯田校尉始屬都護、都護督察烏孫康居諸外國、都護理烏壘城、去陽關二千七百四十里、與渠黎田官相近、土地肥饒、於西域爲中、故理焉。』と然れども果して何の地たるやを明記するものなし。偶〻予の阿克蘇を過るや、該地の道臺潘震氏より烏壘關城の碑文搨本數葉と說明書一通を贈らる。是に於て記錄に照らし地圖を按し、始めて烏壘城の所在は河色爾河の谷地たることを確め得たり。潘道臺贈る所の文書左の如し(文中の里數は清里とす)

烏壘碑文の考證

劉平國碑字

龜茲左將軍劉平國以七月丙戌□發、家徒、秦人孟伯山、狄虎賁趙當、□卑强阿□等

六人共來、作□谷關。八月十一日始斲山石作孔、至堅固萬歲。人民喜長壽億年宜子孫。永壽四年八月甲戌朔十二日乙酉、直建紀之。東烏壘城口留將軍所作也　（大碑字）□は文字磨滅の處以下同し

京兆長安、滈于伯□作此誦　（小碑字）

拜城縣治東北二百餘里、曰明布拉可莊。漢時都護建牙於此、即烏壘關地。又東北五十餘里、至噶子克勒克山、入山谷五里許、磨崖有文、曰、龜茲左將軍云々。距地六尺。茲碑之左、又有文、京兆云々、距地尺許。光緒五年夏有軍人過其地、見石壁露殘字、以告張朗齊節帥、命王總兵得魁、具氈椎裹糧拓之、此碑始傳。惜土人斧之、後拓者、字多缺焉。

永壽四年は東漢桓帝の時にして、是年延熹と改稱せり。即ち西暦百五十八年に當り、今（明治四十一年）を距る實に千七百五十年前の遺物たり。記して歷史家及考古家の參考に資す。

拜城の銅鑛

十日午後三時十二分發、河色爾河（訶干河の上流と稱す）を渡りて、六時三十五分行程五里餘、賽里木（又薩拉木）に達す。此間半は沙磧半は草地往々濕地を交ゆ。人家は附近を合せて九百戸あり。河色爾河は平時水淺くして容易に徒渉し得べきも、出水時は二、三日に亘りて行通を遮斷すと。

十一日行程約十里、拜城（バイチョン）に達す。全路殆んど蔭蔽地とす、路北は間〻半沙漠の狀態を爲す處あるも、概ね耕地にして、白楊柳梧桐等多く、道路に並木あるも、塵埃歩に隨ふて起り、濛々漠々、黃雲に駕するの感あり。拜城附近には銅鑛三箇所ありて、往年は政府の所管に係り、每年十二萬斤を出せしも、今は纏頭の保管する所と爲り、工夫僅に百五十六人、出額年一萬斤內外に過ぎずと。

拜城の市街は天山支脈より發する河流の谷地に位置し高き臺地上に建て連り海拔實に三千有餘尺あり、夏期も炎熱甚しからず、人家一千餘戸を有し內商店は大小約五十戸あり、拜城縣衙門（縣の管轄總人口三萬九千七百五十人）大糧倉ありて、馬隊一哨屯在す。市外には田家四千餘あり。城東を流るゝ「エッゲン」河（或は銅廠河）は水多からずと雖も、年中絕ゆること無し。當地在住の回部公爵は年俸二百兩、外に

回部公爵も年俸

上覲の際は別に路費二百二十兩を受く。此地より天山麓に四日程、南山へは約四里餘とす、天山麓には松樹多く、木炭及鐵を產すと。予は此地に滯在すること一日十三日午後六時二十五分を以て發し翌日午前一時三十分前日と略〻同一の行程を以て、庫什塘(或は大黑米子)に着す。

道路は初め約三里間は河川多く、次で四里餘は沙磧地にて唯其の中央に一小部落あるのみ。其れより、以西は耕地相續ぎて庫什塘に接す。此地の人家は、附近を合せて約百戶。

## 二、地方の奇病

伊犂出發以來、各地氣候の變化甚し。是に於てか其の流行する所の病症も自ら異れるに似たり。伊犂附近は胃病及一種の熱病(大貝子)ありて六、七月頃より流行し初めは腰痛みて起つ能はざれど九月頃に至れば自然に平癒すと。喀喇沙爾地方は小兒に咽喉病及痲疹夥し。是等は畢竟其地の氣候に原因するならん。然れども獨り拜城地方に至りては、咽喉下に袋狀の大瘤ある男女を見ること多し、葉爾羌地方殊に多きを加ふと。清人は之を臙袋子と稱し、土人は「ポーハッカ」と名づく。

臙袋子

木蘇爾河の騎渡

滴水崖の沙磧

喀喇玉爾棍は昔の姑墨國

其の原因を飲水不良の結果に歸せるが果して如何にや。

十四日發、行程三里弱にして木蘇爾河、一名「コムザット」(氷河の意)の畔に達す。河幅約二千米突、水流數條に分れ、幅計約千米突あり、深さ馬腹に及び、混濁せる急流にして案內者なくんば通過し難し。薄暮同河を越え次で察爾齊、一名雅克阿雷克(人家約七十戶)に入り、休憩暫時の後此を發し、塔齊霍羅斯達坂に向ふ。東坂は頗る緩なるも西坂には稍、急なるに因り叱咤、一鞭を加へ、翌十五日午前七時過行程約十里、車爾憂(一名滴水)に着す。木蘇爾河より道路は西南方に走り、全程沙磧にして間々沙丘脈の道路を橫斷する有り。其他何物も目に映ずる無し。是れ即ち有名なる滴水崖の沙磧なり。就眠勞を醫し午後二時出發、行くこと約二里、鄂爾的霍喇達坂を經、此より三里にして、鹽水溝(或は特克喇克店)の谷地を進み、復た三里を進みて開濶地に出で、夜行數里、行程十二里餘を以て喀喇玉爾棍に達したるは夜半十二時とす。

喀喇玉爾棍は、人家其附近合せて約四十戶あり古の姑墨國の地なり、此處に至る間車爾憂の東南方即ち鄂爾的霍喇達坂の東一連の沙崗中及特克拉克店一帶の沙崗山中に銅鑛ありと云ふ。一般沙磧帶なるが故に沿道飲料水は、特克拉克店に於

て僅少の量を得たるのみ。

漢城

十六日行程約七里夜半一時、札木臺に着す。此地は人家其附近を合せて約百五十戸を有す。喀喇玉爾棍以西は、大半沙丘帶にして、道路屈折、灌木叢生、間々梧桐を交ゆ。此間細流多し溝渠を通ぜば、蓋し多大の耕地を得ん。又阿克蘇より木蘇爾達坂を超え、伊犂に通ずる道路は札木臺より分岐せり。

十七日行くこと約五里餘にして伊什連池に又行く二里餘にしてターズランゲに到る。此地は西南に進めば阿克蘇の回城、正南に進めば其の漢城に達する分岐點とす。予は乃ち正南路を取り、コイチ(或は二十里堡)を過ぎて、行程約十二里、漢城の北端に着せり。

## 三、阿克蘇

阿克蘇は東經七十九度十四分、北緯四十一度九分に位置し、省會に至る四百十里北京を距ること實に千七百四十四里とす。阿克蘇(回語、阿克は白、蘇は水の意)は天山南路中有名なる都會にして、漢、回二城に分れ、其の漢城には、阿克蘇道臺、阿克蘇鎮臺、温宿府の各衙門及電信局等あり。此地、南路の中樞に位し、商賈四方より聚り、牛、羊、駝、馬、到る處に群り市街甚だ熱鬧す。露商、印度商の往來する者亦多く、皆廣大なる旅店に寓しつゝ、平日は卸賣を營み、八雜兒即ち市日には、露店を張ること、南路各城皆同一樣に出づ。

回城

回城には温宿縣衙門あり回部貝勒亦之に住す。城の北東二面は數丈の斷崖を成し、市街は崖下に在りて甘泉湧出す。(阿克蘇の名の起る所以)人家約六千、内露商(安集延の回教徒)二十八戸、印度商十戸ありと云ふ。又漢城は回城の南約二里、斷崖の南端に位置して人家約八千と稱せらる。崖上は總て臺地をなし、荒漠不毛の沙磧地なるも、崖下は卑濕にして地味肥え、河川溝渠相錯り、耕地水田相連りて、楊柳繁茂し、省内最良の米産地たり。阿克蘇河は市街の西南約十六吉米の處を南流す。

人口

聞く温宿府城關及東、西、南、北の四鄉合せて人口十萬零八百四十二人、内漢商六十五戸、纏頭商八十八戸、漢回商二十九戸。又温宿縣城關並に四鄉總計八萬五千四百七十二人と云ふ。

氣候と物産

氣候は概ね南路の各部と同じきも、雨雪少なく、年中皆無のこと有り。風は西風を黑風、北風を黄風と稱へ、吹く時期一定せず。主産物は米、綿布、毛氈、羊毛等にして

風土病は瘧咽喉病等夏期に多し。

伊犂への別路

當地より伊犂に通ずる山道は、即ち東方一日程にある、札木臺を分岐點とするものにして、既に詳記せし如く、天山の氷嶺、海拔一萬八千尺を過り、氷巖累々たる大氷河の横はる有り。一歩を過たば、人馬共に萬尋の深谷に陷り復た救ふに由なし。之を難路と謂ふも未だ盡さず、險路と謂ふも尚ほ盡ざる有るを覺ゆ。

湯鎮臺の優遇

予の當地に入るや、懇切なる諸官憲の待遇を受けたり。殊に鎮臺湯詠山氏は道臺潘震、知府方鎏以下、知縣、遊擊、電報局長等を會し、予の爲めに盛宴を張り、射擊の餘興等を催し、主客胸襟を開いて歡を罄くせり。回城視察の際、予は知縣と共に、回部王の別墅に憩ひ、王と會見せり。

回部王と俸祿

回部王實は貝勒なるも、郡王啣を有す。知縣の言に依れば王の俸祿は、一年銀八百兩、倉糧小麥一百二十八石なりと。

此地、漢に在りては温宿國、唐代は跋祿迦國、元代は阿克蘇或は阿速と稱せり。

附　烏什

烏什は東經七十七度五十二分、北緯四十一度十分、省會を距る四百四十五里に在り。此の地又烏什吐魯番と稱し、舊と回會の居城にして、南路中繁盛の地、人家一萬有餘戸を有したりしも、回會賴黑木圖拉の叛亂するや、盡く清兵の誅鋤するを所と爲り、或は逃亡四散して、一時荒壞冷寥の地たらんとせしが、清政府頻りに南路各地よりの移民に勉め、現今復た一千餘戸を有する一都會と爲れり。城内に烏什直隷廳、協臺衙門あり。城は乾隆三十一年の新築に係り、城壁高さ一丈七尺底厚一丈二尺、頂厚七尺、周圍四百六十餘米突、之を永寧城と名づけて四門を設く。城北は沼澤低地多く、南は山脈亂疊し、其の山脈の西端は、即ち城壁の西部とし、東端は直に阿克蘇街道に出づ。

地勢は山ならざれば沼澤、蘆葦茂生するを以て、游牧地多く、開墾地少なし。故に往々穀物の缺乏を訴ふること有り。附近吉爾吉思人の游牧するもの夥し。市日には土民の穀類を齎して、游牧民の家畜と交換するの狀況頗る奇なりとす。商店には主に露國製の下等更紗、羅紗其の他家具類を販賣し、而も露國品は、之を喀什噶爾地方に比せば、却て廉價なりと云ふ。氣候は南路各地と同じきも、夏季の炎暑劇烈ならずと。

此地漢に在りては尉頭國、元に於ては倭赤と稱す。回人は自ら呼んで吐爾番

と曰ふ。蓋し吐爾番は回語都會の意。因て又烏什吐爾番とも曰ふ。

## 第九節　阿克蘇より喀什噶爾に到る

**一、** 地方官飲料水を贈る

七月二十四日阿克蘇を發す、道は南方を指して行くこと約二里、阿克蘇河に達す。河水散漫處々深水を湛え騎渡すべからず。因て左岸を下ること五里餘、ベシテメ（人家三百餘戸）に到りて渡船に投ず（渡河約七分時なる要す）此より其の左岸を下る一小路を連續南下せば十八日程を要し和闐に達するも、沼澤地多きが故に冬季の外は過ぐべからずと。渡河の後、右岸に沿ふて溯るもの三里弱茲に本道と相合し、ベシオスタン渾巴什を經て更に西南に向ひ、翌二十五日午前五時行程約十二里にして艾庫里に着す。

阿克蘇河と迂回

二十五日午後四時四十分出發、薩依里克、皇墾を經て喬里呼圖克に着す、薩依里克は人家附近合て二百五十戸あるも皇墾は僅に四五戸あるに過ぎず。此處を過ぐれば全く沙磧地となる。翌二十六日九里餘の間、只二家に接するのみ。午後十一時頃行程約十一里、齊蘭臺に到る。此地は人家合して約五十戸を有し、飲料は溜水を用ゆれども苦鹹且つ不潔にして飲むべからず。地勢は一般に沙丘帶なるを以て、風あれば塵埃飛颺して面を向けん樣もなし。齊蘭臺より西南に分岐し、柯平に通ずる大小の二道路あり。

二十七日午後二時過、新街道を進む。舊道は濕地多く、現今通行者稀なり。黃草湖（一名マイチ）に於て新舊兩道相合す。行程十四里餘を以て十一臺即ち雅喀庫都克に到る。此處は好良なる河水を飲料に用ゆ。地形は初め一里餘は濕地、以後は沙地にして虻多く乘馬、挽馬其害を受くるのみならず、時に來つて人を襲ふこと有り。

虻の害

翌二十八日、日中氣溫九十度に上る、午後四時發、十臺一名車的爾庫里（車的爾は帳房庫里は池の意と）ピチャクスット（稻地の意人家百二十戸）を過ぎ、夫より梧桐樹林帶を迂りて行程約十三里、九臺（或は圖木舒克）に入る。聞く此地雨雪降ること甚だ稀にして、近年一滴の雨、一片の雪なしと。

二十九日午後三時三十分出發し、西行約七里、小山の中間を過ぎ、左折してヲコマ

ゼルンに到れば、是れより道路は新舊の二條に岐る。予は其の新道を取りて、行程約十里、八臺一名察爾巴格(チャルワク)に到る。人家約百二十戸を有し、一週一回の市を設くと。

明れば三十日行程九里餘喀什噶爾河を渡りて瑪喇巴什(マラバシ)(戈壁帶の意)に着す。蓋し阿克蘇出發以來、同河を越ゆるもの二回、即ち初度は八臺(パイタイ)の東方に於て、再度今此に瑪喇巴什の西方に於てせり、而して今後尚ほ龍口に於て、復た喀什噶爾漢城と回城の間に於て渡河せざるべからず。河幅は何れも十乃至十五米突、共に堅固なる木橋を架せり。喀什噶爾河の斯く中流に於て幅員の小なるは沿岸渠を鑿ちて引水灌漑するに因る。途上田家多く、瑪喇巴什は人家約三百、巴楚州(パチュチョウ)衙門遊擊營ありて、步隊一營實員百十人を置けり。産物は野麻繩、羊毛、毛氈、羽扇、黃油、鹿角及米其他牛、羊、虎皮等にして、其の內虎皮は近年最も尠しと云ふ。

南風野を枯らす

瑪喇巴什は、四邊沙磧にして山嶽に遠かれるに因り冬季は北風、夏季は東風多く、南及西方の風を送ること稀なるが、夏季一たび南風を吹き起さんか、天地蒸々宛も釜中に在るが如く流汗淋漓人をして殆んど堪へざらしめ、爲めに菜蔬の類は見る見る黃色を呈し、忽ち枯死して、野に生色なしと云ふ。如何に其の炎熱の酷烈なるかを知るに足る。又降雪は極めて少きも、北風强きを以て、寒氣從つて烈しく、且つ氣溫稍〻整へば、蠅蚊の類の跋扈する有りて其煩なる名狀し難しと云ふ、豈不幸の地と謂はざるべけんや。不幸は尙ほ之に止まらず、其の飲用水は遠く喀喇噶爾河の河水を溝渠に依て導きたれば、寒冷の際は兎に角、夏期に在りては、水恰も溫湯と化し、塵埃之に混して、到底飲むべくもあらず。然れども之を措きては他に求むべき無きが故に土民は平然飲み且つ用ゆ。予の此地に入るや官憲先づ贈るに水を以てす。蓋し喀什噶爾河の上流、此を距る十餘里の處より運び來りしものと。其の一滴も實に千金の價ありと謂ふべし。

一滴の水も千金の價

瑪喇巴什より葉爾羌河に沿ひ葉爾羌に通ずる大道あり、七日乃至八日行程約八十里とす。

葉爾羌への岐路

## 二　大渠の龍口を過ぐ

三十一日滯在八月一日發タラショーに小憩し行程九里餘屈爾(チュルカイ)蓋に到る。此間前半路は良好なるが、後半路は灰塵甚しく、且つ一般に晝間虻蠅夥し。卡拉克沁(カラクチン)へは其東里餘の處より、南に迂回する小路ありて、水多きも車輛通ぜず。大路は之よ

り遠きこと一里餘と。翌二日東(トンガン)十瑪雜兒(マザール)を經て行程十二里玉代里克(ユイチリック)に投ず。人家は附近を合せて八十戸、一週に一回市を設くと。路上塵灰甚しく、飲料は溜水に依るが故に頗る不良なり、東干瑪雜兒を西に距る一里餘の地點は巴楚州伽師縣の境界點とす。

龍口橋

三日、雅素里克(ヤスリク)を經て行程約八里、龍口橋(ルンコウチャオ)に着す。此地は喀什噶爾河より瑪喇巴什方向に通ずる大渠の水口なるが故に、龍口の名を得たり。是日經過せし處、雅素里克迄は道路の南側溜水多く爲めに迂回するもの數次、龍口橋までは、灌木帶にして、少許の矮樹相生じ、處々沙丘ありて塵埃甚し。四日乘馬恙ありし爲め滯在し、五日英瓦特(ヤンワット)(人家附近合せて三百戸)を過ぎて行程十二里餘、牌素巴特(パイスパト)に到る。同地は人家二百戸、棉花、棉布、毛氈、牛、羊、其の他果物を產し、果物中林檎最も佳なり。光緒二十九年十月此地に伽師縣(チヤーシレエン)を設く。予は知縣の準備せる當地經頭鄕約の別莊に宿し、翌六日滯在したり。

乘馬病む

牌素巴特

七日、南行沙布特爾(サブトル)(人家附近總計一千餘戸)を經てカザンクルに到る。人家其附近を合せて四百四十戸あり、此地は南方五里餘を距てゝ人家約三萬戸を有する一大村落コズルブイの總鄕約管轄の地なり。予はカザンクルの接館に休憩し、又行く五里にして雅瑪雅爾(ヤマヤル)に入る。是日行程約十里とす、此地人家總計八百戸、市場の設あり。途上チヨーカイヤル河以西は濕地鹹を含み、雨後通過困難なるを覺ゆ。而して翌八日ヤンドヤを經て行程十里餘、喀什噶爾漢城に着す。此間喀什噶爾知府の派遣せし通譯官は沿道休憩所の設備其他諸般の事に就き非常に便宜を與へ、喀什噶爾漢城內なる疏勒(スル)府衙門に導かる、知府亦優遇午餐を共にし、次で其の回城に入れり。

沿道の地形

馬を驅りて塵埃を避く

## 三、漢代の城址

以上の地形を總括すれば、道路は全部平坦にして、土地鹹鹵、沙島外は梧桐若くは灌木の林を成すもの多く、其の灌木帶には鹹塊沙塊相交錯して突起し、丘阜の如く連綿重疊しつゝ、紅柳其上に生ひ茂り、遠く之を望めば、鬱々たる大森林の狀を呈せり。沿道は蚊虻亂れ飛び、鹹土に馬糞を混するの塵埃は、濛々天を掩ひて、眼を害し呼吸を塞ぎて、不快なること實に言語に絕し、殊に瑪喇巴什以西を甚しとす。されば旅客は多く車を捨てゝ馬を驅り、以て其の苦痛を薄ふせんことを勉む。車夫も亦夜行を喜びて晝行を願はざるは此故に因る。且つ一般に飲料水の不良なる有

り。

圖木舒克即ち、九臺の西方に二個の丘阜脈ありて、南なるは低く且つ長く、北なるは高く且つ短く、總じて之を特庫爾山と稱す。相距る約一千米突、本道は其中間を貫通するが故に自然の關門を成せり。其の西南近距離の地に横はる土巴山と共に、本街道上唯一の高地とす。

自然の關門

聞く漢の代、同山上に城壁を築き、戍兵を置きしと。又英人嘗て此處を發掘し、古器若干を得たりと云ふ。

阿克蘇河は水量甚だ多く、兩岸斷崖を成し、相距ること二千乃至三千米突、流線散漫なるも水勢急なるが故に徒渉すべからず往時は阿克蘇漢城の南、約二里餘楚克達の邊に架橋ありし爲め、漢城より渾巴什に到る距離は僅に八里餘に過ぎざりしも、其後橋梁流失して以來、渡河の設備を施さざれば、已むを得ず五里有餘の迂路を取らざるべからず。

## 四、喀什噶爾

土地の狀況

喀什噶爾は東經七十六度十二分、北緯三十九度二十五分、省會に至る五百七十五里、北京を距る一千九百零九里に在り。回、漢の二城相隔つること約二里其の回城内には喀什噶爾道臺、疏附縣、協臺の諸衙門及電信局、通商局、銀元局等を置き、其の北門外には、露國領事英國印度貿易事務官駐在し、露清銀行支店並に露國の郵便局等あり、又漢城内には、喀什噶爾提臺、疏勒府衙門あり、人家回城は六千五百戸、漢城は一千五百戸、人口合して約六萬とす。

回城は商況繁盛なること、省内第一にして、露領土耳機斯坦、阿富汗、『カシミヤ』等の諸國人種、各異の服裝を爲し、市中を往來するの狀は、宛然東西人種の博覽會を見る如く、此内最も多きは露人にて總て商賈とし、其の在住者約五百名あり、次は印度商人約三百名とす。是等の外商は、皆客店中に滯在しつゝ、平常卸賣を爲し、市日露店を張る者多く、開店する者少なし。故に市日には特に熱鬧を極む。聞く此地露貨大半を占め、葉爾羌は英貨其の大部を占む。英貨は天鵞絨、金銀繝、寶石、珊瑚、眞珠等高貴の裝飾品多く、露貨は金巾、更紗、食器類、銅、鐵器等日用品を多しとす。又聞く露貨毎年の輸入額は、數百萬兩の巨額に達し、輸入は常に輸出を超過するを例とせしに、日露戰役後の狀況は、俄然一變し來りて、漸次反對の結果を呈するに至れり

東西人種の博覽會

露貨と英貨

日露戰爭の影響

と。極東に於ける日露衝突の砲聲が、支那西陲にまで響き渡りしとは、聊か意外の感なき能はず。又印度の貿易金額は、露國の約三分一に過ぎずと云ふ。當地銀行は一の露清銀行支店あるのみ。通貨は、露、清、印度の各貨幣流通す。當時に於ける其の比價大約左の如し。

主産物

| 露 | 清 |
|---|---|
| 一ルーブル（銀貨） | 銀六錢 |
| 五ルーブル（金貨） | 同三兩一錢 |
| 十ルーブル（金貨） | 同六兩二錢 |

紙幣は五分内外安値なり

英印度貨）

一ルピー（銀貨）　銀三錢七分五厘

但し紙幣は通用せず

當地の主産物は綿花、羊毛、紬、綿布等とす。

此地は前記の如く諸方の人民蝟集する爲め、之を他方に比すれば、自ら人情稍々輕薄なるを認む。然れども爾て、其の回城を一見せし者は、何人と雖も、教會堂の夥しきに一驚を喫せん。其の大小を計上するに、正しく八十餘場に及び、就中最大なるを、回城の東北里餘の邊、老木鬱蒼たる森林中に在る教會堂とす。場内には、阿克伯（ベーグ）の墳墓あり。蓋し吐魯番に亞ぐ靈場として、回教徒の來拜する者引きも切らず。精神を談じ、靈界を說く宗教の力も、未だ人情の浮薄を矯むるに足らざるか。

夥しき教會堂

四方文學の進入口

昔て瑪哈默特蘇勒旦（マホメットスルタン）此地に布教するや、遂に土酋を逐ふて汗位に即き、以來世々回部王の居城と爲り。近くは阿克伯に至る迄、回教の政令教令は常に此地より天山南路に流布せしのみならず、古來西方文學の進入口たるの故を以て、喀什噶爾の名は、古くより洽く世界の知る所と爲れり。

聞く纏頭其他の露境内に入らんとするには、地方衙門の路票（即ち證明書の如きもの）にして其の之れを得る料四錢）の外、露國領事の捺印證明を要し、而も其の手數料銀壹兩五錢を領事に納めざるべからざるに反し、露人の清國内に來る者は、何等の課する所なしと。斯る類例は、獨り這般の事に止まらざるものゝ如し。

露領への道路

此地より露領に通ずる道路數條あるも、其の内二道の外は、山中游牧民等の相往

來するに過ぎざる徑路なり。

二道路其一を喀喇鐵列克達坂山路と稱し、フェルガン州のアンヂャン及オシに到る駄獸路にして、通常十一日行程とす。其の清領内に於ける各驛は、回城より西北行八里、木什素魯克卞、七里安鳩安卞、十一里堪蘇、十三里庫什阿依托海、八里烏胡素魯克卞、十三里也斯克奇卡、十里烏魯克恰堤卞、十一里、業干卞、十四里、愛坎什唐木、次で喀喇鐵列克達坂を踰へて露境に入る。

他の一を圖魯憂爾特達坂山路と稱へてセミレチエンスク州のナリンスコエに通ずる車道とす。然れども一般に良好ならず。現に其の回城北門外の橋梁は破壞せる爲め、之れが改造と共に道路の修繕を兼ね、露清銀行より、輸出牲口の稅を擔保とし、漸次償還の約を以て、銀三萬兩を借入れしも、架橋の位置に就き、露國の干涉する所と爲りて、當時交涉中なりき。該道路も亦十一日行程を要し、其の清領内なる各驛は、回城より北行九里白依沙克卞、十里伊斯里克卞、十一里巴依和登、七里牌素霍爾罕卞、七里恰哈瑪克卞、七里克子冷科羅桿卞、十一里托雲多拜、五里圖魯憂爾特達坂を踰えて露境に入る。

氣候及地勢

氣候は温和にして北路各地の如く不順ならず。河川は大出水の外、四時共に騎渡し得べく、冬季氷の厚さは、約一尺に達す。地勢は山を負ひ水を帶び、土地豐饒、且つ新疆の最西に位置して、露領土耳其斯坦巴密爾、英領印度に交通の便あり、古來屢々兵燹の害を受けしも、現今尙ほ依然として一大都會たるを失はず。毎年八、九、十月の交亞剌比亞メッカ參拜の爲め、此地を經過し、露境に入る者、實に一萬五千を下らずと云ふ。

露國の國境配兵

露國領事館内に於て從來自國との公文往復及爲替を取扱ひつゝ在りしが、更に二ヶ月前、新に普通の郵便局を開設し、驛傳を設け、四日にして露領イルキスタムの電信郵便局に送達することゝせり。

露國領事館には、六十騎の護衛兵を置く、其他露國の國境配兵大略左の如し。

イルキスタム（露清國境、安集延街道達坂の西）　哈薩克二十五騎　オシ　步兵千名　安集延步兵千名　ナリン　哈薩克八十騎　ギュルシャ　哈薩克百二十騎　バミール　步兵三十、哈薩克二十騎　タシュクルガン（蒲犁廳）　哈薩克十三騎　ギシット、ラバット　哈薩克十八騎

初め予の漢城に着するや、先つ知府蔣光陞氏を疏勒府衙門に訪問す。蔣知府快

提督の不豫と贈藥

活能く談ず、次て喀什噶爾提督焦大聚氏を訪問せんとするや、偶々湯參將來訪し、且つ同氏の談に因りて、提臺の不豫を知り、其の病症を問へば、下痢なりと答ふ。因て試みに予が携帶の藥料を參將に託して贈る。而して夕刻衙門を辭し、馬を馳せて疏附縣衙門に知縣錢炳煥氏を訪ひ、縣官設備の公館に投宿す。

九日、早朝錢知縣來訪す、次で予は喀什噶爾道臺袁鴻祐、露國領事コロコルフ、英領印度貿易事務官マカートニ、協臺楊德俊の諸氏を各衙門に訪問せり。

故郷への通信

十日、昨日訪問せし各官相前後して來訪し、茲に公式の應答を畢り、爾後滯在間、相互往復殆んど虛日なし。殊に英官マカートニ氏とは數次往來せり。同官は予が崑崙通過、印度旅行に就き、滿腔の至誠を以て、斡旋の勞を執られしは、深く感謝する所とす。

十一日、松石大佐及留守宅等へ發信。此の書信は、英官マカートニ氏に託し、印度を、經て郵送す。但しカシミヤ喀什噶爾間の通信は、毎月三回當地發送の定めにて、當日は其の定日なればなり。

大谷光瑞伯に打電す。蓋し長安分袂の際、特に予に囑して、喀什噶爾安着の時、一報すべきを以てす。因て其約を履行せしなり。（葉爾羌に行く途上にて同伯より鄭重なる返電を得たり）

贈藥の奇効

二十日、提督より、二十一日、道臺よりの招宴に赴く。予當地着以來、文武各官より懇切なる招待ありしも、一々之に應ずる能はざるに因り、深く厚意を謝し、暑期の旅行少しく健康を害ひ、靜養中なる旨を告げ、悉く辭退せしが、十九日提督より使者到來して、贈遺の良藥偉効を奏し、病氣頓に平癒せしを謝し、且つ明日提督自身來訪すべきを告ぐ。（支那の俗此の筆法を以て他を促す事あり）予即ち全快の神速なりしを祝し、明日此より往訪すべき旨を答へ、翌二十日、漢城に入り、提督を訪問す。料らざりき盛宴を張りて予を待たんとは。道臺は此の事を聞知せしか、將た提臺、道臺相謀りて、事茲に至りしかは知らざれども、予の歸寓するや、直に道臺より明二十一日の案内狀を接受せり。故に已むを得ず復た之に應じたるなり。

已むを得ず招宴に應ず

沿革

史に徴すれば當地は漢代の疏勒（シユロ）國にして、明帝の永平十六年（紀元七十三年）龜茲王建、疏勒王成を殺し、自ら其の左候兜題を立てゝ王とせり。漢使斑超、兜題を捕へ、成の兄の子忠を立つ。龜茲屢々之を攻めしも、超毎に忠と呼應して防戰せしが、會々超徴されて涉車に還るや、疏勒倏ち龜茲に屬し、尉頭と兵を合す。超回つて叛者を攻め、

尉頭を擊ちて疏勒を定めたり。

章帝の建初五年（八十年）疏勒都尉番辰復た反す。超大に之を破る。同六年超、莎車を攻めしが、忠彼と通ずるを以て超、其の府丞、成大を立てゝ王とし、元和元年（六十四年）超、遂に忠を殺す。安帝の元初中（百十年代）疏勒王安國、舅の臣磐罪あるを以て、月氏に徙す安國死して子無く、其の母國柄を保ち、國人と議し臣磐の弟の子、遺腹を立てて王と爲す。月氏兵を率ゐて臣磐を納る。國人又遺腹を捨て、臣磐を立つ。後、莎車、于闐に叛いて疏勒に屬し、疏勒遂に强國と爲る。

順帝の永建二年（百二十七年）臣磐來朝し、五年其の子を遣して入侍せしむ。靈帝の建寧二年（百六十九年）臣磐季父、和得に殺され、和得自立して王と爲る。同三年漢之を討て破れ、疏勒大に驕るも、漢亦禁止するを得ず、北魏の文成帝和平末年（四百六十年代）其王、釋迦牟尼佛の袈裟を貢し。隋の煬帝大業中（六百年代）王、阿彌厥來朝す、次て唐の貞觀九年（六百三十五年）王裴阿那名馬を奉る。儀鳳中（六百七十年代）吐蕃其國を陷れ、武后の長壽二年（六百九十三年）王孝傑吐蕃を破り、始めて國を復す。玄宗の開元十六年（七百二十八年）其の酋安定を立てゝ王と爲し、天寶十二年（七百五十三年）首領裴國良を遣して來朝せしが、以來史に見えず。宋の代、于闐に併され、後、西遼に屬す。明の世、哈實哈兒國と爲り、同末世（千六百年代）瑪哈木特玉布素亞剌比亞より來りて、自ら派汗の裔と稱し、回部悉く風靡して遂に西域回教の祖と爲る。

## 第十節　喀什噶爾より葉爾羌に到る

一、英吉沙爾の歡迎

八月二十四日午後一時十八分愈々喀什噶爾を發するに臨み、長將軍及王藩臺に打電して、新疆旅行中の厚遇を謝す。蓋し喀什噶爾以東は、電線の通ずるものなければなり。八時五十五分行程十里餘雅卜泉（ヤンチヤン）に着す。人家五十六戸、內漢人十六戸、印度人七戸、一週一回、市を開くと。途上ペズワット、ペズボテ、ハネレク、カラスの四河を過ぐ、共に木橋を架せり。十餘里程中、初の三分二は人家斷續し、後の三分一は戈壁帶を成せり。是日午前降雨ありしが土質砂利なる爲め、途上深泥の處なきも、若し晴天ならば塵多からん。路幅四米突內外、附近は牧畜盛なり。

二十五日トグロク、ゾグロク、ハナカー等、沙漠間に散在する各部落を過ぎて、行程

旗差物の儀仗

砲將予なる數里の外に迄る

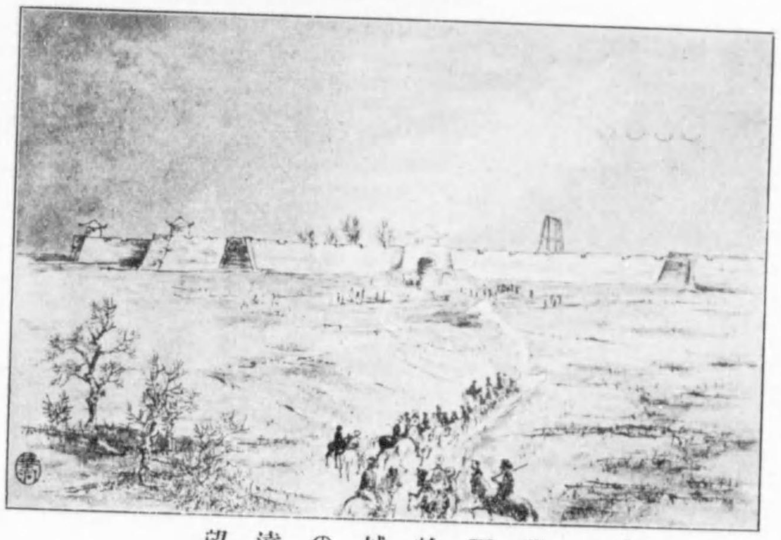
十里餘午前十一時、英吉沙爾（エンギサル）の接館に着するや、英吉沙爾廳官李參將（陶）を初めとし文武官の歡迎甚だ盛なり。同三十分美麗に裝飾せる轎車に乘じ、旗指物を翳せる儀仗の兵士に擁護せられつゝ入城す、沿途觀る者堵の如し、斯くて正午の頃祝砲の轟くと共に、兼て準備せる公館に入る、小憩の後答禮の爲め文武衙門を往訪し、夕刻小宴を公館に開く。軍隊は步隊一營（百六十人）馬隊一旗（五十騎）を置き、城內には漢民百十五戶、漢回八戶、纏頭六十戶、南關には纏頭二百四十戶ありと云ふ。

二十六日午前六時三十分出發、文武官の見送るもの到着時と同じ。東南に丘陵あり、城に接して崖を成す、崖に沿ふて行く二里餘、一河ありサハーンと稱す。此より鹹土帶牧草生じ、部落相連り、トブロノ（五十戶）（人家約百）コシケンベス（六十戶）（人家約）タメイ（約百戶）（人家約）クドツク（八十戶）（人家約）チヤマルン（百戶）（人家約）等の各小沙島を經て行程約十五里黑孜爾（ヘズル）浦（ブイ）に着す。是日陶參將、特に予を送る數里、屢々之を辭するも聽かず、曰く、喀什噶爾提督の命なりと、周旋甚だ勉めたり。

二十七日行くこと數町、前途皆沙磧の地、往々獨立家屋を送迎して行程約十二里一小沙島即ち巴爾欄干（パシランカン）に着す。沿途二、三の獨立家屋を見るのみ。蓋し黑孜爾浦

阿克蘇の文武官

阿克蘇の市街



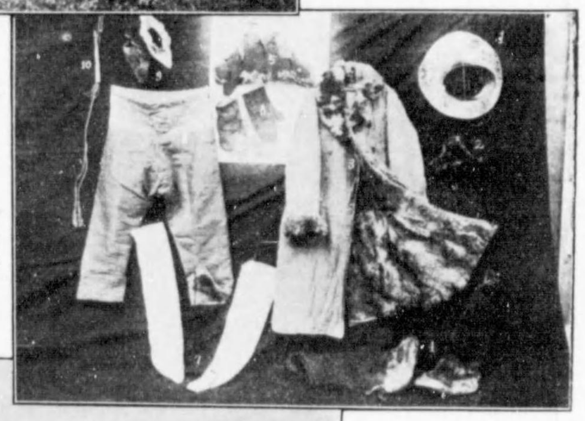
葉爾羌城の遠望

崑崙山跋渉に要する準備品

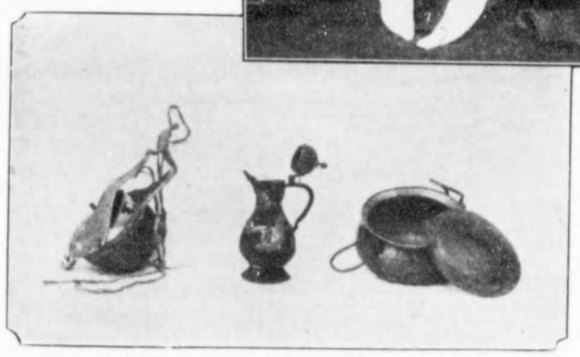
天幕（前面）

高さ三尺五寸、底縦六尺五寸、横四尺、一人用、薄きブックを以て製し底は護謨引ブック

天幕（後面）



1 日覆　2 毛帽
3 外套（裏毛）　4 雪靴（革製）
5 覆面（馬毛）　6 手套（裏毛）
7 靴下（毛氈製）　8 袴（裏毛）
9 面蔽（馬尾製）　10 鞭（革製）



炊爨具　湯沸　茶碗入

印度人の別墅に投宿

地形

を距る四里強の地點は、英吉沙爾廳と葉爾羌府との境界に當れり。巴什欄干は人家約二百戸、南山遙に四里餘の邊に聳ゆ。二十八日、行くこと約一里の地點より沙丘相續き、サイランガル、チャーレク（人家約四百戸）スゲットブラク（人家約百五十戸）ホシャワットの諸部落を過ぎオーバ河を渡る。該河は其の左岸にカラコル村、右岸にベキラ村ありて彼のスゲットブラクは八年前の新開に係ると云ふ。斯て午前十一時、行程約十里葉爾羌の西門に達し、次で漢城、回城を過ぎ、印度人某の別墅に投宿す。

喀什噶爾及葉爾羌間の道路は、東南に向て行走し、右方即西南は、近く葱嶺の山脈を望み、左方即ち東北は直に沙漠に接す。河川は總て細流のみなるが、兩岸斷崖數丈に及ぶもの多く、橋梁に由るの外、到底渡河すべからず。且つ喀什噶爾附近に於てのみ道路と並行するも、他は皆道路に正交すれば、沿途の部落自ら東西に短く、南北に狹長なるを常とし、各部落の附近には、好個の牧場あり、牧畜到る處に盛なり。各部落内は、楊柳及諸種の果樹繁茂せり。沙島外は絶えて灌木蘆葦の生ずるもの無く、單に牧草の叢生するか、又は全然沙磧のみなるが故に路上塵埃多く、旅客は騎馬にて之を避け、且つ細砂車輛を嚙みて、車行困難なれば、貨物の運搬も亦多く驢背

に賴れり。

## 二、葉爾羌（ヤルカンド）

城内の雜觀

葉爾羌（回語、葉爾は土地、羌は廣大の意）は、東經七十七度三十二分、北緯三十八度十五分、省會を距る實に五百八十五里、北京を距る一千九百十四里に在り。其の漢回の兩城相距る僅に數町、此間商家櫛比、繁華の街衢を爲し、莎車府（サーチョフ）、協臺兩衙門は之を漢城内に置き、人家總計約七千を有す。漢城は土壁高さ三丈三尺、周圍二里餘、其の廣大なること他に比なく、往昔喀什噶爾の回王都を此地に移せしに因り、城郭廣大宮殿壯麗と稱へられしも、數度の變亂は、概ね有名なる建築物を破壞し去れりと云ふ。

回城内は街路屈曲且つ狹隘、小溝縱横、處々溜池を湛へて、土人は之を飲用す。其の不潔なること、恰も黴菌養成所の觀あり。然れども露領及印度等よりの商賈蝟集し、殊に印度商人多く、市況甚だ旺盛を極む。産物は生絲、綿、麻、敷物及び菓物等にして、玉石最も名あり。

鑛金の不一致

省内物産の賣却には、悉く鑛金を課す。而して其の法一樣ならず。唯鑛金局長の寛酷に因て差異あり。今當地に就て一例を示せば、布一反（三錢）に對し半分即ち紅錢二文、綿花一斤（二錢八分）に對し半分、靴一足（二兩乃至一兩二錢）に對し紅錢五文即ち一分四分の一等とす。蓋し其の割合五十分の一、乃至百分の一に當る。又外來品は駄驢一頭に對し銀一錢、駄馬一頭に對し銀二錢、駱駝一頭に對し銀三錢と定め、毫も其の内容を檢せず。伊犂は之に反し、悉く内容品を檢め、價格の大小に因りて關稅を徵す。

氣候

氣候は新疆中、最も寒暑順序を得たるの地と稱せらるゝも、夏季は炎熱甚だしく、百度以上に昇ること少しとせず。

交通路

此地又四通八達の要衝に當り、東北は阿克蘇に、東は和闐に、西は喀什噶爾に通じて、共に大道大車を用ゆべく、且つ外邦に達する數道あり、其の西北なるは、蒲犂廳を經て露領フェルガン州、パミール、阿富汗、カシミヤ等に到るの駄獸路とし、其の東南なるは、カラコルム嶺を超へて印度西藏に入る駄獸路たり。古來西域の咽喉と爲すもの故なしとせず。

予の滯在中印度商の取締アブラジャンは宿舍萬端及喀喇崑崙山道通過に要する乘駄馬の調達、『ガイド』の人選等周旋甚だ勉む。蓋し英官マカートニ氏の吩咐

坎巨地王子の來訪

に因りてなり。

一日坎巨地（カンヂユット）（フンザ河上流よりパミール）に亘る間の地域を云ふ）王（ミール）の息來訪す。眉目秀麗、年齒二十五六の少年にして、其談に依れば、

坎巨地は古來清國の附庸國にして、國王（ミール）は代々清廷に朝貢す。然るに今を距る十三年前、印度政廳は郵便線路保護の名の下に、武官を駐め軍兵を屯し、妄りに國政に干渉せし故に彼の父王（當時庫車に在り郡王啣を有す）は之を厭ひ、事の顛末を新疆巡撫に告ぐる爲め、去て烏魯木齊に到りしが、巡撫の抑留する所と爲り目下は庫車に在りて歸國を許されず。最初は地方官より相當の俸祿を給與せしも、次第に減少して、近時は僅に口を糊するの情態なり。又彼は涉車知府より毎月單に銀三兩を受くるのみにて、衣食の料に缺乏しつゝ在り。且つ彼が父王の國を去るや、印度政廳は直ちに王の異母弟を立てゝ王と爲す。元來現王は、妾腹の出にして、國法上王たるの資格なき者なれば、彼れ歸國せば、當然王位に即くを得べきものと確信し、彼が幼時に於ける殿中の榮華を追懷して、現時の悲境を嗟歎しつゝ、我日本の助言に依り、清廷の一顧を促がし、印度政廳に交涉して、彼れ及父王の歸國舊の如くすべく、一臂の勞を予に哀願するにてありき。

喀喇崑崙道を取りし理由

坎巨地を通過せし土人に就きて、彼の地方の景況を聞くに、坎巨地人は回々教を奉ずる人民にして、土地の磽确なる爲め、土着して農業を營む者の少なく、大部は遊牧を事とす。其性慓忮、鼠賊多く、旅人又は郵便脚夫の、該地方を通過して、其難に遇ふもの一再ならず。故に印度政廳は、印度の旅客郵便物を保護する爲め、官兵を派し、英官一員を駐在せしめて之を監督す。現王は毎年人民より約五千留比の歳入あるの外、印度政廳より三千留比の支給を受けつゝ在り。地域廣大なるも、人民は二千餘戸、一萬五千人内外に過ぎず（疑はし）。地は素より清領なるが故に、其王は毎年北京に進貢す。其額指大の沙金袋十五個を定めとせり云々。

是より先、予は崑崙山を跋涉し、英領印度に出でんとするには、喀什噶爾より、ギルギット道即ち郵便路を取れば、僅に二十四日間を以て、スリナガルに達すべき爲め、該道路を採るの計畫なりしも、印度總督の許可なきに因り止むを得ず喀喇崑崙道に由るに決したり。總督の許可せざる理由は、途中保護し得ざること、及隣國に對し影響する所ありと云ふに在りき。恰も予の旅行に際し、露國の武官二名、相前後し

て、喀喇崑崙道を通過せり。惟ふに此等の爲めに謝絶せしならんも、或は他に理由の存するもの無くんばあらず。即ちギルギット（バミール）高原に對し、印度の防備上、若干の軍隊を駐屯せしめ、且つ此山路は所謂坎巨地を通過す。印度政廳は、駐在武官を置きて、現王を督しつゝ在り。同政廳の言明する所に依れば、單に自國の郵便線路を保護するの外他意なしと。とは云へ坎巨地（カンジュット）王の庫車に漂泊する所以王子の葉爾羌に流浪する所以、印度政廳の王弟を立てゝ之を監督する所以、予の通過を許可せざりし所以等を綜合して考へ來れば、暗黑の裡又一道の光明を認め難きに非ざるなり。されど开は一に讀者の判斷に任せんと欲す。

葉爾羌は漢の莎車國たり。宣帝の時（紀元前十年代）莎車王、子なくして烏孫公主の小子萬年を愛せり。王死するに及び、國人朝に請ひ、立てゝ王と爲さんとす、漢乃ち萬年をして國に入らしむ。萬年暴戾、國人悅ばず。前王の弟呼屠徵、萬年を弑し、自立して王と爲り、遂に漢に背く。元康元年（紀元前六十五年）衞候馮奉世、大宛（今の活牢）の客を送り、便宜諸國の兵を發し、一擊彼を斬り、更に王を立つ。王薨の時（紀元十年代）匈奴西域を侵略す。獨り莎車王延之に抗せり。天鳳五年（十八年）延死するや、忠武と謚し、子康嗣ぐ、康、傍國を率ゐて、尙ほ匈奴を拒む。建武五年（二十九年）建功懷德王に封ぜらる。同九年康死し、宣成と謚す。弟賢嗣ぎ、拘彌（今の克里雅の地）西夜の兩國を攻め破り、兄康の二子を立て、拘彌西夜の王とせり。同十七年（四十一年）賢都護の位を請ふ。漢一たび之を與へしも、其の早計を悔い、使に迫りて都護の印綬を奪ひ、更に大將軍の印綬を與ふ。賢恨みて大將軍の印綬を帶びず。自ら大都護と稱し、書を諸國に移す。近隣の諸國恐れて服屬せざる者なし、賢其の十八國の子を漢に入侍せしめ、再び都護たらんことを請ふ。漢許さず。同二十二年（四十六年）賢、鄯善を攻め、其王安を走らし次で龜茲王を滅して國を併す。又嫣塞王を滅して、龜茲の人騬韃を彼の國王と爲し、龜茲を割きて烏壘國（今の拜城の地）を設け、前龜茲王の子則羅を立てゝ龜茲王に、騬韃を移して烏壘王に、且つ龜茲人某を嫣塞王に封す。後ち則羅、騬韃俱に龜茲國人某の爲めに殺され、從て龜茲、匈奴に屬せり。時に大宛貢稅を減ず。賢、擊て其王延留を捕へ、拘彌王橋塞提を大宛王と爲せしが、康居（今の塔爾巴哈臺の西方）の攻むる所と爲りて、橋塞提逃れ歸る。賢、復た橋塞提を拘彌王とし更に延留を大宛に還す。又于闐王俞林を徙して驪歸王とし、其の弟位侍を于闐王と爲す。後、賢、于闐王廣德の爲めに欺か

れ、虜と爲つて殺さる。是に於て一時强盛なりし莎車國は、遂に亡びたり。

後ち匈奴、賢の子、不居徵を立てゝ王と爲すや、廣德又攻めて之を殺し、更に其弟齊黎を立つ。章帝の建初五年（八十年）龜茲に降る。元和元年（八十四年）司馬班超、疏勒、于闐の兵を發して、莎車を擊つ。疏勒王忠叛す。章和元年（八十七年）超、忠を斬り、同二年遂に莎車を破る。元、魏の世渠莎國と稱し、後、疏勒に屬し、自後史に見えず。明末（千六百年代）瑪哈墨特の慈嶺を踰え、東喀什噶爾に移るに及び此地亦彼に歸し、是より回教人の巢窟と爲れり。

崑崙山跋涉に要する準備品

予の崑崙山跋涉の準備は、概ね此地に於て爲したるものとす。（挿繪參照）

附　和闐（ホータン）

和闐は東經八十度四十四分、北緯三十七度、省會に到る六百八十里、北京を距る二千餘里に在り。城壁高さ一丈九尺、周圍約半里、四門を設く、城內には和闐直隸州衙門、參將營ありて、人家約六千、人口凡そ四萬と算せらる、市街は低屋密接し、街路亦狹隘なるも市場殷賑なり。住民は稍々諄朴にして、遊惰浮華の習慣薄く、男子は專ら稼穡に勤め、能く勞働に堪へ、一般生計に富み、從て女子も勤勉に、或は養蠶、或は紡績を業とせり。此地は山繭に適し、野獸多し、物產は玉、金、麝香、生絲、織物、敷物等ありて、玉出崐崙とは即ち此地を指すものなり。又婦女の秀美を以て其の名高し。氣候は他部に比すれば、最も溫和なりと云ふ。

和闐は漢の于闐（ウイテン）國なり。明帝の永平六年（紀元六十三年）班超、于闐に到るや、王廣德、匈奴の使を殺して漢に附く、順帝の永建四年（百二十九年）王放前、拘彌王興を殺し、其子を立てゝ王となす。同六年帝命じて拘彌を歸さんとせしも、放前詔を奉ぜず。陽嘉元年（百三十二年）徐由、疏勒王臣盤に命じ、于闐を擊たしむ。臣盤乃ち之を破り、興宗の人、成を立てゝ拘彌王とす。桓帝の元嘉元年（百五十年）長史趙評、于闐に在り、偶々癰を病んで死す。拘彌王成、評の死を以て、于闐王建の毒する所と爲し、敦煌の太守王敬に告ぐ。敬直に于闐に到りて建を斬る。建の侯將輸僰、又敬を殺し、自立せんと欲して、國人に殺され、建の子安國立つ。靈帝の熹平四年（百七十五年）安國拘彌を攻めて其王を殺し、自後漢に屬せず。

魏の文帝の朝（二百十年代）其王山習來て馬を献じ、梁の武帝天監九年（五百八年）以後屢屢入貢す、隋の煬帝大業中（六百年代）王姓王來朝し、唐の太宗貞觀六年（六百三十二年）來り貢

す、上元元年（七百七十四年）此地を以て畋沙都督府と爲し、王伏闍雄に都督を授く。武后の長壽二年（六百九十三年）伏闍雄死し、子瓛嗣ぎ、玄宗の開元中（七百十年代）來て駿馬を献ず。瓛死し、尉遲伏師立ち、伏師死し、伏闍達嗣ぎ、伏闍達死し、尉遲珪嗣ぎ、珪死し、子勝嗣ぐ。後、史の傳ふるもの無し、石晋の天福二年（九百三十七年）に至り、其の王李聖天來貢す宋の太祖建隆三年（九百六十二年）王子德從來朝し、以來貢を絶たず。明の永樂四年（千四百〇六年）其酋打魯哇力不剌金入貢す。

## 三、新疆旅行の好時期

北京出發以來約一年此間、大は黄河の濁流より、少は山間の一谿水に至り、高きは天山の諸巓より、低きは戈壁の沙阜に至るまで、山河を跋渉するもの幾百回なるを知らず。殊に甘肅省の西端、新疆省の全部に亘りては、殆んど夜中沙漠地帶を漂泊し、其間氣候の劇變、飲水の缺乏に遭遇せしも、僅に微恙に冒されし外、何等の異狀なかりしは、實に幸なりと謂ふべし。今や略々新疆省の行程を終へて、英領印度に出づべきに臨みたり。次で世界の高山、崑崙の跋渉は、予が旅行中、唯一の困難を感せし所、そは次章に於て之を述べんとす。兎に角新疆省の旅行も容易なりとは謂ふべからず。然り而して其の旅行に最も宜しきを何れの時季とかする。

例年一二月は寒冷、三、四月は融雪の爲め道路泥濘、且つ時々大風あり。五、六、七月は出水の爲め河川の通過困難且つ蠅虻多く、八、九、十月は年中最良旅行期にして、十一、十二月は寒氣酷烈なり。冬季北路は積雪多きも、南路は積雪量少なきが故に防寒の準備良ければ旅行敢て難きに非らず。而して最も宜しきを九月とす。聞く葉爾羌、烏魯木齊間に往來する「キャラバン」は、概ね九月を以て出發し、約六十六日の行程を經て、十一月初旬に何れか其の一方に着し、翌年三月に至り始めて歸還すと。委しく云へば九月初旬より十一月初旬迄を年中最良の旅行時期と謂はんと欲す。嗚呼、水多ければ旅行に難く、旅行に難からざれば飲用水に缺く、沙漠旅行の困難なるは、實に想像の外に在り

# 第六章　新疆省より英領印度に入る

## 第一節　兩大山派跋渉の準備

予は愈々清國を辭して、今や英領印度に出でんとせり。其の之を實行するには、

亞細亞大陸の脊梁たる崑崙及ヒマラヤの兩山脈を跋渉せざるべからず。其崑崙山系中なる喀喇崑崙嶺は、清國並に印度カシミヤとの國境たると共に、街道第一の高嶺とす。嶺北即ち清領内は、道路を修繕すること無きが故に、嶮惡言語に絶し、嶺南即ち英領印度内は、不十分ながらも、道に修理行はれて、比較的通過に便に、レー、スリナガル間に至つては、修理能く行届き、駄獸路としては先づ可なりとす。

清、英領道路の比較

南北の準備地

新疆よりするものは、葉爾羌にて、カシミヤよりするものはレーにて越山の準備を整ふべく、駄載量は約八貫目を限度とし、乘馬、駄馬は必要數の約二割多くを携行し以て不時の用に備へ、天幕は勿論、約一箇月半の人馬糧食を用意し、防寒裝具は、時季の如何に拘らず、十分の準備を怠るべからず。秣は容積多き爲め、到底携帶を許さず、沿途僅に生ずる雜草或は灌木の芳芽とに賴りて、不十分ながら滿足せざるべからず、燃料は灌木、草根又は馬糞を拾集せば、纔に炊爨の用を辨ずべきも、煖を取るには供するに足らず、飲料は概ね之を得べく、流水なき處に於ては、氷を溶せば、些も不足を感ずること無し。

乘馬及幕營地

馬は高山帶の產に限り、平地の產は通過の見込少なく、予は有名なるバダクシヤン即ちバミール高原の產馬を乘用としたり。幕營地は水、草、薪を得るの便宜且つ防風に適する處なるが故に從來一定し在り。各嶺上は晴天と雖も斷えず强風吹き、午後殊に甚しとす。最も危險なるは、嶺上天候の劇變にして刹那濃霧谷間に湧き密雲四面を封し、天地暗々咫尺を辨せず、呼吸塞逼人馬爲めに斃るゝこと有り。是に於てか各嶺を通過せんとするには、前日嶺の中腹なる堆石方形の圍郭を設け在る處に幕營し曉起、能く天候を見定め、早朝に通過するを常とせり。若し少しにても天候不良と見れば、決して發程すべからず。又如何に晴天なればとて、午後には通過せざるを要す。是れ暑中は氷面幾分の融解を釀し、滑走するの虞あり。加之强風吹き、雲霧生じ易く動もすれば不測の難に陷るが爲めなり。

高嶺の超過は午前に限れり

兩山脈中の高嶺

今崑崙、ヒマラヤ兩山脈中、超過せざるべからざる各嶺を、北方より順次に列記すれば、概ね左の如し。

| | |
|---|---|
| アッコラム嶺 | 海拔九千二百二十尺 |
| エンギ嶺 | |
| 喀喇崑崙嶺（カラコルム） | 同　一萬八千五百五十尺 |

デブサン嶺
セシル嶺　同　一萬七千八百尺
コーロン嶺
カルドン嶺　同　一萬七千五百尺

以上は皆レーに到る迄に在りレーより更にスリナガルに達するヒマラヤ山脈間にはボトラ、ナミカ、ゾジラルの三嶺あるも、ゾジラル嶺を除くの外は、皆小嶺にてゾジラル嶺は、海拔一萬一千三百尺あり。

越山の里程

里程は葉爾羌よりレーに至る約六百十二哩、レーよりスリナガルに至る二百三十八哩、合計八百五十哩にして、通例葉爾羌、レー間三十日、レー、スリナガル間十四日を要するの計算なりと雖も、是れ全く途中一の故障に遇遭せざる最小限の日數とす。然るに予は四十三日間を以て、世界の兩高山脈を跋渉し畢り、何人も其幸運を祝せざるは無かりぎ。若し風、雪、降雨、出水或は人馬の疲勞、其他臨時の事故生ずるときは、到底斯る短日子にて經過すべからざるは言ふ迄も無く、土人の言に徵するも、多少の故障に出會するは、越山中の常事にて、予の如きは實に例外に屬すと。其の幸運を祝するもの、所以なきに非ざるを知る。

予の幸運

通過の時期

通過の時期は、之を年中二回に分つ、即ち第一期を四月末より六月初め迄とす、該時期は融雲の初期に屬し溪水量未だ多からず。第二期を九月十月の間とす、此兩月は、雪水減少、氣候も亦未だ寒烈に至らざるに因る。而して第二期後より、第一期前迄は、氣候極寒、降雪多量の爲めに又七、八月間は、溪水多量の爲めに、通過すべからざるなり。要するに吹雪の外は、一に溪水の減少時期を擇ぶに在れば、年に因りて或は多少の遲速を免れざるが、予は九月十五日を以て葉爾羌を發し、十月二十七日スリナガルに到着す。即ち第二の通過期を採りしものなるが、其れすらカラコルム嶺北にて二三箇所の溪水徒渉に際し、深く馬腹を沒し、辛ふじて渡河するを得、又ゾジラル嶺附近にては、降雪の爲め頗る困難したり。

無人の境と動植物

葉爾羌よりレーに到る約三十日の行程中其の十六日間は無人の境、生物として棲息するは、單に狼豺、鷲、鴉鳩の類のみ。又處に因り「バルゴン」と稱する灌木叢生せり。該灌木は生木の儘打て薪材と爲すべく、其茅は駄獸の食と爲るも、草少なきが爲め已むを得ず食ふものとす。然れども駱駝は之れを嗜好すと云ふ。無人境の

糧食の注意

前後には、多少の寒村間在せるも、秣は兎に角、糧食は容易に之を求むべからず。

糧食は肉類の罐詰、麭包又は米（大凡一萬五千尺以上の處に到りては空氣稀薄の爲め能く煑へず）等宜しきも、殊に野菜の用意は、缺くべからざるの一とす。何となれば海拔一萬三千尺以上の處に及ぶときは、肉食を嚴禁し、且つ食量も半に減じ、只麭包又は粥飯を喫して、野菜の少許を用ゆるを大必要とすればなり。且つ肥滿せる人は呼吸切迫の爲め到底經過すべからずと云ふ。

## 第二節　葉爾羌よりスリナガルに到る山路

### 一、郵便路と通商路

葉爾羌よりスリナガル即ちカシミヤに到るには、二條の道路ありて、共に崑崙山脈ヒマラヤ山脈を超過す。其の一條、西なるをギルギット道と稱し、カンジュット（フンザ）ギルギットを經てスリナガルに達するもの、行程約二十四日、予は以下之を西道と記さん。他の一條、東なるを喀喇崑崙道若くはラダック（所謂レー）道と稱へて喀喇崑崙及ゾジラル嶺を超え、スリナガルに入るもの、行程約四十四日、予は以下之を東道と記さんと欲す。右の外、東西兩道の中間に、又一條の道路を通ずと云へるも嶮難無比にして、現今全く通過を絶つと。

東道と西道

西道は近くして嶮、東道は遠けれども、之を西道に比すれば稍々夷なりと。東道は通商路を以て公開し、西道は郵便路と爲せるにも拘らず、外人の爲めに閉鎖するより之を通過せんには、勢ひ印度政府の認諾を要す。前にも述べし如く、予は此の西道を取らんと欲し、在喀什噶爾貿易事務官マカトニ氏（新疆省は露國との通商條約ありと雖も、英領印度とは之れ有らざるなり。然れども印度人、殊にカシミヤ人は、古來新疆南路と通商貿易しつゝ在りしが故に、無條約中、慣例として相互默許の姿と爲り居れり。現に印度人の南路に住む者數千人に下らずと。乃ち印度政府は、一の官吏を喀什噶爾に駐在せしむ。マカトニ氏即ち是なり、氏は漢語、土語に通じ清官の氣受け宜しく殆んど露國領事と對等の待遇を受けつゝ在り）に依頼せしに、同氏は直に印度總督に打電し、問合せしか、沿道保護し能はざると、隣國（露國？）の關係上、許可し難しとの理由の下に、其の通過を拒絶せられたるが故に已むを得ず東道に依ることゝしたり。

西道の拒絶

西道を通過せし大谷伯

### 二、西道の景況

我國人にして西道を通過せし人あり。是を京都西本願寺の大谷光瑞伯と爲す。今同伯及印度商人の該路を通過せしものに就て聞き得たる大略の景況を掲げ、東

道に對照する爲め、聊か參考の資に供せんとす。

葉爾羌より塔什庫爾干（蒲犂廳）に至るまでは良好なる馱畷路其れより數嶺を超過しスリナガルに通ずる道路中、キリック或はミンタカ嶺を經過せざるべからず。

キリック嶺を經過するはミンタカ嶺を經過するに比し、一日の行程を加へざるべからざるもキリック嶺の經過路は騎行し得べきに反し、ミンタカ嶺は兩側急傾斜、且つ馬蹄を容るゝの餘地なく、數〻傾倒せんとするの虞あるが故に、犛牛即ち「ヤーク」（後に詳記すべし）を使用す。馬は挽索を用ひて上下すれば、携行には絶對不可能とすべからざるが、騎乘にては危險通過すべからず。縱し此の兩路、其の何れを採るにせよ、カイバル附近の通路に至りては、所詮馬は使用すべからずとす。蓋しカイバルの險は兩岸絶壁、通過點其右岸に在りて、絶壁僅に足を容るゝの寸地を餘し、甚しきは隻足を置くに過ぎず。若し其の隻足も、尙ほ容るゝべからざる處は、架設の木棧に依り、纔に通過すべし。然れども土人は、背後約六、七貫目の貨物を負ひ、優に石壁に面して蟹行す。素より兩手を巖角に托し、或は罅缺に掛くる等、其の危險なること、宛も及上を渡るが如しとの喩言に洩れず。

キリックとミンタカ

カイバルの險

此の難路に向つては、馬匹は其の馬具を離脱して、土人の善く泅ぐものをして之を溪水中に牽かしむ、之を陸行の難に比すれは、水の寒冷流勢の急速更に幾層の困難なるやを知らず。殊に其水は解雪直下して、寒冷氷の如く、其困苦察するに餘り有り。然れとも幸に斯る嶮惡なる箇所は陸上約二町、水中約一町許なりと云ふ。

斯の如き嶮惡なる道路の外、尙ほ幾多の騎行すべからざる難處あるも、概ね兩手補助の要なくして歩行し得べし。バツル氷河は、約二十町に亘り、堅氷上花崗石の碎片を露出して、足一たび之を踏むや忽ち滑走顚倒す。騎行は最も危險なるを以て、皆下馬し、細心注意しつゝ、挽索を以て相引く。加ふるに又處々約一、二尺の深き罅裂あり、誤て陷れば、攀登すべくも非ざるなり。

水路の苦　陸路の苦

バツルの氷河

ギルギットよりスリナガル間は、印度政府邊境防備の爲め、幅約三米突、最急勾配十分一を超えざる、良好の道路を修築し、處々驛遞を置き、行旅の便に供す。然れども一般人民の爲めには、馬車を使用するを許さず。惟ふに車轍の路面を害し、一朝有事の際妨害と爲らんことを慮る爲めなるべし。此間の難處はブルジル嶺に有りて、該嶺はヒマラヤ山脈に屬し、其の絶巓は海拔一萬三千五百尺、道路は稍々良好な

ギルギットよりスリナガル間の道路

ブルジル嶺の難處

ギルギットの狀況

りと雖も、積雪深く、毎年十月下旬より降雪、一月中は十四五尺に及び、冬季郵便夫は爲めに屢々道を失ひ、遂に凍死して不通となること稀ならずと。

電線はギルギットに通す同地は物資豐富にして、フンザ、ヤッシン地方よりの道路輻湊し、印度政府は、バミールに備ふる爲め、步砲兵若干を配置す、以南は部落處々に散在し、且つ六十尺以上に達する樅、落葉松の喬木蓊鬱天を掩ひ、土人は麥粉及杏實を常食に用ひ、肉食極めて稀なり云々と。

キリック、フンザ間の景況

通過の時期

又西道の難路たる、ミンタカ或はキリック嶺の麓より、フンザに至る約八十哩、五日の行程を土人は之を三日間に急行すと。該路を經過するに、年中の最好時期は、フンザの水落ちて、未だ氷結せざる時に在り。多少の遲速は免れざるも、大約十月中旬より、十一月末迄とす。一般地勢はフンザ川に沿ひ、通路亦是に沿ふ。兩岸側には峭立せる山嶽相連り高きは海拔二萬二、三千尺に及び、通路は概ね八千尺乃至九千尺の間に在り。左右兩岸の幅員、廣きは四、五町、狹きは四五十間に過ぎざる處を有し、夏季は山頂の積雪解け、奔流滔々として矢よりも早く、冬季は全く氷結す。地質は普通花崗岩石にして、往々石英岩を交へ、物資缺乏、馬糧も之を得る能はず。土

地質

人は杏實を乾燥せるものを穀食に換ゆると云ふ。

葉爾羌出發

葉爾羌河を渡る

## 第三節　崑崙山脈の跋涉

### 一、宛然たる大名行列

九月十五日、葉爾羌を發し名にし負ふ世界の高山、崑崙、ヒマラヤの兩山脈を跋涉せんとす。顧みれば予一人の爲に、荷物を負ひ、天幕を負ひ、糧秣を負ふの駄馬乘馬合せて十二頭之に伴ふ馬夫數名の外、從僕二名（内一名は通辯兼馬丁）陸續相繼ぐもの、宛然東海道に於ける舊大名が參覲交代の行列を忍ばしむ。されど斯の如きは、此の旅行上已むを得ざる結果にして、何人と雖も亦然らざるを免れざるなり。實に其の準備の仰々しき丈け、該山跋涉の如何に困難なるかを證明するに足らん。新疆印度の商人、同山を通過せんとするには、皆隊を組み、名づけて「キャラバン」と稱す。是に於てか予は一面、又其の「キャラバン」然たるものなりとす。

午前六時二十分、陳協臺、張都司を始め、其他數名の人に見送られて發程し、八時オーターンチボク（人家約二十五）に小憩し、九時三十分葉爾羌河を渡る。河幅約千米突、流水三

條中一條渡船せざるを得ず。常に船三隻を備ふ。減水期には騎渡すべしと。此河又玉河と稱す。蓋し玉石を出すを以てなり。此夕、坡斯坎に到りて投宿す。行程約十里。坡斯坎は人家約百戸、税局、驛傳、官店及民店大小六戸を有す。沿道、路側に並水あり、且つ大渠水あり道路と並行するが故に、水田耕地多く、道路亦良好なり。

カルガリーク

十六日午前五時五十分發、七時シャンベー（人家約三十戸）八時イーコスー（人家約百戸）九時過聽雜阿布河を徒渉し、十一時サイセンベ（人家約百戸）に休憩午食し、午後四時カルガリーク即ち葉城縣に着す、縣官易潤痒來りて途に迎ふ。城内漢人八十四戸、漢回二十六戸、纏頭回五百二十五戸、又縣管轄四鄉八扎の總戸數は、漢民二百四十八、纏頭二萬七千八百三十五、入籍安集延人二十八戸、以上總人口男女大小合せて十二萬五千四百十四人を有し、馬隊一旗（三十五人にして内漢人十五人纏頭回二十人）駐屯す。物産は羊毛布（ビルバークと呼ぶ）駱駝毛布（ユンチエユメンと呼ぶ）羊毛、果物、絹糸等とす、氣候は十一月下旬に凍氷し、三月に解げ降雪は年中皆無のこと有りと云ふ。沿途部落相望み、稻田少く、火田多し。聽雜阿布河西方約二千米突間は、鹹帶に屬せり。是日行程約十四里餘。

## 二、葉城縣より喀喇崑崙嶺に至る三道

予が採りし道路

此地より喀喇崑崙嶺に到るには三道ありて、其の東なるを桑珠道（サンジュー）、其の西なるを可々牙道（コキヤーク）、其の中間なるをキリヤン道と稱す。該三道中、可々牙道（コキヤーク）を最良とす。予は即ち其の道路を採りし者にて、以上三道は、喀喇崑崙嶺北、一日程の處に於て相合す。いでや可々牙道の概要を左に掲げん。

ベシテレクの一軒家

十七日午前六時三十分出發、前途は愈々崑崙山脈に迫りたり。行て七時五十分に至る頃、道路は沙漠帶波狀地と變じ、左側は耕田、右側は約二千米突を隔てゝ耕地あること約一里半、遂に全く沙磧地と爲り、十時十五分の頃、兩側砂崖數尋に及び、相距る約二千米突内外の廣谷地に入る。十二時以降細沙地に入り只處々草木の點々相生ずるを認む。午後零時四十分擺什鐵列克に投宿す。此地は憐れ一獨立家屋あるのみなり、行程約十里とす。

コキヤー

翌十八日午前六時出發、十時十七分ウリュクハキ（人家一戸）に着す。此間約一里、谷地漸く開けて、楊柳相連り、其の東方遙に一連の部落を見る。即ちユズバシ、ユデリキ、ウシヤクバシの三村にして、人家併せて約五百、人口約三千、毎週一回市を設くと。九時頃又谷地と爲り、十時過始めて人家に接し、尚ほ行く一里餘、午後零時十五分、可

クの滯在

可牙に入る。人家約六十、市の開設なきも、馬糧の調辨は、葉城縣よりは此地に於てするを廉且つ便とするが故に此に一日滯在せり。（因に記す調辨せし馬糧の大分は此の地にて雇用せし三頭の駱駝に駄し殘餘は各馬に分駄せり）氣候は十月始めて氷を見、三月に至りて解く、四月に下種して、七月以下九月に亘り收穫す、降雪は深さ一尺五寸内外、雨期は六月より八月間なるも前後約十回位に過ぎずと。是日行程約十里餘、氣候一變、俄に冷氣を感ず。

二十日午前六時三十分發、約一里半、ブサ（人家十五）に到り、小憩三十分時、其れより約十四里アクメチに着す。蓋しブサ附近は、谷稍々開けるも、他は狹谷沙磧地を爲し、沙山左右に夾めり。アクメチに近づくに隨ひ沙崗と變じ、其の低地には、茂々草叢生し間〻耕地ありて牧羊多く、處々緩傾斜の坂相踵ぎ且つ岩石少なからず。アクメチは人家僅に五戸のみ。

アクメチ

三、崑崙の第一次嶺アッコラムを越ゆ

二十一日午前七時出發、之を第六日の行程と爲す。路は次第に崑崙山中に進みて、愈々嶮惡の狀況を呈せり。是日は前途の第一次嶺、アッコラムを超えざるべからず。地は是れ無人の境河は爰に數十回の徒渉を已むなくせしむ。

駄載を豫備馬に分つ

アクメチより南進約三里、峩々たる一山、天に朝するもの、是をアッコラム嶺と爲す。海拔實に九千二百二十尺、昇降の坂路共に峻嶮なり、就中降坂は登坂に比して岩石多く、固より馬上通過すべくも、あらず。因て駄載の重きは豫備馬に分ち、叱々相戒め、前後約二時間を要し辛うじて人馬共に無事に其の昇降を畢れば、忽ち聽雜（ツツナ）阿布（ブ）河の上流を溯らざるへからず、渡河十數回、深さ往々馬腹に及び、曩には全身汗を流しゝるも、是に至つて肌膚粟を生じたり。而して其の左右なる山々は、綠泥片岩の大部に大理石を交ゆ。斯て午後三時約十一里の行程を以て、哈拉斯塘（ラスタン）の空牆に投せり。

渡河十數回、深さ馬腹に及ぶ

ハラスタンの空牆

四、クデマザール附近太古の雪

二十二日、前夜來少しく增水の爲め、暫く發程を見合せ、午前八時五十分出發す、渡河十數回、水、馬腹を超えて頗る困難を極めたり。路は是れ岩石道、左右は千尋の絶壁を仰ぎ、花崗岩、片麻岩、綠泥岩多く、往々石英、雲母を含有す。午後三時三十分、行程約十里、クデマザール又の名タルラクに入る。此地戸數八、凍氷は十月よりし、解氷は六月とす、下種は六月末より七月初めとし、收穫は八月末に起り九月初に畢る、附

住めば都

近には、豹、狼、熊の類少なからず。雪は谷間に於て積むこと約一尺五寸、山上三尺餘、附近の山雪、終歳消ゆること無く、實に太古よりのものと云ふ。

斯る深山幽谷の間に棲める彼の八戸の人心中果して如何なるや。さるにても住めば都の趣味あるか。前後は共に無人の地、俯仰總て是れ山是れ谿、況んや四時積雪に繞らさるゝをや。言ふこと勿れ彼等は稍々獸類に近からずやと。其の猫額大の耕地は、即ち彼等が生命にて、此の耕地在つて以て彼等あるを思はゞ、彼等の思想慾望の程、蓋し察するに餘り有るべし。思想淺く慾望薄き彼等は、其の實際の如何は知るに由なきも、一見質朴單純なる、恰も嶺上の雪の如く、又太古の人なるが如し。

トシユクガーン

## 五、是より無人の境に入る

二十三日午前九時二十分發、八里餘の行程を以て、午後三時吐什克塔希に着す。途上依然溪流を渡る多きも、溯るに從ひ水量次第に減少せし爲め騎行極めて容易と爲れり。路は尙ほ岩石道を繼續し、且つ傾斜緩なるに因り、大に勞苦を感せざりしも、是日より全く無人の境と爲れり。午後忽爾冷氣を催し、夜に入りて小雪積ること五分餘なるを見る。又植物の眼に入るもの、漸次稀なるに至りたり。

植物漸く稀なり

## 六、燃料缺乏して馬糞を焚く

二十四日、是日氣溫、午後四十八度より遂に二十五度に降りたり。午前十時三十分發、行程五里半、稍々僅少なりと雖も、明朝過嶺の難あるが故に午後二時三十分、エンギ達坂の北麓に幕宿す。道路は依然岩石多く傾斜次第に急を告ぐ。且つ是日は燃料缺乏の爲め遂に馬糞(乾固せるもの)を焚くに至り、殊に空氣稀薄と爲りて、呼吸少しく惱むを覺ゆ。

エンギ嶺北に幕宿

空氣漸く稀薄

曩には新疆省會以東の各地に於て、馬糞を以て燃料とするを耳にし、心私に其の貧寒なるを憐みたり。以爲らく燃燒異臭に堪へざるべく、從て其の之に依りて煮られ或は炙られたるもの果して如何なるか、其の器完全ならざるときは、石炭を用ひてすら、薫染の臭氣厭ふべきもの有るを免れざるにと。然り昨其の丁零なるを憐みし身は、今や之を親らし、而も之を甘んぜり。燃燒臭氣の敢て堪へ難きを思はざれば、煮え來れる湯は、眞に甘露の美を覺ゆ。熟々人は其の境遇に因りて、何物をも滿足し得べきの理を觀ずるや、深し。

四面は巍峨たる山嶽を以て圍まれ仰げば天の一部を見るのみ。冷風の颯々たるもの、谿流の潺々たるもの有るの外は、何等耳にする所なし。地は是れ萬里の異域、而も世界の高峯崑崙山中に在り、隨行の人亦其種を異にす。恃むは唯一の馬匹なるが、此れすら尙ほ恃むべくして恃むに足らず。此の如き狀況に處し、馬糞を焚て食を取る、宛然敗軍の將、四面楚歌を聞くが如く、彼を思ひ此を思へば感慨實に無量なるもの有り。

## 七、崑崙の第二次嶺エンギを越ゆ

二十五日、氣溫は日出前三十四度、午後一、二時の交は六十度を示せり。午前七時發、十時四十分エンギ達坂に掛り、午後三時無事クランウルテに着す。此處はエンギ嶺よりする南下水と、喀喇崑崙（カラコルム）嶺より西流する葉爾羌河の相合する地點に當る。エンギ嶺は昇降坂共に急峻なるも、南路は北路に比すれば稍々緩なりとす、路は岩石道變じて礫石道と爲り、山は千枚岩、礫岩及石灰岩を以て組織せられ、其の南谷には、昨年來の大氷塊尙ほ殘りて厚さ六尺に餘れり。嶺の前後更に草木なく、クランウルテに到り始めて少許の灌木を見しが、牧草は全く缺乏す。是日行程約十里。

クランウルテ牧草絶ゆ

エンギ嶺は其高さ幾許なるを知らず、之を前者アッコラム嶺に比すれば、高く且つ嶮、惟ふに其絶頂は、約一萬五千尺を下らざるべく、千山來り朝し、萬嶽其の麓に伏す。蠶々半空に聳へて、而も道路上礫石狼藉顚倒せんとするもの幾回なるを知らず。空氣は稀薄にして呼吸に惱む、況んや嶺上風あるを常とするに、是日は西北の風强く吹き荒みて今にも呼吸全く塞り、忽ち閉息せんとするの感あり。啻に閉塞せんとするのみならず、心緩めば人も馬も吹き浚はれんとするの恐れ有り。人々相戒め、或は匍匐し或は休止し、辛うじて嶺頂を越え畢るや、風力大に其の威を減せしも、この度は直截一線の急降坂、又惴々として顚倒せんとすること幾數回、足を置く毎に必ず自ら蹈み固め而して後ち敢て歩を移すもの、蓋し該嶺跋涉の實況とす。

嶺上の强風

直截一線の急降坂

## 八、獰惡の山鴉

二十六日氣溫は午前二十六度、午後は四十八度を示せり。午前八時四十分出發行程約十里、午後三時ギルギスチャンガルに到る。但し昨日迄は、始終南方を指せしも、本日より左折東行することゝ爲りて葉爾羌河の上流を溯る、水深膝を越えず河岸には例の生木の儘焚き得べき「ユルゴン」即ち紅柳と同質の灌木「バルゴン」と稱

ギルギスチャンガル

灌木「ベルゴン」

する一灌木あり、頗る旅行者に便を與ふ。道路は沙礫なるも緩斜にして騎行容易なり。

明れは二十七日、前半曇り後半晴る、氣温は午前二十四度、午後は五十度に昇れり。午前九時發程、昨日と同じ狀況を以て、約十一里、午後四時エゲルサルテに到着す。沿道の山嶽は、概ね綠泥岩、石英岩より成る。是日鷲及黃羊を認め、又山中の特產なる鴉を見たり。其形我國のものに倍し、性頗る獰猛、其嘴甚だ鋭く、家猫の怒叫する如き聲を發し、澁濁なる鳴音は聞く者をして憎惡の念を起さしむ。若し旅行者の一團、其の人少なきときは、或は頭上高く飛揚し、或は駄馬の背に下り、時としては驢馬の眼を狙ひ、一啄忽ら盲せしめ、遂に之を殺して其肉を食ひ、常に旅人の死屍及斃馬の肉を餌と爲すと云ふ。

エゲルサルテ

驢馬の眼を狙ふ

二十八日、氣温午前は二十五度、午後は五十一度に達せり。午前九時五分發、午後四時三十分行程十三里、カブルンに到る。沿道の狀況は昨日と同じきも、溪水次第に減少すると共に、空氣益々稀薄と爲りて、水は沸けども粥煮へず。宜なる哉地は既に海拔一萬尺を超ゆること數千尺なり。前途は愈々至難に向ひて益々慘澹の光景を現出せんとす。

カブルン

水沸けども粥煮へず

アクスターク

二十九日氣温午前二十九度、午後四十三度、而して前半微雪を降らし、後半曇天と爲る。午前九時二十分發、午後四時三十分アクスタークに着す。行程約十里半。沿途谷漸く廣く、左右の山次第に低くなり來りて、黃土又は赤土と石灰岩より組織せられたり。

空腹を感ぜず

**九、食量は半減、肉食は嚴禁**

是日より食糧は之を半減し、且つ肉食を嚴禁すべく馬夫より注意せらる。惟ふに營養十分なるときは、却つて呼吸促迫、且つ鼻出血（出血のこと第十六日行程に詳なり）の恐あるに因るならん。減食は獨り人類のみに止まらず、馬匹皆然りとせり。而して毫も空腹を感せず、更に食慾を催さゞるもの、一に空氣の作用に因らずんばあらず。空氣の稀薄作用が直接斯の如き現象を來すに及んでは、其の動作上に於ても、亦何等の影響する所なくんばあらざるなり。即ち其の恐るべき影響は、所謂高山病を惹起するに在りて存す。

高山病

高山病の惹起は、歩行の如何に在り。歩行の如何は、爲し得る限り緩歩徐行する

を可とす。固より空氣の稀薄は、呼吸を促迫して、濶歩急行を許さずと雖も、若し血氣に任すれば亦爲し能はざるに非ざるべし。現に同行せし新疆土人の二少年中一はエンギ嶺、一は喀喇崑崙嶺超過の際、少しく急行したる結果、即時大熱を發生し既に危篤に瀕したりしも、幸ひ予が持藥其効を奏して、纔にレーに着するを得たり。

騎行せば一に馬の進止に任せ、決して鞭を加ふべからず。歩行せば病人の想を爲して成し得る限り徐歩すべし。呼吸一層迫り、動悸一層高ぶり來れば、既に高山病に犯されたるものなるや未だ知るべからざるも、動悸一たび高ぶれば、容易に沈靜に復せず。其の沈靜に至らざれば、即ち既に高山病に犯され居るなり。歩行に就ての注意は、以上の如くなるも、尙ほ更に注意に注意を要すべきは物に動せざることとす。凡そ物に動ずるときは直に動悸を高ぶらしむ。故に斯の如き際は場所の如何を顧るの遑あらず、直に其の處に座し或は伏臥し、勉めて沈靜を保つべし。

高く路は嶮しく、一歩つゝ固く足を定めて敢て歩を移すも、其れすら動もすれば顚倒せんとするは一般山道の狀態なれば、此際特に注意して躓かず、轉ばず、所謂物に動ぜざるこそ肝要なれ。

「キャラバン」の駄數と減耗率

動物標本の陳列場

可憐なる癩馬

## 一〇　荷物の放棄と斃馬の猥藉

毎年當山道を經過する所の駄獸は、其數約二千頭を下らざるべく、内二割は斃死すと云ふ。而して「キャラバン」は少くも二十頭、多きは六、七十頭の駄馬を一團として通過するも、萬一天候の劇變に遭遇すれば、一隊殘らず全滅するに至ること有りと。現に各嶺の前後には、馬匹の死屍、猥藉相枕み、又嶺頂嶺下、荷物の放棄し在るもの相繼げり。斃馬は其の古きは既に白骨と爲れるも、新しきは依然狀態を變せず。惟ふに空氣の乾燥、氣候の寒冷等に因り暫く腐爛の狀を呈せざるなり、宛然動物の標本陳列場を見るが如き感あり。斃馬は已むを得ること乍ら、殊に可憐なるは負傷駄載に堪へざるか或は罹病又は疲勞の極、駄載に堪へざる廢馬の尙ほ未だ死に至らず、又餓狼鷲鴉の見殘す所と爲りて、食ふに草なく、飲むに水なき邊、眼窪み肉落ち、嘶くに力なく、歩むに氣盡き、彼處此處に悄立し、通過の旅客を見送るの狀は、人をして惻隱の情に堪へざらしむ。彼は好んで負傷したるにも非らず、求めて疾病に罹りたるにも非ざるなり、其の負傷し疾病に罹りて遂に廢馬となりし所以は、一に其主人に盡したる「不幸の賜」たるに過ぎざるなり。主人敢て情なきに非ずと雖も、

木乃伊取は木乃伊となる

此險此難を如何せん。況んや人情の常として、辛苦は辛苦丈け、其の進退を共にする場合は縱ひ一禽獸に對するも愛情豈異らんや。彼も此も畢竟已むを得ざるの結果のみ。

放棄せられたる荷物の中には、或は商人のものも有らん。或は普通旅客のものも有らん。或は貴重の物品も有らん。或は稀有の資料も有らん。堅く梱縛せられたる是等の荷物は、其の幾年前の放棄に係りしや、得て知るべからずと雖も、何人も手を下すこと無ければ、又何人も一顧をだに與ふること無し。言ふ勿れ無慾も亦甚しからずやと。何ぞ料らん敢て關せざるこそ却つて大慾なれ。『木乃伊取は木乃伊と爲る』若し小慾の爲め。之を搬送せんとせば未だ一日を出でざるに之が爲め遂に從來携帶せし總ての荷物をも放棄せざるべからざるに至るは、瞭々として火を觀るよりも明かなりとす。斯る有樣なるより觀察するも、如何に此山道通過の困難なるを知るに足らん。

**一一、狼群に遇ふ**

九月三十日午前六時三十分出發す、時に天半は曇り、寒暖計正に三十度を示せり。

第十五日行程バクソンプラクに達す

絶景も頭痛に奪はる

行くこと數町ならずして、忽ち前路に十數頭の狼群を見る。彼等は昨夜來斃馬の肉を齧りつゝ、夜の明くるをも知らず尙ほ飽食せんとせしに俄然予が一行人馬の音に驚き周章して幽谷に奔り去り、忽ち姿を匿したりき。狼狽とは是等をこそ云ふらめ。蓋し此山中を通過する「キャラバン」は拂曉の冷氣酷烈なるを避くる爲め、通常午前九時前後に發程するを例とせり。然るに是日は前程遠く、且呼吸促逼の爲め行進の遲滯するを慮り。例に反して早朝出發せしが故に、斯く狼群を驚かせしなり。

是日よりは右折南行し、アクスタークを距る一里弱の處にて桑珠(サンジウ)道路と相合せり。河谷は急に一千乃至四千米突間に擴がり、前日來の狹谷は一變細沙の廣谷を現じ、左右の山々、又丘阜狀と爲り、層巖危石、棘峙錯列、間々危峯の雪を戴く有りて、奇怪萬狀、神工鬼鑿の妙を極め、柳州を地下に喚起するも恐くは其眞景を寫す能はざらん。雄大奇絶の風光は、之を我國内に求むるも、到底得べからざるもの有りと雖も如何せん空氣の稀薄は、著しく頭痛を感せしめて、景色を賞し、風光を愛せしむるの念を奪却し盡せり

山は概ね赤土黄土に硅石を混じ、往々硅石の危巖谷中に峭立するを見る。途上鷺、鶴、鴿類及例の鴉等の飛べるを見たり。蓋しエンギ嶺超過以來、頭重く呼吸迫りしが本日に至りて頑健なる馬夫すら、尚ほ且つ頭痛を感ずと聞く。乘馬の漫歩は稍々可なるが、徒歩は呼吸切迫して、近距離も亦續け得ざりき。

午後は半晴、氣温四十三度に達し、二時二十分バクソンブラク（或はクズルダーグ）に着す（ベクソンブラク）行程十三里弱。道路は緩なる上傾斜を成し、渡河少く、且つ水皆淺くして、難路も亦稍々夷とすべし。

## 一二、山道第一の高嶺喀喇崑崙の超越

十月一日、氣温日出前二十三度、日中四十三度、日沒二十四度（天幕内三十三度）。

愈々本道中の最高嶺、海を拔くこと實に一萬八千五百五十尺（一萬八千五百五十尺）なる、喀喇崑崙嶺を通過せざるべからず。既に氣は重く、呼吸苦しく、頭痛亦堪へ難きに、此上尚ほ幾千尺の絶巔に登らんか、其狀況果して如何ならん。縱ひ如何なる困難の身に迫らむも、他人の能く耐へ得べき限りは、我豈獨り堪へ得ざるの理やあるべき。祈るは只天候の異變なからんことのみ。

午前九時十七分發、緩歩徐行、東の方昇坂に向ふ。傾斜甚だ急ならざるも、一歩一歩呼吸迫り、迫ること甚しければ休憩し、休憩暫時にして又歩を移す。呼吸は尚ほ斯の如くにして、漸く繼ぎ得べきが、頭痛は到底如何ともし難く、耳鳴り眼眩まんとし、人馬相共に鼻腔より血を滴らすに至る。聞くならく人水に溺れ、呼吸次第に迫りて鼻腔血を出すに至れば、將に絶息せんとする時なりと。水陸多少の差異あるや否やを知らずと雖も、今一歩を進めなば、將に絶息せんとするの想あり。食慾盡き、渇氣絶へ、身は是れ壯健なる人なるも、而も大病の體なり。歩むも歩む如くならず進むも進む如くならず、宛然夢に似たり。左右を顧みれば、同行皆顏色なし。馬夫は嶺下に於て駄載を改裝す（急坂を昇降する時毎に然り）予は此間を利用し勉強して撮影を試む時に午後四時、暮靄既に起り光線不十分なりしを遺憾とす。

人馬共に鼻腔より血を滴せり

壯健の人も大病の體

絶頂の撮影

斯して遂に絶頂に達するや、氷雪全く消えて更に痕なく、西風強く吹いて暫くも停まるべからず。されどそも此處は何處、實に予が出發出來、果して通過を全ふし得べき否や、若し通過し能はずとせば、予が此の旅行は、空しく九仞の功を一簣に虧くの恨あらしむべき最難所と懸念せし、世界の高嶺崑崙山道の最高點にあらずや。

西風強く暫くも停まるべからず

怖き物見たしの俚諺に漏れず、一日も早く見んことを欲し、又一日も早く超えんことを欲したる甲斐ありて、今や身は幸に此絶頂に達せるを、如何に呼吸逼れりとて爭で容易く去らるべきや。眸を放てば四圍の萬山は、開闢以來幾千年間堆積し來れる雪に埋れ、混沌として蒙昧未開の境に眠れる蠻民を代表するものの如く、密雲低く白雪と相接觸し、荒涼寂寞極り無く、唯々斃死の人馬を待つ數羽の鴉、啞々近く頭上を飛翔する有るのみ。風益々強く寒愈々甚し。俄然戰慄肌膚粟を生ず。匆々杖を降坂に曳く。

辛苦間關夏又冬。　龜茲月氏入觀風。
今朝聊達斯行志。　立馬崑崙第一峯。

又

立馬崑崙第一峰。　雲煙萬里豁心胸。
吾生四十猶漂泊。　慚此巍然羣嶽宗。

登坂は緩且つ短く、降坂は險且つ長し。棒の如き兩脚を踏み締め踏み締め、且つ止り且つ下り、午後四時五十分、先づ第一の危險界を跋渉し畢り一行期せずして相顧み、破顏一笑、互に祝福す。爾後谷に沿ふて東南に向ひ雪を蹴り氷を踏み六時二十分チヨジヤンチルガに到着せり。行程約十一里。此日嶺北に一泊の豫定なりしも、天候好良なりし爲め、嶺南に達するを得たり。

破顏一笑互に祝福す

回顧すれば、昨年十月十三日、北京出發以來、始終清國の地に客遊するもの一箇年、或は天山の南北路を過ぎ、或は戈壁地帶を夜行し、險を踏み危に臨み、纏頭、蒙古と親み、哈薩克等と交りて、復た得べからざるの趣味感興を與へられ、今や清領を辭して正に英領に入る。前途尙ほセシル嶺、カルドン嶺の氷河通過及ヒマラヤ山脈の跋渉せざるべからざるもの有りと雖も是に至つて予が目的は既に十中の九を遂行せり由來頑健を以て自任せし予も、人力不可抗の一現象たる、空氣稀薄の爲め、予をして暫く大病人の如くならしめたり。されど是れ一時の現象に過ぎず。身體は依然鐵の如く石の如し。此の夕人馬共に少しも食を取らず。敢て警戒するに非ざるも、食慾皆無なるに因る。敢て飲食せずと雖も毫も飢渴を覺えざるは、蓋し空氣の作用ならんが亦以て奇と爲すべし。

清領を辭して英領に入る

人力不可抗の一現象

## 一三　デプサン嶺の超過、水絶えて氷を煮る

氣温零度に近し

十月二日是より英領印度に屬す。然れども、未だヒマラヤ山脈に非ずして依然崑崙山脈なり。氣温は日出前零度に近く、日昇りて始て六度、夕刻には三十一度を示しぬ。朝來頭痛甚しく、人馬共に食進まず。

頂上の平地

午前七時二十分發、今日亦デプサン嶺を超えざるべからず。十一時三十分、南折して愈々該嶺に向ひ、例の如く大病人の狀態を以て午後二時三十分全く超過し畢りぬ。(嶺南より東南に進む)嶺は喀喇崑崙山と同じく、登坂急ならず。降坂は稍之に反せり。頂上は大波狀の臺頂を爲して、平地を行くに異ならず、依然西風强し。昨日來山々概ね花崗岩より成りしも過嶺後は俄然硅岩、泥岩と變し花崗岩は僅に處々に散見するに過ぎず。午後六時三十分、行程十五里餘、デプサンに到着。

到着、食氣を生す

此の夕、人馬共に少しく食氣を生じ、水絶えて氷を煮る。

**一四、** 草根を掘り燃料と爲す

三日西風甚しく、氣温は午前十九度、午後四十七度幕内朝三十度を示す。午前七時三十分出發、路は十時頃より、十一時三十分頃に至る間は、中腹道西方を指し、次で午後零時三十分に至る迄は、南方を指して漸次に下り、次で又西行廣谷を溯る傾斜

崑崙山道の最高嶺喀喇崑崙嶺（夕刻嶺北より之を望む下嶺は横に馬鞍はるはるなり）

セシルル嶺　（嶺北より之を望む）

ポツトの人の風俗

同上

チョンタ、シは大石の意

駒を停めて撫然たり

セシル嶺北の幕營

稍々急、行程八里餘、午後二時チョンターシ（チョンターシは大石の意、此地路傍に大石危岩あるを以て名つく）に到る。附近南側の山は、花崗岩多く、北側は硅岩泥岩依然たり。

道路は實に海拔一萬五千尺内外の高さにありて、頭痛及呼吸の促迫、食慾の不進、前日と同じ。駄馬總數十二頭中二頭は坂路を辿る際、鼻腔血を出し、甚だ疲勞したるか故に、駄載を解き、他の健馬に分載し、一人を附して後方より徐々隨行せしむ。路傍に一斃馬あり、漸く近けば頭を擧げ、一行を注視して哀を請ふものゝ如し。何人か其用ゆべからざるを見て、遺棄したるものなり。思はず駒を停めて、憮然たるもの之を久ふす。されど救助の手段なく縱し救助したりとて、再び起つとは思はれざれば涙を揮ふて之を棄つ。是日燃料缺乏の爲め、草根を掘りて薪に換ふ。

四日南風强く、氣溫は午前二十一度、午後は五十七度を示す。午前八時四十分發、西上一里餘、其間右側に小池あり。次で南下二里餘印度（インダス）河の上流に出づ、水淺くして渡河容易なりき。次で急坂を上りて、セシル嶺北の中腹に幕營す。蓋し明日はセシル嶺外、二箇の小嶺を超へざるべからざるに、該三箇の嶺上には氷河ありて、早朝氷面尚ほ堅き時に於て跋渉せざれば、日中は幾分か溶解するが故に、滑走の虞あ

印度河上流の谷地

ればなり。沿道、南下後の兩岸は黑色片麻岩の絕壁を成し、谷中には硅石多し。又印度河（インダス）の谷地は赤綠泥岩、花崗石、硅岩より成り、嶺の附近花崗岩の大部に石英を混ず。此地にて印度の「キャラバン」に會す。其一行駄馬三十餘頭、人十五六名、葉爾羌に向ふ者なり。着後幕營地の西側高處より嶺を撮影す。

セシル嶺頂一萬七千八百尺

**一五**、嶺上氷河の險、池畔氷層の美

五日氣温午前二十一度、午後四十九度、午前七時五十分發、十時二十五分セシル嶺の頂上に達す。該嶺は海拔實に一萬七千八百尺、氣温は此に於て十九度を示すに至るも、幸に風少く、午後零時三十分、全く超過し畢りし後、南風俄に强く起れり。眞に幸運なりしと謂はざるべからず。

氷河の流動

氷河は即ち嶺上に在りて、其の河と稱するは稍々不適當なるに似たるも、試に穴を穿ち棒を樹て、或は何等かの手段に因りて目標を附し、日を經て之を檢むれば、其目標は必ず位置を異にし在りと。即ち肉眼に其流動の狀を認め得ざるも、實は絕へず流動しつゝありと云ふ。果して然らば氷河の名も復た訝るに足らざるなり。若し夫れ氷上平滑にして、恰も鏡面の如くならんには、爭か能く徒涉し得べけんや。花崗岩の碎片處々に露出し、一見其の何處より歩を進めんかと躊躇せしむるも此の花崗碎岩の露出するもの無かりせば、如何に愼みて身を持するも一進一滑顚躓相踵ぐや必せり。況んや頭上數丈の氷崖は、時に石を落し來るをや。其危險言ふべからず。固より騎行すべくもあらず、されば、徐々たる歩武を以て呼吸を養ひ、五歩に休し、十歩に憩ひ、辛うじて此の難關を通過し畢れば、頭痛一層甚しきを覺ゆ。蓋し嶮路を跋涉中は復た頭痛を思ふの暇なかりしなり。

五歩に休し十歩に憩ふ

一大三稜鏡

大嶺を過ぎ來れば、相踵で二箇の少嶺あり。其の大嶺と小嶺の間に、一小池を湛へて、池畔は氷層相重なるもの數十尋、玲瓏青玉を湧出せしが如く、太陽の之を直射するや、忽ち五彩の光を放ち、紫玉、青玉、珠玉、黃玉燦々相映じ、爛々相照し、一彩は一彩と合して一彩を作り、更に一彩他彩と合して別彩を作る、紫玉は忽ち白玉と變じ、白玉忽ち綠玉と化す。大凡色彩の有らん限りは、光線と視線との作用に因て、千態萬狀一ならず。今しもセシル嶺の超過、氷河の險に、心神共に疲勞せし一行は、此の奇絕快絕の美觀に打たれて、恍惚たること稍々久し。

ツーチー

斯て午後二時四十五分、行程約七里、ツーチーヤイラクに到着せり。此處も亦燃

ヤイラクに於ける馬匹の喜び

料に供すべき物なきも芋々たる雜草處々に生じ、久しく綠葉を見ること無かりし眼には、斯の如き雜草も尙ほ懷かしき心地す。況んや數日來秣を食はず殆んど糧を絶ちし馬匹の喜び如何ぞや。右往左往嬉々として草を漁り、清流に飲する樣甚だ可憐なりき。

初めて無人の境を脫す

灌木「チーハン」

## 六、コーロン嶺の超過、電光形の坂路

六日氣溫午前十九度、午後は驗溫を怠れり。午前八時三十五分出發、午後二時十分コーロン嶺を超越す。其の昇降坂共に頗る急なるが故に幅約二米突の路を電光形に屈折せしむ、是に於て水平距離約二千米突なるも昇降坂は合して約六千米突に延長せられ、其昇降に約二時間を費せり。

嶺を降れば氣候頓に一變して、暖和と爲り、呼吸も始めて促迫せず、從て頭痛漸く去り、元氣大に加はる。但し耳鳴のみは數日の後まで癒えざりき。特に溪流の兩岸には「チーハン」と稱する一種の灌木、即ち其葉縱に似て刺多く、黃紅色なる珠數形の酸味ある小果を結ぶものなり又其の鬱蒼たる間に「ポット」人の家屋點在するを見しときは、一種言ふべからざる快感を覺えたり。況んやトシユクターシ出發以來無人の境に在りしもの十數日、其間千篇一律索寞危險の山道に厭きし際に於てをや。蓋し「ポット」人は、是より以南、レー一帶の山間に住居する土人にて、喇嘛教を奉し、農を本業、游牧を副業とし、服裝風俗共に古代の趣を呈す彼等特殊の言語を有するも葉爾羌カシミヤの中間に介在して彼此に往來するが故に雙方の語を解する者尠からずと。

「ポット」人の部落

第二十二日の行程　バナメッキに宿す

渡以來第三回の入浴

谷に沿ふて東行午後六時十五分、行程八里餘、タクシャー（人家約五十）に到着す。

## 一七、崑崙山中バナメッキの溫泉

七日氣溫午前四十度、午後六十二度、午前九時二十分出發同十時二十分、行程僅々一里餘を以て、バナメッキに到着す。蓋し此地人家僅に十五戸を有し、荒凉たる一寒村に過ぎずと雖も、溫泉の湧出あるに因り特に二日の滯在を爲せり、此行、渡清以來入浴し得たるもの前後三回、其第一回は臨潼の華清宮溫泉に於てし、第二回は烏魯木齊の蒸湯に於てす。此地の溫泉は無味無臭、熱度亦通常にして「チーハン」及楊柳深き處に在り。聞く前途尙ほ數個の難所ありと云ふも、今や危險界は七八分經過し盡し、世界に有名なる崑崙山脈中に於て清國の垢と英領の垢とを同時に洗ひ去

「ポット」族の風俗

る、豈快事ならずや。

此地は凍氷十月に始まり融氷は三月とす、夏雨多しと。「ポット」族は、男子の頭は周圍を剃り辮髪すること、恰も支那人の如く、女子は垂髪數條に組み兩鬢に楕圓形の黑羊毛を結着し、頭上に幅約二寸の赤革に綠寶石（四藏産）を數列に附着するものを戴き、之を後頭部に垂れ、甚だ異樣なり。男服は白衣赤綠（羊毛）女服は濃蝦茶色にして、共に毳氈（ブル）と稱する粗絨（四藏産）を以て製す。窄袖左衽、束帶し女子は袴樣のものを穿ち、頸飾、耳環、腕輪を用ひ、男子は間々喇嘛服の如きものを着るを見る。家屋は石壁平蓋の長方形にして、方窓を穿つ。故に遠く之を望めば、洋屋の觀あるも、其實甚だ粗造なり、床下を高くして、牛馬房に充てられ、不潔甚し。

九日、氣溫午前四十三度、午後六十三度、午前九時四十分バナメッキを發し溪流に沿ふて東下す、小坂あるも概ね平坦、兩岸小部落點在し「チーハン」の白楊と混生するを見る、午後二時二十分、行程八里餘、タガルに着す。此間沿道花崗岩、綠泥岩、片麻岩多し、同村は戶數僅に十五のみ。

十日午前九時三十分發、東下約一里にして右折溪流に沿ひ、南に上りて、午後三時カルサルに到る。此處は人家僅に六戶、官店の設け有り。而して其の此に入る前、約二里餘の處に吊橋を架す。蓋し同河は、セシル嶺の北を東流圍繞し來りし印度河なり。沿道花崗岩多く「チーハン」「ユルゴン」楊柳等叢生し、小部落處々に點在す、氣溫は午前四十三度、午後六十度。

「ユルゴン」「チーハン」の紅葉

十一日午前七時發、初め約二里は東進し、次で南に折れて上る。坂路漸次に急を告げ、且つ著しく冷氣を感ず。午後二時二十五分行程七里餘、カルトンに着す。人家十六戶、官店あり。氣溫は午前四十八度、午後は五十五度。途中紅葉せる「ユルゴン」「チーハン」等の茂生して溪流に映せるを見る、端なく嵐峽の秋色を想起し、手綱の緩むを覺えざりき。

無類の急坂

## 一八、カルドン嶺上の氷河天助の犂牛

十二日午前九時三十分發、路は進むに從ひ次第に急となるカルトン嶺の北麓に到り暫時休憩、仰視すれば、白皚々たる絶巓崎嶇羊腸たる急坂、之を上るの容易ならざるを感ず。嶺は海拔實に一萬七千五百尺、其昇降坂の急なること前後比なく、空氣の稀薄、呼吸の促迫、頭痛の甚だしき等、カラコルム嶺超過の際と異ならず。況ん

や嶺上には有名なる氷河あるをや。巖角を繞り氷上を渉り右往左折緩歩徐行、午後一時三十分、始て其頂に達す。時に氣溫を驗すれば、正に三十度を示したり。氷河は曩にセシル嶺上に於て通過せしものと、到底較ぶべくもあらず。仰けば高さ千仞の絶頂より、一分の一以上の急傾斜を成し其表面は厚さ知られぬ氷層を以て覆はる。此の傾斜の稍々緩なる處を通路に擇びて横きるなり。氷層は次第に厚く、遂に斷崖不測の谷底に走る。其幅約二町有餘、宛然無聲の一大瀑布を眼にする如く、耳鳴甚しき予は、既に轟々駢車の響を覺え此無聲の瀑布も猶ほ匈然奔霆の音を發して、跳號碎激、沫を散じて直下谿谷を搖すが如き感ありき。其の壯絶奇絶の觀は、眞に銀河の九天より落ち、澎湃白を噴き素を翻へすと稱すべきなり。

無聲の一大瀑布

殊に日光の反映は、俄然一大水晶簾を懸け、倏忽紫色の輕綃を布く。既にして或は黄、或は綠、或は青或は紺、或は濃、或は淡、千變萬化、綏々灑々、眞に天下の偉觀たり。予は如何にして之を跋渉すべきかの念は姑く心頭を去り恍惚たるもの稍々久しく、遂に其の吾に復るとき、今まで豁如たりし胸宇は、一變危懼の念を以て滿されぬ。さて如何に之を跋渉すべきか。

珠玉の大水晶簾

夫れ造物者の配劑は、往々窮境難局に際して人智以外の妙を發することを多し。即ち此氷河に對する犛牛(ヤーク)は、實に天與の一妙機關たるを失はざるなり。矮身短足、全身長毛を以て包まれし彼は、一見山羊に似て山羊に非らず、容貌骨格、正しく一種の牛族たるも、唯普通の牛よりは、小且つ矮にして、殊に足の短きと、長毛垂れて地に曳かんとするを異にせり。其の歩行の緩漫なるは、宛ら蝸牛の遲々たるが如く、寧ろ歩行すると云はんより、却つて匍匐すと云ふの適切なるを覺えたり。然れとも彼が天賦の性質は、如何なる危路難道に臨むも、決して滑走顚躓すること無きものなり。

犛牛の性能

犛牛とカシミヤ馬

レー一帶の山間に住する土人即ち「ボット」族は概ね此の犛牛を專用し、駄載、耕作共に之を使役せり。聞くならく彼の西道所謂ギルギット道よりするも、其の二三日間は、必ず彼の援助を受けざる可からずと。又此附近山中に產する一種の馬は、之を朝鮮馬に比すれば稍々大きく、通稱カシミヤ馬と呼び其の體軀の小なるに似ず、頗る靭强の性質を有すること、他地方の產馬に優る萬萬なりと雖も、所詮犛牛には及ぶべくもあらず。

窄牛舍の狹隘

氷河に於ける搬送の危險なるが爲め政府は其の前後に犂牛舍を置き、何人に對するも、賃借の便に供す。是に於てか荷物は悉く馬背より犂牛の背に移され、人も亦之に騎して此の氷河の嶮路を跋渉するなり。然れども最後の最難處約二町の間は、下乘して杖の扶けに頼り、徐々氷面の凹處を拾ひて進まざるべからず。警戒すればするだけ身體自然に堅くなり、足戰き手慄ひ、呼吸迫り、目眩まんとす。斯て中央に到る頃、唯一の頼みとせし足溜の凹處も俄然絶ゆる處約一間餘、飛ぶに翼なく、歩むに術なし、策盡きて啞然たるもの稍々久うす。突如一強力（カルドン村にて雇入れし者）進み來りて予を背負ひ、儼乎として仁王立と爲れり。鞠躬如として歩を進め、更に危惧の氣色なく、又滑顛の態あらず。或は徐々、或は小走り、辛くも此大難關を通過し畢んぬ。如何に終歳同氷河を往復しつゝ在る山人とは云へ、其の巧妙なること驚嘆の外なく、顧みれば一行中一人の續く者なし。又予と前後して、此坂路に差掛りし旅客（新疆土人の亞剌比亞メッカ參詣に赴く者）十數人は、或は氷河の彼岸に立ちて茫然たる有り、或は氷面に佇立して進退谷まる有り、彼等の馬亦或は仆れ、或は停止し何時跋渉し畢るべきか、頗る同情なき能ず。次で予が乘馬と一人の從僕到着したるに困り、徐

二町間の最大難處

強力の仁王立

喀喇崑崙嶺に雪消えセシル

カルドン嶺に氷河あるは如何

々嶺南の急坂を下り、午後五時レー即ちラダックに入る。而して荷物は夜正に十時三十分に及び、始めて予が手に渡りたり。以て犂牛の如何に遲歩たるかを知るに足らん。記し來れば單に斯の如きに過ぎざるも、其の氷河超過の危險なる、若し一歩を過らんか、滑走直に千尋の壑中に陷りて忽ち粉齏すべく、鞋下樏を施し、杖先づ固く定め、既にして、歩を移すの狀、焉んぞ犂牛の遲々たるを笑ふを得ん。僅に二町に足らぬ氷河を渉るに、強力の扶けを借りて、約二時間を費せり。惟ふに此の如き天險は畢竟渡らざるを得ざると、勢とに因つて始めて通過すべきものなり。予豈敢て暴虎馮河の勇を試る者ならんや。

讀者或は是に至り、端なく疑問を喚起するならん。何ぞや曰く、最高嶺喀喇崑崙頂上に雪消えて氷河なく、而してセシル嶺カルドン嶺上に至りて氷河あること即ち是なり。予も亦初め此の疑團を起せしが惟ふに印度大平原の熱風はヒマラヤ山脈に遮られ、天山南路大戈壁の熱風は喀喇崑崙嶺脈に阻まるゝが故に其の感應は、中間の高嶺に及ぼす能はず、爲めにセシル、カルドン二嶺は、却て喀喇崑崙嶺より低きも、斯くは嶺上氷河を湛ゆる所以ならん。

「キヤラバン」の解雇

葉爾羌にて雇ひたりし馬夫馬匹は、レー(ラダグ)に於て解雇することゝはなりぬ。屈指すれば日を經る二十有八日、起臥辛苦總て之を共にし縱ひ其の族を違へ、其の國を異にするも、予を導き予を扶けし者何等の因緣なくんばあらず。斯く思ひ來れば、分秒も亦情に堪へざるの感ありし。彼等は如何に此の山道に馴れしとは云へ、危險は依然危險にして、他の危險とするを危險ならずとすることは、よも之れあらざるべく、只其の慣れしが故を以て、險を險とし危を危として、之れに應する手段に通熟せしのみ。兎に角斯る難行程を重ねて、要求賃銀僅に馬匹一頭に就き銀二十五兩、即ち總計銀二百七十五兩に過ぎず。而も食糧馬糧等は、總て彼等の自費に係り、不幸若し其の馬匹の幾分を失ふときは、實際に得る所將た幾許か有る。是に於てか彼等の一命は、懸りて三百金内外に在るを忖度せば、到底文明人の爲し得べき業に非らず。別に臨み、予は馬夫三人に賞を與へて、聊か其の勞に酬いたり。而して予が一行の馬匹は、大に疲勞し、殆んど廢馬も同じきに至りしもの二頭を出す外、一頭の斃馬なく、且つ通辯(一箇月三十留比(印度貨一留比は我約六十五錢)の約)の高山病に罹りしのみなりしは、又幸なりとせんか。

海拔一萬一千尺上の大部落

喇嘛教の靈場

## 一九、小西藏レー

レーは山間唯一の大部落にして、カルドン嶺南の直下に位置し、海拔一萬一千二百六十六尺、人家約二百戸、一小市街を成形す。而して之が附近の人家を合計すれば、約一千五百戸、住民の大部は喇嘛教信者たる『ボット』人にて、東方に聳ゆる高丘上には、崇嚴なる喇嘛廟ありて、山中の一偉觀たり。されば此の地方は、該宗靈場の一にして、是れ小西藏の名のある所以なり。市内には一小官衙を置き、英國大尉一員(當時スリナガルに出張不在)土兵三十人許を統べて、駐在し、外にカシミヤ官吏二名あり。又電信局、郵便局、稅局等を設く。氣候は六、七、八の三箇月は、恰も我國の春秋期の如く、他は皆冬に屬す。予の當地に滯在するもの二日間共に雪を降らず。予は此の滯在休養間に於て、其の東方一日程に在る、有名なる喇嘛廟を拜觀するの豫定なりしも、吹雪の爲め果さゞりき。

予の此地に着せし時、郵便局は、一封の信書を送り來る。是れ在印度駐在官稻垣中佐のカルカッタより發せし信書なり。書中次の如く記す。

參謀本部より電命あり、貴官と共に印度旅行を爲す。依て貴官レーに到着せば

同胞の音信に接す

御一報あれ、予は貴官とスリナガルに相見んとす云々。

因て直ちに打電し、到着及スリナガル着の豫定を報知す　北京出發以來、我國人の音信に接せし事前後三回、其一は哈密にて在北京公使館附青木大佐より、其の二は喀什噶爾にて京都西本願寺大谷伯爵より、其三は即ち今回とす。萬里遠征の客異邦に在りて同胞の音信に接す。其愉快なること譬ふるに物なし。

カシミヤ商人の西藏談

此地は又西藏、拉薩府に到る分岐點に當れり。當時拉薩に住居する一カシミヤ商人の滯在せる者に就て、其の狀況を聞きしに、此地は拉薩府を距る約三箇月の行程に在りて、是より東二十日行程の處に、ガルドックと稱する一部落あるのみ。沿途水、草、薪に乏しからず、小嶺數多前途を遮るも、大且つ險なるは無く、小河數條の路上を横切るも、深且つ急なるは無く、騎行徒渉共に容易なり。旅行期は九月末以來十月初旬を最も良とす。ガルドックを過ぐれば、唯清人が黑々子（ヘイヘイズ）と稱する「ギルギス」人の氈幕處々に散在せり。該族は游牧人にして、每家羊を看守せしむる爲め、二三頭の大なる犬を畜ふ。其性頗る獰猛、爲めに彼の氈幕に近づかんと欲するときは、十分の注意を要す。

沿道猟多きも虎豹の類なし。拉薩には土人の外、漢人、纏頭回人、カシミヤ人、印度人、蒙古人等多く住み、合計十餘萬人（疑は）と稱するも、人家は約二萬（疑は）に過ぎず。商人は大抵清語を解し、土人は清人と親善なるが、外國人の來るを喜ばざるが如く、清商はカルカッタよりシキムを經て來り、カルカッタ、拉薩間は、鐵道を利用して、尙ほ二十日の行程を要す。其の途中に二箇の嶺あるも、甚だ高からず、交通容易なり。

又拉薩には、約一萬の土人兵ありて、三年前以來より、其手に連發銃を製造す。印度土人兵は英國將校之を督し、拉薩を距る五日行程、ガンヅイに約百人を置けり。該商人は喇嘛僧服用の蝦茶色絨、金襴珊瑚眞珠、布類を携行し、歸路には氈毯、茶、香料、綠寶石等を仕入れて歸る云々と。

## 第三節　ヒマラヤ山脈の跋渉

### 一、「ダック、バンガロウ」

十月十五日、氣温午前三十三度、午後五十五度、連日の降雪漸く霽れ、馬匹（七頭を雇ふ。內二頭は乘馬とす。一頭一日平均一留地）其他の諸準備も悉く調ひしに因り、午前七時愈〻レーを出發せり

土兵二名隨行し、沿途の護衛及宿泊萬端の便宜を圖れり。路は同十時の頃迄西南を指し、其れより西行印度河の右岸を下る。北は崑崙山脈、南はヒマラヤ山脈にして、其に高峰峻嶺を競ひ、中腹以上は總て白雪皚々たり。印度河谷は、此邊に於て幅約二千米突内外のみ、同五十分小坂頂に上れば、一望大起伏を成す臺地にして二三の小部落其の窪地に點在し、地質は礫碕、花崗岩大部を占む。午後三時、行程十四哩、チモーに到る。此處は人家約六十戸「ダック、バンガロウ」及驛馬の設け有り。

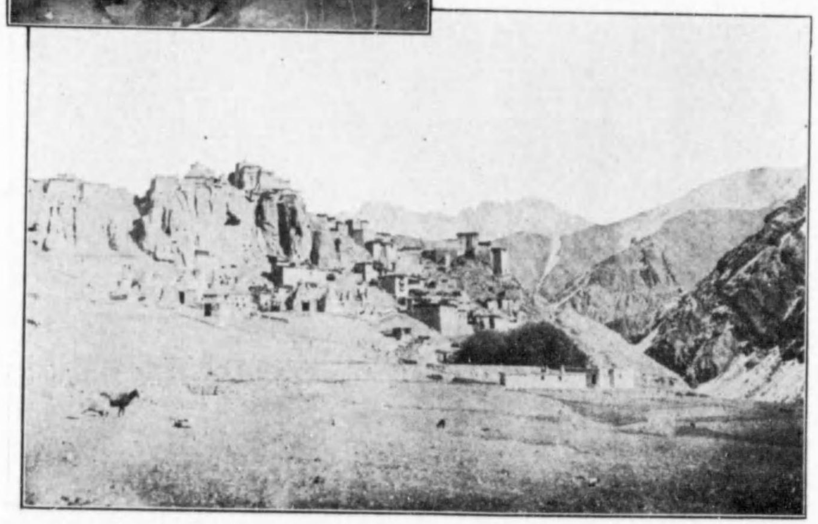
遺に英人の經營

レー、よりスリナガルに到る、各驛には「ダック、バンガロウ」即ち官設の客舍あり。其の構造は土地部落の大小に因りて、差等あるも、通常木造の洋屋にて、二三の客室を設け、室内には椅子、卓子、寢臺等の設備、其他浴室を有す。別に何等裝飾の美なきが、素より土人の陋屋に比すべくもあらず。室の内外は、看房人に依て清潔に保持せられ、旅客の便宜頗る大なり。遺に英人の經營施設に係る程ありて、轉た感服の外なし。食事は凡て自炊とし、一泊二留比内外を看房に與ふれば足る。

十六日午前七時發、一部落を過ぎ、同八時十五分、小坂に達す。坂上又臺地を成すこと昨日と同じく、同十一時三十分、稍々急なる坂を下り盡せばシャスボーとす、次

カシミヤ人犂牛に騎して氷河を渡る

レーの家屋と土人（ポツト）の婦人



ウロガンバクッダはるあに方下最（落部の人トツポ）村ルユマラ

モウルベーの大石佛

カルギルの全景

で午後五時三十五分ヌルラに宿す。行程約二十二哩、沿途左右の諸山皆禿山にして、花崗岩、綠泥岩、大部を占む、シヤスボーは人家二十三ヌルラは約三十。

十七日午前七時二十分發、同十時一部落を過ぎ、同二十五分、吊橋を渡りて左岸を下り、同十一時五分より印度(インダス)河に別れ、更に其の一支流を溯りて南行し、山腹の急坂を上下すること二所、次で尙ほ一箇緩坂を登り。坂上人家約三十五戸を有するラマユル村に投宿す。時に午後二時二十分、行程約十六哩とす、沿途部落の有る處には、林檎、杏等の果樹其他柳樹多し。ラマユル村は「ボット」人の部落なり。同人種は其住居を高處に建つるの習慣ありて、溪流潺湲たる便利の水邊に築かず。當村の如きは、殊に其甚しきものとす。

水邊を棄て山上に家す

ボトラ嶺

翌午前七時十七分發、小嶺ボトラを超え、同十一時一小部落を、同三十五分一小橋を過ぎ、其れより偏南西行し、午後一時三十分、行程約十五哩を以てボットカハルブ村に宿す。但しボトラ嶺は、昇降坂共に緩にして、頂上の路外には、三寸內外の殘雪あるを見る。沿途硅石多し。

## 二、モウルベーの古佛

ナミカ嶺

裸體佛

カルギルはレーに亞くの大部落

十九日午前七時發、同八時三十分、左折して一小谷畔を上行し、同九時五十分小嶺ナミカの麓に達し、同十一時十分之を越え、行程約十四哩にして午後一時モウルベーの『バンガロ』に到る。モウルベーの中央稍〻偏西の河岸、灌木欝蒼の裡に、峭立せる綠泥岩に彫刻したる丈餘の裸體佛像は、雄渾古雅、頗る崇高なり、何時何人の手に成れるや。當村は人家約二十戸、『チーハン』の小なるもの處々に叢生す。ナミカ嶺はボトラ嶺と同じく、登降坂路共に緩なり。氣溫午前三十三度、午後は五十度內外とす。

二十日曇天、午前七時出發し、同九時三十分一部落を、同四十五分又一部落を、十一時三十分更に一大部落を通過す、其の西端より急坂に臨むも、距離小なり、上り盡せば坂上臺地を成す、午後一時三十五分坂を下る、直下に橋あり、カルギル橋と名づく。同一時五十分カルギルに着す、行程約二十四哩、駄馬後れて三時二十分始て來る。

カルギルは人家約百二十戸、郵便、電信兩局の設け有りて、山中レーに次ぐの大部落にして、西道のギルギットに捷徑を有し之に電線を通ずるを以て一の要衝たり。此地附近よりは、『ポット』人漸く減少してカシミヤ人多し。且つ此處にて乘駄馬を交換したり。

始めて針葉樹を見る

ドラスの城郭

二十一日午前七時二十分發、同八時より路は西に下り次で西南に上り、午後一時三十分、行程約十四哩を以て、カハルブに着す人家約二十戸あり。沿道は花崗岩多く、且つ坂路皆急なるも、竝に小なりとす。其の山上通過の際、朝來の曇天遂に雪を降らし、西南風と共に冷氣大に加はる、但し本日始めて針葉樹即ち小ヒムロギの疎生するを見たり。

二十二日曇、午前七時二十分發、行程約二十一哩、午後一時二十分ドラスに到る。人家附近合せて約三百戸、郵便、電信局を置き、又其南端に小城郭を認む。蓋し往年英國人の築く所とす。氣溫午前四十三度、午後五十度。

二十三日午前九時發、同四十分、一小部落を、十時五分一橋を過ぎて、右岸を上り、十一時十分マタヤンを午後一時七分、一橋を經て次で緩なる上傾斜の山腹道を過るに融雪の爲め騎行頗る惱む。斯て一時五十五分、行程約二十六哩、マチオイに着す。此處は人家なく、唯々官店及び電信修理所あるのみ。本日朝來微雪あり、且つ融雪の爲め路上泥濘、殊に坂路の昇降甚だ艱めり。